
ゼロのキモ男

アホリエッタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロのキモ男

【Nコード】

N3035U

【作者名】

アホリエッタ

【あらすじ】

主人公は普通のキモ男のオリキャラです。
最低男です。

原作に沿って進行させていましたが、既に崩壊してます。

いきなり召喚（前書き）

サイトの代わりに召喚されてしまったキモ男が主人公です。
前作とは違い、原作に沿った話で行きます。

アンチはナシ。

デレが出たりツンが出たりと言う感じでルイズも救済します。

いきなり召喚

ゼロのキモ男

ぐへへー。

オレはキモ男さんと言われて久しい中年メタボだぜ。

名前は山田タロウ。

某野球マンガの主人公と同じ名前だが似てるのは体系だけ・・・。
(T T)

そして、悲しいかな。

伝説の魔法使いとなる資格を得てたのよ。

三十路超えてDTだ。どーだ。驚いたか・・・。

女性の手も握った事無いぞ。

大半の男子が一回は女子生徒の手を握れるチャンスのあるフオーク
ダンスすら、

女性側に回され、男子と踊ったと言う悲劇の主よ。
フン、悪いか。

その上、高校の頃に好きな女に断られその挙句、
ラブレターを教室に張られてしまい、
女性恐怖症となっちまった。

それ以来、アニメや二次元世界の妄想キャラに恋する
引き籠もり手前のダメポ人間として生きて来た。

ヲタク生活するには金も必要だし、フュギアも高額だから、働く必要があったので、会社勤めはしてるがね。だが、週末はアキバ通い。

風俗なんて怖くて行けない。

テファたんハアハアのキモ男で悪いか？

さて、そんな毎日を送ってたオレが何故、こんな場所に居るのだ？

テファたんに召喚されるなら許せる。

だがオレの目の前に居るのは……。

桃髪爆発ツンデレ鞭娘だぞおお。ごるああ。

神様、オレが何をした？

真面目に働いて、ただヲタクして生きて来ただけのキモ男だろうが。どうせ召喚されるならテファたんにしてくれええ。

「ちょっと、アンタ。アタシの言う事聞いてる？」

ヤバ。

コイツはすぐに鞭を振るうんだ。

気をつけておかないと。

暴言吐くと倍になって帰って来るもんな。

くわばらくわばら・・・。

「失礼、お嬢様。私はタロウ ヤマダと言う貴族です。始めまして。もし宜しければお名前をお伺い出来ますか？」

ケツ、貴族と言って騙すのが一番よ。

下手に平民と言えば横暴になるもんな。コイツは。

「き、貴族??それにしては太った人ね？」

どこの貴族？

わたしはルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ。」

分かってるよ。ゼロ魔は既に二十巻まで読破してるわい。
サイトなら色々と恋愛感情持てるだろうが、オレ様にはムリ。

コイツは本当に我俣だし、ガキだ。ハッキリ言って、
しかしどうするべ。

異界から帰るにはワールドア覚えて貰うしか無いし、
手元には、携帯、パソコン、テファさんのフュギア、
ソーラー充電器。PSPにi-pod。

ガムとポテチ。

お金とカードはあるが。

ココではガラクタにもなんね。

どうするべ。。

おい神様、見てたら少しはチート技術を伝授してよ。
この異界ではオラ死んでまうど。

<呼ばれて飛び出てジャジャジャジャーン。ワシがネ申じゃ。>

「げっ？出たぞ。自傷、髪が。」

<字を間違えるな。

わしゃ神様よ。所でオヌシよ。チート技術が欲しいんか？>

「アイアイサーです。」

この異界ではヲタでは生きて行けません。
どうかチートにして欲しいっス。」

<フン、オヌシはどうしたいのじゃ。>

「出来たら脱走したいっす。

ツンデレ爆発桃髪鞭娘の使い魔だけはイヤです。」

<脱走は許しましえーん。

逃げたらサイトくんがコイツに苛められるじゃ無い？

可愛そうだよ。サイトくんが。>

「オレは可愛そうじゃ無いっつーの？」

<だって、お前The・キモ男じゃん。

世のため人のため、サイトくんのため。犠牲になってね♪>

「なら頼む。この世界で死ななくても済むチートをプリーズ♪」

<ふーん。じゃ、そのテファさんのフィギアくれるならいいよ？>

「えーっ、コレ？だってテファさんはオレの夜目ですよおお。」

<そんならチートはナシ。この世界で無能使い魔して鞭で叩かれて暮らしてね♪>

「ぐっ・・・ワカリマシタ。ではテファさんを・・・元気でね。テファたん・・・。」

<情けない顔すんなって。

んじゃ、いいブツ貰ったからワシも奮発しちゃうぞおお。

タロウ ヤマダ。お前のチートは・・・>

「ドキドキドキドキッ」

<土のスクウエアの魔法じゃ。

これでギーシュとの決戦も互角以上。

もしルイズに叩き出されても錬金で暮らせるぞ。>

「おおおお。錬金が出る。最高だ。貴方は最高のネ申だああ。」

<ヒューヒュー。ワタシハ神よおお♪♪アングトー♪♪>

「そろそろ桃髪がキレそうなんですが？大丈夫っスか？」

<ああ、大丈夫でっす。時間止めてたもん。>

「全然気づかなかった。やっぱり神様でしたね。色々ありがとう。」

<くんじゃバイバイキーン。>

ようやく神が消えたか。

しかし土魔法のスクウエアは有難い。

コレで色々と錬金が出る。

テファさんのフィギアも作れそう。グフフフフ。

ヲツ、時間が動き出したな。桃髪になんて言おう？

「失礼、レディ。私はロバアルカイエに住む貴族です。」

ちなみに魔法は土のスクウエア です。」

「ロバアルカイエから来たの？とんでも無い田舎モノね？」

「お嬢さん、イヤ ミス ルイズ。」

初対面からあまり他人に暴言を吐くのはどうかと思いますよ。
他国の貴族に対する言葉とは思えません。」

「そ、そう、ごめんなさいね。意外とダンディね。太ってるけど。
マリコル又みたい・・・。」

「ぐっ。人が気にしてる事をズケズケと言わないで欲しいです。
所でミス ルイズ。」

自分はと言う用件でココに連れて来られたのですか？
まさか使い魔とか言いませんよね？」

「その使い魔の召喚儀式なのよ。アンタ、わたしの使い魔でしょ？」

「はあ？仮にもロバアルカイエで土のスクウエア の魔法が出来る
自分が使い魔？」

失礼ですが、お嬢さんの魔法はどのレベルですか？
自分よりも低い魔法使いに仕える気はありませんよ。」

「くっ、ごめんなさいね。アタシは無能のゼロよ。
初めて成功したのがこの使い魔召喚の儀式なの。」

「ほう。で、スクウエアの自分を使い魔にしたい。凄い常識ですね。
我が国でも聞いた事ありませんよ。」

魔法を使えない人がスクウエア クラスの魔法使いを使い魔にする

なんて。」

「それなら、どうしたらいいの？」

「アタシだって、人よりは竜とかファルコンとかを使い魔にしたいわよ。」

このままじゃなし崩しで使い魔直行だよな。

あの奴隷鞭だらけの世界なんて、オラにはムリ。死ぬわ。

それにコイツのパン2洗うなんてゴメンだしね。＞世のルイズファン、ゴメン。

やはりオラは双丘のボンキュッボンだわさ」

「ちょっと、アンタ。何か失礼な事考えていない??」

ヤベツ、ツンデレでもカンはいいいんだ。

適当に誤魔化さないとね。

「失礼。でも自分クラスの魔法使いの方っていらっしやいます? ちなみに自分、金を錬金出来ますよ。」>多分。

「き、金!!何でそんなバカな事が出来るのよ。ウチのシュヴルーズ先生だってムリなのよ。」

「それがスクウエア なんですよ。ミス ルイズ。」

「くっ、口惜しいわね。でもアンタはわたしの使い魔なの。絶対に。」

「冗談言われては困りますよ。でも、困りましたね。」

さすがのオレでもロバアルカイエまで歩いては帰れません。
いきなりの召喚でしたから。

監督の方は誰かいらっしやいませんか？
その方と相談の上、考慮しますから。」

「失礼、ミスタ・タロウ。

自分がこのトリステイン魔法学園の教師、ジャン・コルヴェールと言います。

今回は突然の召喚で驚いてと思いますが、何とか考慮して頂けませんか？」

「はあ、どうして自分が児童のために身を犠牲にしないといけないのですか？

自分も国では結構な身分です。何分にもこの地では証明不可能ですがね。

ま、お疑いと思うでしょうから、一つ錬金で証明しましょう。」

「「錬金」」

何と！そこには金の塊が・・・。

（やべええ。マジで錬金出来たぜ。これで万一時でも食いつぱぐれは無いな。）

「ほ、本当に金が。凄い。」

「ほほう。素晴らしい魔法ですね。

確かにコレではヴァリエール嬢の使い魔になれと言われても拒否されるのは当たり前です。

しかし困りました・・・。」

「それでは、コチラの学校の最高責任者の方と相談の上、判断しませんか？

自分もこの土地は見知らぬ土地です。」

「そうですか・・・では校長のオールド オスマンの所に行きましよう。」

「オスマンと言う方は男性の校長ですか？」

「そうですが・・・何か？」

「でしたら、この金塊をプレゼントに鍊金して持って行きますので、御待ちください。」

（確かあのオッサン、ドスケベだよな。さすがに大胆なのはアレだから・・・。

「見ろのヴィーナス」辺りにして置くか・・・。）

チーン、鍊金♪

見事、構想通りの「見ろのヴィーナス」が金の輝きを持って鎮座してた。

「ウム。中々淒いのが出て来たのお。
しかしアレをワシにプレゼントとは・・・。
楽しみじゃ」

オスマンの待つ学園まで三人はブツブツと話し合いながら移動した。

「それにしてもミスタ タロウの錬金は素晴らしいですね。
その彫像など、国宝クラスでもおかしく無いですよ。」

「く、くやしいけど、本当にね。」

どうやったらそんな淒い魔法使いになれるのよおお。
わたしだって本当に努力して生きて来たのよ。

それなのに、どうしてもコモンマジックすら出来ないゼロなの。」

「ミス ルイズ。魔法はイメージなんですよ。
自分の魔法もイメージが無かったら、こんな錬金は素質があっても
不可能です。」

「ほほう。素晴らしい考えですね。我々教師でも考えつかない思考
です。」

「そのためには色んな思考が必要ですよ。柔軟なね。
固まった思考では人間伸びません。」

「ムムムム。そうですね。中々教えられる言葉です。」

「でも、どうしたらそんな魔法使える様になるのよ。もう分からないわ。」

「ミス ルイズ。貴女は恐らく固まった思考に囚われているのですよ。」

貴女の魔法はどう言った失敗を起こすのですか？」

「全部爆発よ。コモンすら爆発してしまうの。（怒）」

「フフン。爆発？」

普通失敗したら、何も起きないのが本当の失敗ですよ。

ミス ルイズ。

貴女の魔法は失敗ではなく、爆発に特化した魔法ではありませんか？」

「ば、爆発に特化した魔法って。ンナのある訳無いじゃ無い。」

「でも現に貴女の魔法はすべて爆発する。」

そう考えるのが普通ですよ。コルヴェール先生？」

「そうですね。確かにもう少し柔軟な考えを持ってミス ルイズを指導するべきでした。」

特化した魔法ならば、それに沿った指導があると思いました。

いや ミスタ タロウ殿。素晴らしい時間となりました。感謝します。」

「ご参考になったなら嬉しいですよ。おっ。そろそろ学園では？」

「ウム。着きました。では校長室に案内しますので、着いて来てください。」

ルイズの魔法系統は虚無^{ゼロ}だもんな。

コモンすら出来なくて八つ当たりの毎日だったサイトは可愛そうだが、万イチなし崩しで使い魔にされたら、

オレが鞭の犠牲者だどおお。

絶対にイヤだ。コイツの使い魔だけは。

そのためにも、コルヴェール。オスマン。

この二人は味方にしないと・・・。

「失礼します。オールドオスマン校長。

ジャン コルヴェールです。

ミス ルイズの召喚魔法にて異国のメイジ、タロウ ヤマダ殿が召喚されてしまいました。

協議のため、オスマン殿に仲裁をお願いしたく参りました。」

「始めまして。自分はロバアルカイエから召喚されたいらしい異国の貴族、

タロウ ヤマダと申します。オールド オスマン殿、始めまして。」

「ご丁寧な挨拶をありがとうございます。ワシがこのトリスティン魔法学園の校長、オールドオスマンじゃ。

遠いロバアルカイエから突然の召喚。本当に申し訳なかった。タロウ ヤマダ殿。」

「ええ。さすがに気づいたら見知らぬ土地に立ってたので、驚きましたよ。」

お、コレは召喚の場で私が鍊金して作った金の彫像です。
お近づきの印にオスマン殿に進呈致します。部屋の飾りにいかがですか？」

「ほほう。イヤ見事な鍊金です。ありがとうございます。ミスタ
タロウ。」

コルヴェール殿。鍊金するのを目撃されてたのですよね？」

「モチロンです。オスマン校長。一発で金に鍊金。そして再度鍊金
し、この彫像でした。」

素晴らしいメイジです。このミスタ タロウ殿は。」

グヘヘヘ。少しはうまく誘導出来たな。

少なくともサイトみたいになし崩しの使い魔儀式は避けられるだろう。

だがどうしよう？

ガンタのルーンは魅力的だ。

何せ武器なら何でも使えるらしいもんな。

戦闘機ですらベテラン同様に扱えるのは凄い。

普通、何百時間も地獄の訓練してやっと飛ばせるのが飛行機の技術。

それが操縦桿を握ったら一発。うーん、悩む。

いい方法でルーンが欲しい・・・。

「でも、オールドオスマン・・・。使い魔が居ないと私は留年してしま
うんです。」

何とか出来ませんか？お願いしますうう。」

もう半泣きでルイズはオスマンに談判してる。

ふー、少しは譲るか・・・。

テファたんに会うのはもう少し先だな。

この学園に居ないと、物語には絡めないし。

「分かりました。オスマン校長。ではこうしませんか？
使い魔の契約はしても宜しいです。確か使い魔はメイジと共に居る。
そうでしたよね？」

「ウム。そうじゃ。」

「ですが、さすがに男性のメイジと女子生徒が同居するのはどうか
と思います。」

そこで提案なのですが、
コチラの土メイジ教師と一緒に土の教師見習い兼使い魔と言うのは
いかがでしょうか？」

「ほほう。中々魅力的な提案ですな。して内容は？」

「まずルイズ嬢と使い魔の儀式は受け入れます。非常時とか遠征の
時はルイズ嬢に帯同します。」

ですが普段は魔法学園の聴講教師として土魔法の授業を受け持たせ
て欲しいのです。

給与はモチロン戴きます。そして住む場を提供して頂きたい。
いきなりの召喚で、身の回りのモノは全くありませんからね。

ルイズ嬢の魔法の指導も致します。これでも祖国では一端のメイジ
でした。

もちろんコモンの指導も大丈夫です。これで妥協は出来ませんでし
ょうか？

オールド オスマン校長殿。」

「ウム。ではそれでお願い出来ますか？ミスタ タロウ殿。承諾
して頂けるなら、

貴殿の提案はすべて飲みます。給与並びに住居は学園の教師に準じた額で応じます。」

「結構です。ではそれをお願いします。ミス ルイズ嬢、いかがでしょう？」

「グッ、ワカリマシタ。オールドオスマン、そしてタロウ ヤマダ殿。」

使い魔に応じてくれるなら、我慢出来ます。

ではコントラクト・サーヴァントの儀式を進めても宜しいでしょうか？」

「結構です。確かルーンが刻まれるのですよね。

かなりの痛みを感じるらしいので、倒れる可能性もあります。

すいませんがソファアの前に立たせて貰います。

ここなら倒れてもケガは無いでしょうから。」

「では、タロウ ヤマダ殿、ミス ヴァリエール嬢。

「コントラクト・サーヴァント」の儀式を。」

ルイズはオレの顔を見てモロにイヤそうな顔して立ち、儀式の呪文を唱えだした。

オレだってイヤだよ。

ツンデレ桃髪爆発鞭娘との生活は。

でも仕方ないだろう？

某神との約束なんだから。

「あんだ、感謝しなさいよね。

わたしにこんな事されるなんて普通なら絶対一生無いんだから。」

一生でも何でも早く終わってくれ。

オレはお前と暮らす気は無いんだ。
そして何時かはテファさんとハアハアするんだーい。

「御意です。ミス ルイズ。」

一応返事しとかないとね。

キレたらこいつ爆発魔法を放ちやがるから。
ホンマに何て危険人物に虚無^{ゼロ}を与えたのだ。
始祖ブリミルは無能だわ。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。
五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、私の使い魔と成せ。」

ルイズは朗々と呪文を唱えすとオレの額に杖を置いた。
そしてゆっくりと顔を近づけて来る。

ヤベ。アップで見ると顔だけはコイツ、美人なんだよね。
コレでツルペタで無ければ万歳なんだが。

虚無^{ゼロ}に加え、胸まで虚無^{ゼロ}だもん。オカンのカリンもツルペタだったよな。

ヤッパ、ツルペタはカリカリしたヒス女になるのか？

ルイズはやがてオレの顔を掴み、自分の唇をオレに押し付ける。
ぐへええ。オレのファーストキッスだああ。

次いでだ。舌も入れてしまえええ。
腕を腰に巻きつかせ、腰と腰を密着。

グツと引き付けて・・・

唇を割ってオレの舌を侵入させる。

どうせ痛い思いするなら、イイ思いしてもバチは当たらネだろ？

ぐちゅぐちゅと舌と舌を絡めたら、ヤツの目、トローンとしてやがる。

ヤベ。イツてしもうたか？

「お、終わりました。」

珍しくキレて無いぞ。ツンデレがああ。絶対にキレると覚悟してたがな。

まっいいか。儲け儲け♪

「サモン・サーヴァントは何回も失敗しましたが、コントラクト・サーヴァントは成功しましたね。」

コルヴェールは嬉しそうに言った。

「グツ、すいません。かなりの痛みが手に出てますので、ソファアに腰掛けさせて戴きます。」

やはりかなり痛いな。まっ、零戦飛ばすためよ。我慢我慢♪

「フム。では今後の事はまた協議しましょう。」

ミスヴァリエールは自室に帰ってください。

翌朝にでも、またココで協議します。

ミスタ タロウは当座、学園の客室に寝泊りしてください。

本日はメイドに食事を運ばせます。フロは本日は我慢して欲しい。準備もしてありませんので。」

「グフツ。了解しました。では ミス ルイズ。また会いましょう。」

「え、ええ。私の使い魔 タロウ ヤマダ。またね・・・」

ヤツめ。惚れては居ないだろうな？赤い顔してやがった。舌をブチ込んだのに怒髪しなかったぞ。

こうしてゼロ魔でオレも使い魔する事になってしもった。ま、楽しんで生きるわい。

いきなり召喚（後書き）

主人公の行動が本作キャラに対する愛情です。

またルイズも救済します。

できる限りのキャラに愛を注ぎますが、ブサイクキャラの主人公では。

ネ申に貰ったチートの土魔法のみが主人公の命綱です。

では。

トリアングルではチートにしては苦しいので、スクウェア に設定しました。

みくみ。にしてあげる♪（前書き）

すみません。

アルヴィーズの食堂の人形を。クたんにしました。

みくみ。にしてあげる♪

その夜、やはり手に刻まれたルーンはガンダールヴだった。試しにカッターナイフ握ったら、ルーンが光って武器の説明し出した。

ヤベエ。食事の時でもナイフを武器と思ったら光出すもんな。

何か手袋でもしておこ。

ワルド辺りに目を付けられたら最悪じゃん。

車に乗る時使ってた指出しのグローブがあったから、コレでガンタ隠しておこっと♪

でも、退屈だな・・・。

ネットはできね。

テレビはねえ。

時間が余って仕方無いどおお。

と、思考のループしてたら、誰がドアをノックして来た。そう言えば腹減ったど。メシだったらいいね？

「失礼します。ミスタ タロウ ヤマダ様。お食事を持って参りました。」

現れたのは、シエスタだった。

「あ、ありがとうございます。丁度お腹が空いてたので助かりました。」

嫌われると最悪だから、丁寧にあやまりとかないとね。
異界では味方は、いくら居ても足りません。

「あ、どうも丁寧に……。(真っ赤)
では、コチラに置いて置きますので、ごゆっくりどうぞ。」

「いえ、食器は部屋の前に出して置いたらいいでしょうか？」

「ハイ。それで結構です。私達が持ち帰りますので。」

「ではそうしておきます。ありがとうございます。」

「い、いいえ。ではごゆっくり。ミスタ タロウ ヤマダ様。」

シエスタはご飯を置くと、そそくさと部屋を出て行った。

中々エエのおお。やはり女性は父^{バスト}じゃ。

だがオレには高値の花だろうね。(T—T)

キモ男だもん。(T|T)

まあ頑張ろう。

一人位はヨメ貰えるかしんねえしネ。

メシ終わって、寝るだけの時間なんだが。

全然眠れない。とにかく退屈だ。

はあ、ネットして。電源はソーラー充電装置あるから何とか出来るけど、

肝心のネットがねえ。

ネ申様。ネットをプリーズ!!

<呼んだ?>

「おおおおお、さすが自分のネ申様。

お願い、今度、ミクさんのフュギアを作って渡すから、この世界でネット出来る様にしてええ。

時間が長くて退屈でつすうう。」

<男がキモイ言い方すんなって。

そうじゃな。んなら、たまにフュギア作ってワシにくれ。

オヌシのテファたん、中々ワシの神仲間には好評じゃった。

アレをたまにくれると言うなら、光通信の無線LANで接続してくれるぞ。

もちろんプロバイダはワシラの神通信じゃ。どうじゃ？>

「おおおお。ソレで頼みます。フュギアも作りますので、是非是非プリーズウウ。」

<フム。では願いを適えるか。週末までにフュギアを作ってくれよ。

では、開通じゃ。ノーパソを起動してネットに繋いで見よ。接続されてるハズじゃ。>

オレはノーパソを起動し、ネットアイコンをクリック……。

おおおお。懐かしのヤフが表示された……。時間がこの時間なのは笑えたけど。

でもコレで退屈から解放されるどおお。

神様、ホンマにサンキューです。いくらでも余目を作っておきます。

「ネ申様。ありがとうございますぞえますだ。これでこの世界でも生きて行けます。

ヨメはお任せください。力作を週末までには準備しておきます。」

<ウム。頼んだぞ。ワシラも楽しみじゃ。
プロバイダ料金は、フュギアで相殺しておく。良いな？>

「モチロンです。定期的にヨメをお渡ししますうう。」

<では、また相談がある時は呼べ。余程忙しく無い限りは出て来てやる。

それではの。バイバイキーン♪>

あの神、バイキンマンが好きなんか？
ま、いいや。これでネットだ。フムフム、ヤフニュース見てたら・・
。

東京都。。市在住の山田タロウ氏が、家族に無断で失踪。
犯罪に巻き込まれた可能性も高く・・・。

一応ニュースになってたか。
書き込みしてもアホ扱いされるし帰る事もデキネから、シカトする
しかねーな。
ま、いいや。二次SSでも読んで楽しもうっと♪

それから二時間程度ネットしてたら、バッテリーが上がってしもた。
明日は充電しておかないと。(T-T)
もう今日は寝るぞ。

同じ頃、トリステイン魔法学園の女子寮では・・・。

はああ、何とか使い魔召喚は出来たけど、まさかスクウェアメイジとは。

しかも金を錬金出来る凄腕メイジ。

ブサイクだけどね。

でも拒否されなくて良かったわ。

これでわたしも二年に進級出来る。

そ、そう言えば、ナ、ナンだったの？アレ？？

儀式の口付けの時、わたしの口に舌が入って来たわよ。

オスマン校長の前だったから、怒る事も出来なかったけど。

ま、仕方ないわ。

事故と思って諦めましょう。

ノーカンよノーカン。アレは。

でもさすがに魔法の知識は凄いわね。

コルヴェール先生もビックリしてたから。

明日からは使い魔兼先生か……。タロウ ヤマダ……。

変な名前の使い魔……。

寝ようつと♪

ルイズも大人しく寝る子だった。

そして翌朝。

ルイズとタロウは連れ立ってオスマンの待つ校長室に来てた。

「では、タロウ ヤマダ殿。

貴方はココに居る土教師、シュヴルーズ先生と共に錬金関係を教えてください。

ミス・シュヴルーズ先生。こちらの方が異国のメイジ、タロウ ヤマダ殿です。

土魔法のレベルはスクウェアです。そこにある金の彫像が昨日彼が錬金したモノです。」

「始めまして。ミスタ タロウ ヤマダ様。

土メイジのシュヴルーズです。魔法のクラスはトライアングルです。ミスタヤマダ様の錬金は凄まじいですね。是非、生徒にも素晴らしい錬金魔法を教えてください。

それと・・・。」

「ハイ。

自分はロバアルカイエからコチラに居るミス ヴァリエール嬢に召喚された使い魔でもあります。

教師兼使い魔と生徒の皆様の説明して頂いたら助かります。

コチラの魔法の教え方はまだ理解していませんので、

今日はルイズ嬢の隣に立って勉強を見学します。」

「分かりました。ではその用に取り計らいます。

今日の授業では是非、私にも錬金を見せてくださいね。」

「ハイ。ミス シュヴルーズ先生。間違いなく。」

「ウム。では、ミス シュヴルーズ、ミス ヴァリエール、ミス タロウ。」

食事を終えたら、授業などの準備をしてください。
ミス ヴァリエールも宜しいですね？」

「は、ハイ。では食事に行きます。失礼します。」

「ミスタ タロウ殿も食堂で食事をしてください。準備は出来ています。」

それとフロなんですが。」

「あ、フロは自分で錬金で作ります。部屋の外の一角をお借りしても良いですか？」

「では、授業が終わる頃までに居室の準備をしておきます。
終わりましたら、コチラに来てください。」

「分かりました。では、オールド オスマン校長、失礼します。」

「ウム。頑張ってくれたまえ。」

オレは校長室を出るとルイズと共に食堂へと向かった。

「ミスタ ヤマダ。今日からわたしの使い魔兼教師なんですね？」

「そうです。非常時や使い魔の儀式祭典がある場合は貴女の使い魔として活躍しますが、
普段は教師として働きますので、普段はタロウ先生とも呼んでください。」

それと、コモンマジックが使える様にしますので、本日夕刻、広場

で練習をしましょう。

貴女の魔法を見ないと指導も出来ませんからね。

まずは爆発をコントロールする方法から考えます。」

「分かりました。ミスタ タロウ先生。宜しくお願いします。あ
っ、ここが食堂です。

今日はわたしの隣に座ってください。」

「了解しました。ミス ヴァリエール。」

何か調子狂うな？ビクビクしてたのが、おかしくなっちゃったよ。
でも注意しないと。コイツの爆発魔法は即死クラスだ。用心しないと・・・。

トリスティン魔法学院の食堂は、

学園の敷地内で一番背の高い真ん中の本塔の中にある。

テーブルはやたらと長いのが三つ。百人は優に座れるだろう。
ルイズ達二年生は真ん中だ。

一階のロフトの中段があり、ソコでは教師が歓談に應じてる。
自分も明日からはアソコに座るのだろうな。

ルイズに即され、オレも椅子に座る。

ポツチャリしたヤツが少し睨んだが昨日の騒ぎ知ってたのか、
黙って離れて座ってた。

「……偉大なる始祖ブリミルと女王陛下よ、
今朝もささやかな糧を我に与えたもうたことを感謝致します。」
「」

ちつともささやかで無い豪勢な料理にさすがのオレもゲップが出そうだった。

これじゃメタボは加速するヤツは加速すんな？

こうしてささやか？な食事を終えたオレはルイズと別れ、
ミス シュヴルーズの待つ教員室へと足を運んだ。>前もって教えて貰ってた。

時間になり、ミス シュヴルーズと一緒に教室に入り、オレはルイズの隣に立つ。

「皆さん、春の使い魔召喚は、大成功の様ですね。
このシュヴルーズ、こうやって春の新学期に、様々な使い魔達を見るのがとても楽しみなのです。」

シュヴルーズはルイズの方を向いて・・・。

「それと皆様にご紹介致します。ミス ヴァリエールが異国から召喚しました、異国のメイジ。

タロウ ヤマダ殿です。彼は異国の方ながら素晴らしい土メイジです。

召喚の場に居た方なら彼の鍊金も見たと思います。今日から私と共に皆様に土メイジの魔法を教えて頂く事になりました。

また彼はミス ヴァリエールの使い魔も兼ねております。でも失礼

な事は言わないでくださいね。」

そうミス シュヴルーズが紹介してくれたので、オレも一言言うべきと思い声を出した。

「エー、今、ミス シュヴルーズ先生からご紹介のありました、タロウ ヤマダと言います。

皆様に土メイジの魔法を教える事になりますが、コチラの教え方を細かく知るまで、ルイズ嬢と並んで学びます。

錬金、そして彫像は特に得意です。宜しくおねがいします。」

「えー、ご覧の通り異国の方ですが、今日は皆様に凄腕の錬金を見せて貰いたいと思います。

では、ミスタ タロウ様。お願い出来ますか？」

「お任せください。えーと……。その綺麗なお嬢さん、すいませんが私の錬金のモデルになってください。」

（一応御主人様だから、ゴマはする必要あるべ。）

「え、わたし???も、モチロンいいわよ。フン、キッチンと綺麗に作るのよ。」

「お任せください。そこに立ってて貰うだけで結構です。では……。錬金!」

すると、そこに何て事でしょう。ルイズと瓜二つの金で出来た彫像が完成してたのです。

ルイズは思わず綻んでしまいました。

「こ、こ、こ、これってわたし？この金の彫像・・・。」

「『『『絶句。』』』』」

「いかがでしょう？ミス・シュヴルーズ先生。」

「素晴らしいですね。少しディクツドマジックかけさせてください。まあ、素晴らしい純度ですね。」

それにヴァリエールさんにソックリ。羨ましい出来です。皆様もミスタ タロウに負けない鍊金を目指してください。」

オレは鍊金した彫像をルイズに渡すと、ニコニコしてるルイズ見えました。

これでプライドが高くなくて乳がデカかったらなああ。

顔はいいのよ。ホンマに。

ただ、残念が^{ベチャバイ}残念だけに。惜しい人だ。はあ・・・。

オレの鍊金でルイズの爆発イベントは流れたらしい。ま、迷惑なだけのイベントは無い方がヨシだわさ。

さつて昼飯だ、メシは元気の活力♪
相変わらず豪勢な昼飯。

オレは一人離れた場でポツンと一人食べてた。

さすがに毎回若い生徒に囲まれて食べるのは気疲れすんのよ。
三十路は若くは無いわ。

そして食べて茶を飲んだと、何やら怒ってる男子生徒が居る。

相手は……。昨夜、晩御飯を持って来てくれたシエスタでは無いか。

とりあえず何とかしてやらんと。彼女が泣きそうになってる。

日本人の血を引いてるからね。

やはり同胞は助け合うべきですよ。

「失礼、どうしました、メイドのシエスタさん？」

「おや、鍊金マスターの ミスタ タロウ先生では無いですが。

ボクはギーシュ・ド・グラモン。土のドットです。

本日は見事な鍊金を見せて頂きありがとうございます。」

「はあ、そりやいいけど。所でギーシュ君？彼女が何か粗相でもしたのか？」

何やら君が怒鳴ってたみたいなので、心配して見に来たのだが。」

「いえ、ボクが香水を落したのを彼女が拾い、

知らないフリをして欲しかったのに、彼女は気を利かせてくれなかった。

おかげで二人のレディにボクが二股していると誤解されてしまったのですよ。」

はあ。さすがに呆れる言い訳だな。マリコル又なんざ、脳血管がキ

レそうだぞ。

「ギーシュ、お前が二股かけてるのが悪いんだ！」

「そうだ、そうだ。」

ウンウン。モテナイファイターズの心の叫びは時代も環境も世界が代わっても心は同じだ。オレも同じ気持ちだぞ。

「ギーシュ君、

君は自分の失敗をメイドとはいえレディに押し付けて誤魔化そうとしてるのか？

男として最低だね。君は。

いいか？ギーシュ君。君は確かにイケメンだ。

男から見てもイケメンと認める。黙ってても女性は付いて来るだろう。

だが良く考えて欲しい。

君みたいな人間がそうやって、世間の子女を食い散らして、モテナイ連中には女性と付き合う事も出来なくなるのだ。

分かるか？そのモテナイ連中の苦しみが。ああ、そのポツチャリ君。

君も一言言いたいだろう。存分に言いたまえ。」

「ぎ、ギーシュウウ。何でお前はそうやって、何時もいつも、女性を泣かせるのだ？

おかげでモテナイ俺たちはいつも、寂しい青春を送ってるんだ。いい加減にしろいうう。」

マリコルヌの心の叫びはさすがのギーシュにも届いた・・・ハズだ・・・
多分。

だが、それで済まないのがギーシュオリティよ。

「フツ、ボクがモテてる訳では無い。
あのレディ達がボクの薔薇の存在に気づいて近寄って来るだけだよ。
マリコルヌ。」

さすがギーシュだ。そこまで自信持つてバカ言える根性は褒めてやりたい。

だが、空気読んで言えよ。

周りの空気がキンキンに冷えてるのが分からんのか？
ドリルの形した髪の毛の女子生徒（多分モンモンだろうな。）は
ワインビンを持ってスタスタとギーシュの横に近づいてる。

かなりヤバイかも？

オレは仕方なしに、女子生徒からワインビンを取り上げた。

「いくら何でもコレで殴ったら彼も一たまりも無いよ。止めたまえ。」
「

「お願いします。ミスタ タロウ様、このバカは一回死ぬべきですよ。

「
モンモンの南極の氷よりも冷えた言い方にさすがのギーシュも真つ青。」

「オレはシエスタにもう大丈夫だから消えろ、と合図して、シエスタを帰らせた。」

「このままでは剣呑な空気で昼を過ごしてしまう。
オレは一計を考えた。」

「みんな、確かにギーシュは間違ってる。」

「この様な美しい彼女を泣かせて最低だ。そう思うだろ？皆。
だが、彼も何時かは気づくと思う。」

「今日はオレが凄い錬金魔法で皆を楽しませてやる。」

「だから、今回の事は全員、水に流してくれ。」

「オレはそう言うのと、アルヴィーズの食堂の人形に錬金をかけた。
形成した人形は。
皆のヨメ。」

「初音ミ。ファミリーだああ。」

「アルヴィーズ食堂の人形が、
ミ。たん、鈴音リ。ン。巡音。カに変身。
四人のボーカロイドが歌いだしたのだ。
あの名曲を。。。」

みく。くにしてあげる♪

一瞬静まったアルヴィーズ食堂は次の瞬間、
うおおおお！ブラヴォーと大騒ぎ。

いや、やり過ぎたかな？
さすがにミク。んはカワイイ♪

ネギを錬金して渡してあげたらハグハグと食べた。
癒されるうう。

ギーシュは完璧に固まっていたが、オレにツカツカと近寄ると・・・。

「先生。素晴らしい錬金魔法でした。ボクは感動しました。
今まで自分が薔薇なら、他はどうでもいいと思ってましたが、目が

覚めました。

どうかボクを弟子にしてください。

ボクはあんな素敵なレディは見た事も作った事も聞いた事ありません。」

ギーシュ完璧に感動してんな。

オイ。そのデブ。ミ。たんを持ち帰ろうとすんな。

ミクたんはココの主だぞ。一発殴っておかないとな。

後でオスマンに、アルヴィーズの食堂の人形を形成し直したと聞いて、見たらデレデレしてた。

問題は無いだろう。

こうしてギーシュ対決は。クたんハアハア事件とすり替わってしもた。

その後、夜になるとアルヴィーズの食堂には神様連中が

毎夜ミクたんコンサートを応援に来てるとか。

天国の管理は大丈夫??

その後、アルヴィーズ食堂はミクミク食堂と呼ばれる様になったとか。。。

みくみ。にしてあげる♪（後書き）

ギーシュとの決闘はムリっぽかったので、ミク。んを作りました。
神様の溜まり場になったとか。

すみません。

一応。で字を誤魔化しております。

純金の純度、知識不足のため、曖昧な表現に差し替えさせて頂きました。

マグマフレーム様、指摘ありがとうございました。

http://blog.syosetu.com/index.php?item_id=536

のお知らせがあつたため、歌詞は削除しました。

お許しを。

キモ男の黄昏（前書き）

キモ男の夕暮れのひと時です。

キモ男の黄昏

ルイズは呆れてた。自分の使い魔に……。

な、何なの？アレって。

まさかアルヴィーズの食堂の人形を変わったコスチュームの女の子の人形に。

それも歌いだすなんて。。

普通じゃ無いわ。

でもカワイイ子だったわね……。

む。それよりも今日は彼がワタシに魔法の授業をしてくれるの。

はあ、せめてコモンマジックだけでも出来る様になりたいわね。

下手にコモン使ってドアを破壊した事、数え切れず。おかげでロックも出来ない。

フライも使えないから、何時も歩いてばかり。

おかげで足の力と走る事は他のメイジには負けないわ。

傲慢にもなんねえけど……。

グダグタと考え事してたら、彼が来たわ。

相変わらずブザイクね。オマケにお腹も出てる。

もう少し身体を鍛えたら、少しは救われるのにな。

ま、いいわ。

他人の事より自分の魔法よ。

何時かは両親や家族に魔法を使える様になりました♪と手紙書きたいモノ。

オレはルイズに魔法を教えるため、ヴェストリの広場に向かった。
本当ならサイト対ギーシュの決闘が起きた場所。

今回は決闘は起きず、ミクたんフィーバーが食堂で起きてしまった。
やはり萌えは世界を救うわね。

そう言えば「マク。ス」でもランカたんが、歌って戦争を止めてた
ど。

うーん、萌えはもしかして、この世界も救えたりして・・・。

（後年、それが事実になるとはタロウも予想していなかった・・・。）

バカな事は考えるのヤメヤメ。

オレはノンビリとネットしてココで帰れる日が来るまで暮らすんだ
い。

まあ使い魔&教師の身分を守るためにもルイズには何とかコモン程
度は出来る様に誘導するか。

さすがにいきなり「君は虚無です」^{ゼロ}とか言い出したら正気を疑わ
れるもんね。

適当に爆発をコントロール出来る様にして魔力の微調整が出来る様

にする。

そうして後はイメージが出来る様に精神誘導して、コモンマジックが完成。

うまく行くといいねええ。

ま、気長にやるべ。

幾多の有名貴族メイジが彼女の指導をして、何も出来なかったのだ。いきなりハイ魔法出来ました。では、他のメイジがたまらんだろ。まずは爆発コントロールだな。あのままでは周囲が危険で危ない。

考えながら歩いてたら、広場に着いてた。

ルイズは既に待ってた。真剣な目をしてる。。

「ルイズ嬢、お待たせしてすいませんでした。では、今日の予定をお話します。

まず、貴女の普通のコモンマジックの詠唱をして見てください。

モチロン人とかモノに向けてやると、爆破して危険です。

そうですね。そこらに落ちている石を目標にやってみてください。

その後、今後の事を考えて指導します。」

「分かりました。タロウ先生。では、ライトをして見ます。目標はあの石。

ライト！」

すると、ぢゅどおおおおおおおん♪

小石は粉も残さず粉碎。大穴が開いてしまった。

ライライ。どこの過激派やテロリストだよ。ありゃヤバイ。
日常でコレでは、周囲が迷惑する。

危険すぎる。はぁ、仕方ない。

まずは黒板をこの場に錬金し、チョークで指導方法を教える事にした。

「ルイズ嬢、貴女の魔法は普通でも危険です。

このままでは、他人の迷惑所か、殺人レベルです。

まずは貴女は魔力を絞る事から覚えてください。

今のままでは、コモンマジックでも危険で使えません。

魔力のコントロール方法ですが……。少し待っててください……。」

オレは水鉄砲を錬金、水を入れてルイズに説明する。

「今、私が作ったのは水鉄砲と言う子供のオモチャです。

これなら危険はまったくありませんので、説明もし易いのです。

まず、私の水鉄砲の威力を見比べてください。

最初は勢い良く押します。すると威力のある水が出ますね？

これがルイズ嬢の使った魔法の威力と同じと思ってください。

次に見ててくださいよ。ゆっくりとポンプを押します。

すると・・・タラタラと水が出るだけでしょ？

ルイズ嬢はこの調子に出来るまで、魔力をコントロールしてください。

この水鉄砲は差し上げますので、お風呂などで遊びながら、イメージを掴んでください。

何か質問は？」

「先生、この水鉄砲みたいに、魔力をコントロール出来る様になったらコモンマジックも出来ますか？」

「絶対とは今は言えません。

ですが、周囲に対する危険度は減るでしょう。

今のルイズ嬢の魔法では、迷惑所ではありません。

本当に他人を殺してしまいますよ。このままでは。

ですので、まずはコントロールです。

それからですよ、貴女の魔法指導は。」

人を殺してしまう。

わたしはそれを聞いて真っ青になってしまった。

そう言えば、今まで他人にケガをさせた事もかなりある。

今、思えば、良くも死人が出なかったものと冷や汗が出て来た。

言う通りにしよう。

まずはイメージだ。

この水鉄砲を全力で押して出る水の勢いがわたしの今の魔力。それをチヨロチヨロと垂らす感じにするのが今後の目標。

ヨシッ。分かったわ。

今までは全力を尽くす事だけ考えてたから、それを思えば難しくは無いだろう。

イメージだ。まずは。この水鉄砲を持ち帰りお風呂で練習だ。

「先生、ではこの水鉄砲を持ち帰り、イメージを掴んで見ます。そして他人の迷惑にならない場所で、魔力のコントロールを試して見ます。」

「ハイ。では頑張ってください。でも、イメージがしっかりと確立するまでは魔法は禁止します。」

練習はわたししか教師が居る場でのみ使ってください。危険ですからね。

理解してくださいよ。」

「分かりました。それまでは水鉄砲だけ・・・。」

「です。絶対にコレは守ってください。遊びでも魔法の発動は禁止します。危険ですから。」

「・・・ワカリマシタ。では、また・・・。」

「ハイ。お疲れ様でした。ミス ルイズ。」

ルイズは水鉄砲を抱え、部屋に帰っていった。

おっ、そっぴやフロを作らないと。もう汗で身体がベトベトだわ。既に引越しは終わってたので、部屋は分かつてる。

何故か隣はコルヴェールの小屋があった。

ま、いいか。

部屋の外に大きめのユニットバスをイメージ。

シャワーはこの世界ではムリだから、フロの形は長々と脚を伸ばせる感じで・・・。

ン。上出来・・・。」

水が無い・・・・・・・・・・。どうしよう？

困った時のネ申様だ。

部屋に戻り神様を呼んで見よう。

ネ申様、ぷりーずうう。

<呼んだかい？>

「おお、ネ申様、すこし相談がまたありまして・・・。」

<オヌシも相談ばかりするのぉ。ま、ミク。んも作ってくれたしの。神様連中はミク。んコンサートでフィーバー出来ると言う事で好評じゃ。

少し位の願いは聞いてあげようぞ。して、願いとは？>

「水の魔法が使える様にして欲しいのです。フロ作ったはいいけど、水が無くて困っています。」

それにこの世界でケガでもした時に水魔法は必須と思います。

何とかお願い出来ませんか？」

＜うーむ。仕方ないのおお。ま、今回までじゃ。特殊サービスは。後は自分で何とかせいよ。＞

「おおお。嬉しいです。お願いできますか？」

＜ヨシッ、今宵もミクたんはあはあ出来るからサービスじゃ。水のスクウエアじゃ。＞

「ヒューヒュー」神様ありがとうございます。

ミクたんにはネギ差し入れると大喜びしまっせ。」

＜おお、いい情報ソース、あんがと。

今宵はネギを持ってミクたんにハアハアして来る。では、バイバイキーン！＞

そう言うのと神様は消えて行った。

いやいい人だわ。あの方。おかげで、この異界でも何とか暮らせる。サイトはガンダだけで良くも生きてたよな。

やはりこの異界では魔法は必須だ。

さつて、水も出せるだろうからフロに水張って。

ファイヤーレベルならコモンも使えるから、それで火をつけて沸かすか。

フロに水も張り、沸かして蓋しといた。

腹が減ったからだ。

しかし時間が遅く、もうミクミク食堂は閉まってる。＞正式名称となっちまっただ。

シエスタを見かけたので、ご飯食べる時間が無くてメシ抜きだ。

何とか賄いでも分けて欲しいと頼むと、コチラでどうぞ♪と快諾してくれた。

いい子だわ。この子は・・・。

厨房に行くときデカイオッサン、マルトーが「我等が錬金よ！」と抱きついて来た。

何でもシエスタを助けてくれ、しかも、

凄い錬金魔法で食堂の名前すら変えたと言う事で、厨房の噂になつてたとか。

メシは美味い。やはりこの世界の味職人NO1だけある。

お礼に包丁や鍋、特にデカイ中華鍋を錬金してあげたら大感激してくれた。

腹が減ったら何時でも食べに来てくれと言われ、帰りにはワインもくれた。

やっぱりいい人ばかりだわ。平民の皆さんは・・・。

お礼を言い、マルトー他と別れ、

メシも食って腹も膨れたのでフロに入るべ！と部屋に向かっていると・・・。

青い髪の子ビッコがオレを待ってた。あーやタバサだよな。

この世界の綾波レイ・・・。

ホンマに同じ人間がキャラ作つたのじゃネ？と思う程、レイとタバサはそっくり。

ある意味双子だわ。

ま、いいか。

でも何の用事だろ？

とりあえず聞いておくか・・・。

「えっとクラスの子ですね。ミス ヴァリエール嬢と同じクラス
の？」

「・・・タバサと言う。貴方は何者？・・・」

何だ、やっぱりゼロ魔最大の不思議ちゃんだわ。

いきなりアレな質問されてもね。

まさかデブでキモ男でええす♪と言う訳にもイカネだろ？

「質問を質問で返して申し訳ありません。

ミス タバサ。

何者と言われましても、

ルイズの召喚でこの国に来たメイジのタロウ ヤマダであるとした
言えませんよ。」

「貴方の魔法は強力。そして斬新な考えもある。
もし良かったら私も魔法を指導して欲しい。」

「そうですが。でも今日はもう遅いですし、
私も疲れています。また機会を改めて来てください。」

出来る範囲なら教師として指導致します。」

「・・・分かった。またお願い・・・。」

タバサはスタスタと歩いて帰って行った。

疲れるわ。あの子は。

そう言えばエヴァのシンジもレイに困ってたな。

真面目なのかボケなのか天然なのか掴めない子だもん。

ま、いいわ。フロ入ってワイン飲んでネットして寝ようっと♪

人間の一日の終わりはやっぱりフロだね。ふう、気持ちいいん♪

湯上りにスパンスパンとタオルで股をシバイテ上がる。

爺様が良くやるけど、以外とスツキリするのよね。アセも飛ぶし。フロから出たらコルヴェール氏が自分にもフロ貸せと言っので、湯を抜いてくれるなら、ゆつくりドゾ♪と告げたら大喜びしてた。

湯上りのワイン飲んで、ネット三昧。

うーん、異界とは思えぬ一日よ♪

そうしてたら、また来客よ。誰？夜中に・・・。

現れたのは・・・。

言葉を話せぬサラマンダー、フレイムだよね？確かキュルケの使い魔。

しかしキュルケがブサ面のオレに興味持つ訳が無いのにね？
サイトならともかく。

「ン？誰かの使い魔か？すまんが遅い時間だ。
もう帰ってくれ。」

そう言うフレイムはオレのスボンの裾をくわえ、ズルズルと引き
ずり出した。

やはり畜生でも竜。スゲー力。

「ワイワイ。止めてくれよ。ズボンが破れてしまいます。
着いて行くからズボンを放せ。
一張羅なんだど。」

そう、まだ着替えも無いのよね。下着だけはカバンに入ってたけど。
虚無の日が確か休みだべ。
街に着替えを買いに行くか。
でもゼニがねえ……。オスマンに前借しとこ♪

フレイムの言葉は理解出来ないの、とにかく黙って歩いて歩くと、
やはり女子寮。
困った。まだ未知の領域。

「使い魔の竜くんよ。さすがにオレはこの中には入れない。
呼んだのが誰か知らないが、入り口まで来て貰ってくれ。」

そう言うフレイムは黙って寮に入り、しばらくすると……。

オレをズルズルと銜えて歩き出したよ。
フロ入ったばかりなのに。（T—T）

部屋に着くとやっぱり真っ暗。

「扉を閉めて」

とキュルケの声がした。

「ようこそ、こちらへいらっしゃい」

「真っ暗だよ。」

キュルケが指を鳴らす音がした。

すると、部屋の中に立てられた蠟燭が一つずつ灯って行く。

キュルケは10代の娘にしては派手なレースのベビードールを着ていた。

しかしこんな綺麗な姉ちゃんがゴロゴロしてるもんな。この世界はキュルケは割合姉豪肌だし、好きなキャラ。

でも、今は教師なのよ。それにルイズの使い魔。

キモ男には到達不能の高い双壁の持ち主の一人。それがキュルケだ。

「そんな所に立って無いで、コチラにいらっしやい」

「だが断る。」

「ど、どうして」

「確かキュルケさんですよ？ルイズと同じクラスの。」

「そうですわ」

「わたしは使い魔でもあり、教師でもあります。教え子、しかも女生徒と夜間、同じ部屋に居ると要らぬ誤解をされ迷惑します。」

このまま帰らせて貰います。授業の事なら昼間、教室や休憩の時にでも質問してください。」

こう言う場合は毅然と言うべきだわ。

下手にオタオタしたら付けこまれてしまう・・・と思う。

何せ女性経験はゼロなの。オレは。

二次元世界のヨメなら詳しいけど、リアルは分からない。

何度も言うか、女の子の手を握った事もナシ。

ファーストキスがルイズの契約が始めて。

三十路のオヤジの考えじゃねーぞ。チクショーー！。

そしたらキュルケが。

「あたし、そんなつもりでは無いの。
ただ、今日、ルイズに金の彫像を作ったり、
アルヴィーズ食堂の人形を錬金したでしょ？
アレ見てて凄いメイジと思って御近づきたくって、
でもいきなり呼んで本当にゴメンなさい。
もし良かったらアタシにも錬金とか教えてくださらない？」

「まあ昼間でしたら、時間の取れる限り。
それにしても困りますよ。いきなり銜えられてこの部屋に拉致。
着替えもロクにないのですぞ。私は。
もう少し考えて行動してください。私も生活がかかっています。」

「本当にごめんなさい。許してくださいるぅ」

「ま、まあいいです。では失礼します。」

もうこの部屋に居ると色々とマズイ。
確か色んなヤローがデートの誘い来るのよね。

この微熱は・・・。

幸いにもバッティングには衝突せずに済んだ。
はあ、若い頃なら良かったけど、三十路メタボには若い姉ちゃん
は壁が高いわ。

もっともルイズは上る気ゼロだがね。

バストレヴォリユーション
登るなら双壁よ♪

部屋に帰るともう十一時。少しネット繋いで2c。にアホ書き込んで寝ようっと♪

異界二日目も何とか終わった・・。

ん♪おおおおおお

「・・・不思議なメイジ、タロウ ヤマダ・・・
私の知らない魔法を知っているかも・・・。」

「まっ、恥ずかしがりな人ね♪でもあの錬金は本当に凄かった。
アタシもルイズみたいな彫像を作って貰わないと♪」

近づいた女生徒の不思議な考えを知る由もなく、オレは異界二日目を終えた。

キモ男の黄昏（後書き）

タバサ、キュルケ、マルトーが登場です。

デルフとキモ男（前書き）

デルフGETTです。

ただし自力で買います。

デルフとキモ男

ある日キンタが歩いていると、美しいオシメ様が逃げて来た〜ん、悪いシトに今追われているの〜ん、お願い、キンタ、。もって〜

いや〜、ツボ。先生のキンタの某件はノリいいわ〜

バカな唄を歌いながら、今日は久しぶりにテファさんのフュギアを作っていました。

いや、某神様のリクエストなんですよ。コレが。他のネ申様もクレクレタコラしとります。

ヨッシャ、造形は完璧。コレ、

例のゼ口魔二十巻で一番お気に入りあのポーズなんです。例の全部あげる。ゼ口魔フリークならコレで分かるよね。オラ、アレだけで二十巻の元は取れたと思いました。ハイ。んじゃ塗装して来ようつと・・・。

ヤベ。コレ持ってて絶対に会ったらいけない人間が居ました。もうガン見されてます。

もうオラの命、無いかも知れません。

そう、テファさんの保護者。

ロングビルさんです♪>またの名を土くれのフーケ&マチルダ。

いや参ったど。どうしよ・・・。

「ねえ、そのアンタ。その人形、どう言っ人をモデルにしてるんだい？」

もう冷や汗ダラダラ。どう答えよう。

「黙ってても逃げられないよ。

その子、アンタ知ってるのかいつて聞いているの！（怒）」

困った、どうやっても逃げられないなら、正直に暴露するか？
どうしよ・・・。

年下の姉ちゃんでも、成人したお姉さんには、DTのオラ、うまく喋れないのよ。

目力が違うのよね。特に美人のお姉様は。

皆も経験無いか？

ド美人な姉ちゃんとガン比べして負けた経験。

下手に言い訳しても逃げ場はナシ。

よっしゃ、シンドイけど正直に言っべ。

ついでにドロちゃんも辞めて貰おう。
フーケしてても、次はワルドに狙われてまうもんね。
彼女は。

「ロングビルさん、すいませんですがココでは言えませんが、
どこか機密の保てる場所はありませんか？
そこですべてをお話します。」

「じゃアタシの部屋へ来な！アタの部屋だと、コルヴェール先生
が隣だろ。」

それでいいと答え、マチルダの部屋へ移動。

もう暴露しましたよ。

異界から召喚された。

そして異界ではこの世界が物語になってる有名作品だと言う事。

さすがに虚無関連は黙ってたが、ティファニアの本名も住んでる村、
そしてマチルダの出目も全部当てたら、さすがに口をアングリさせてた。

何せ知るハズの無いティファの顔かたちをすべて知り尽くしてるもんな。オラは。

「ふー、ウソとは思えないし、アタシの本名。そしてティファの顔形まで知り尽くしてると、さすがに信じるしかないね。」

で、その世界ではアタシはどうなってるんだ？」

「フーケが「破壊の杖」の強奪に失敗して、ある組織の手下にスカウトされてしまいます。」

その後、ある情けないメイジの情夫になり、

ティファに仕送りも出来なくなる程オチブレてしまいます。

ロングビルさん、破壊の杖を盗んでも金にや、なりません。

オレが鍊金し金を渡します。

それでティファに仕送りしてください。」

「悪い話じゃ無いけど、アンタにや全然メリット無いじゃないの？アタシや自分にメリット無い話を持ちかける人間はあまり信用しないの。」

さすが歴戦のドロ、フーケだわさ。金をあげる。

万歳！と信用出来る人間の方が頭がおかしいよね。

「正直に言います。ティファニアはオレの世界では、凄いカワイイ女性として人気あるのですよ。」

この世界で言うと劇団のヒロインみたいなね。

で、彼女がこのままでは不幸になるのです。

フーケが捕まってしまうと。

オレのメリットは彼女が幸せになる事だけです。

ロングビルさん、もう辞めてください。フーケは。」

「もうバレテいる様じゃフーケも御終いだしね。いいよ。辞めてあげる。」

その代わり・・・。」

「ハイ。定期的に鍊金した金塊を渡します。それを換金して仕送りに使ってください。」

「うん。分かったわ。じゃ、そうするわ。」

「良かった。これでティファニアの不幸の目が消えた。」

「そんなに不幸になるのかい？」

だって、現状だってオトンのモード大公は兄貴のジェームスに殺され、しかもハーフェルフ。

街は歩けず、森の中で静かに暮らす優しい子。その仕送りが途絶えたら、彼女達は普通なら

「この子は骨になる骨になる。」

だもんな。

安全策があるなら乗って欲しいよ・・・。

詳しく説明すると、頭のいい姉ちゃん、マチルダは即答した。

「ヨッシ。信用するよ。アンタはブサイクだけど、ヘタレみたいだもんね。」

所でオンナは知ってるの？」

「ぐつつ。オレの世界じゃね。三十路までDTだと魔法使いになれるって、伝説あるのよ。」

「アハハハハハ。アンタ、だから魔法がうまいんだね。こりゃ最高」

「ケツ。悪かったね。このツラじゃ誰も相手してくれんのよ。」

「まあ悲観しないの。場合によってはアタシが・・・。」

「いや、今は止めておきます。まだ生活基盤がこの世界で確立してないのに、女の責任なんざ背負えません。」

「ふーん。そうかい。じゃ今後ともヨロシクね」

「ハイハイ。んじゃ手付金の金を錬金しときます。錬金！」

「・・・。初めて見たけど、凄いね。」

「アタシも土のメイジだけど、これだけ見事な錬金はムリ。」

「でも出所は内緒にしてくださいよ。国や悪党に目を付けられたくありません。」

「基本、ヘタレですから。」

「ハイハイ。分かってますっ。じゃコノ金、貰うよ。いいね？」

「」安心を。

「返せとは言いません。ちゃんとテファに食べさせてください。」

「ま、そのウチに会わせてあげるよ。
アンタ会いたいだろ？そんな人形作る位だから。」

「（キリッ！）モチロンです♪」

これで、何とか土くれ事件は未遂に防げたな。
しかしデルフどうしょ？

ついでにマチルダにオレの分の換金も頼んでおくか・・・。
この国に伝手はまだ無いし・・・。

結局、自分の分の換金も頼んでしまった。

手数料は要らないと言うけど、やはり困ってるだしょ？と言うと、
10%貰うと言う事で話は付いた。

そう言えばオスマンに給与とかどの程度貰えるか聞くの忘れてた。
着替えも無いので、前借はしておこ♪

「オールドオスマン殿。

すいませんが、着替え等買いたいのので、支度金を出して貰えませんか？」

「おお、忘れてたぞ。フム。これで足りるじゃろう？」

大体500エキュー程の金貨をくれた。
いい人だわさ♪

確かデルフが100エキュ位だったよな？

ルイズでも誘って街に行くべ。

頑張ってるからクックベリーパイでも奢ってやるべ。

最近はギーシュがルイズとの勉強会に良く来る様になった。
ヤツは結構真面目な少年でもある。>相変わらず薔薇だが。

しかしモンモンのワインビン撲殺一歩手前事件が起きてから、
すっかりナンパは止めたみたいです。

ありゃトラウマになるよな。

オラも少しチビったど！！

ルイズは言いつけを守り、魔法を普段は使っていない。

>もつとも使ったらすぐ分かるけど。爆発で。

そんなこんなで、いよいよこの世界の日曜、虚無の日が来ました。
でも乗馬の経験無いのよ。普通の日本人は。どうしよ・・・。

慣れるしか無いと、覚悟決めて乗るか！

ルイズ誘ってトリスタニアに遊びに行きます。

「御主人様、タロウです。今日は虚無の日。

買い物に行きたいので、街へ連れて行って頂けませんか？」

「あ、アンタ。使い魔って事も忘れていなかったのね？」

最近はおラとルイズの関係って使い魔では無く、センセと生徒の明るい関係のみ。

ルイズは普段はタロウ先生と呼びなれてた。

本人もすっかり使い魔って事忘れてたみたいだど。

この国に来て、着替えもロクに無いからオスマンに金貰って買い物に行きたい。

でも街がどこか知んね。

ルイズ、召喚したんだから少しは責任取りやがれ。

プリーズだど。

そう言うと、分かったわよ。でも自分でお金出すのよ。

そう言いやがる。テメー、この前ルイズ彫像を錬金したっただろうが。

少しは金をおラに使え！と言いたかったが、大人ですよ。

オレは。

街でクックベリーパイをご馳走したるから連れてけ！と言ってたら・
・・。

出たわ。

キュルケ&タバサのコンビが。

「…………街に行くの?…………」

「あらん、ダーリン」街に行くなら大人なアタシの方が詳しいわよん」

「・・・クックベリーパイよりもハシバミサンド・・・。」

「ア、アンタ達、何で耳がいいのよ。奢って貰うのは御主人様のわたしだけよ！（怒）」

「・・・仲間・・・。」

「タバサの使い魔のシルフィードならアツという間に首都トリスタニアよ」

「・・・運賃と思って諦めて・・・。」

参ったわい。コイツ等のカンの良さにや。

ま、いいか。

生徒との交流&使い魔の使命と思って諦めましょ。

足りなかったら鍊金してた金塊を何とか換金しますか・・・。

トホホホ・・・。（A、。）（泣）

確かタバサの胃袋は底なしだよな。

どうやってこの小さな身体にアレだけの食い物が入るのか、

一度アカデミーで調べて欲しいと思ったのはオレだけじゃネーだろ？

こうしてタバサの使い魔シルフィードに便乗させて貰い、一路ヒト
っ飛び♪

やって来ました首都トリスタニア。

本やアニメの描写じゃ分かり難かったけど・・・。

臭い、狭い、人が多い！だ。

中世期時代と同じ設定のこの国とは言え、仮にも首都だろ？

これでは戦争が起きたら、この街は一発で壊滅よ。

現代日本と言うか、世界がいかに進んでいたかは、街を見比べると
ハッキリ分かる。

まずは着替えを探すのが先決よ。

洋服とかはキュルケが詳しいいらしいので、連れて行って貰ったが・
。

貴族のゴテゴテした服ばかりじゃん。

普段着とか学校の教師で使う服が欲しいのよ。

そう言っと、違う店に連れて行ってくれた。

何とかマトモな店なので、採寸とかしてもらうのに時間かかるから、
とりあえずルイズに五十エキュード渡し、コレで茶でも飲んでくれ
と言い、

オラは服屋、そして武器屋を見て回る。

デルフゲットだ・・・。

ちなみにガンダのルーンはコルベとオスマンには報告しといた。

協力して貰ってるから、出来る限り秘密は減らしたいもんね。

もつとも地球産と言うのはマチルダしか知らないけど。

万一のために鍊金しといた金塊を換金して貰った。

この街の看板って、絵だけだもん。

誰でも理解出来るわ。

お金関係ならお金のマーク。

陶器類ならお皿。そして武器なら刀。

シンプルだけど、そんだけ識字率も低いと言う証明だろ。

金塊は1000エキューにもなった♪

凄いい純度が高く、売り物になると言う事らしい。

また見つけたら持って来てください。と言う話になった。 > 火山で発見したと大嘘つきました。

その後火山山系に冒険する無謀モノが増えたとか・・・。

(´・ω

・、;) ヽポリポリ

資金には余裕出来たので、次はデルフだ。

武器屋はすぐに見つかった。が・・・。

デルフは何処??

「旦那様、武器をお求めですか?」

「うん、魔法だけでは精神力が切れた時に戦えなくなる時あるからね。」

大きい剣を探してます。」

「そうしたらこの剣はいかがでしょ? ゲルマニアの錬金魔術師シュペー仰です。」

「すまんが戦うための剣を求めてる。んな装飾剣なんざイラネって。」

「生意氣言っんじゃないぞ。デブ。」

いずこから声が聞こえる。多分埋もれてたデルフだろ。

「おめえ、自分の体系見た事あるか？ンナ太っててまともに剣をふる？」

おでれーた！冗談じゃねー。おめえにや棒っキレがお似合いさ！」

間違いない。オデレータが出た。デルフだ。

探したぜ。未来の相棒。

一応反論しとこ。話が進まねえって。

「何だと？」

「分かったらとつとと帰りな。

豚舎でブタメシでも食べてゴロゴロしとくのがお似合いだ！」

テメー。いくら何でも言いすぎだろうが。

デルフで無かったら溶かす！

ルイズがコイツを溶かすぞ、駄剣と言ってた気持ちが一発で理解出来たわい。

本当に口の悪さはルイズ以上だ。絶対に。

「何だよ。空耳か？誰もいないぞ。」

「おめえさんの目は節穴か？」

声のする方向を見たら・・・。

何と！声の主は錆びた一本の剣。やっぱりボロだわね。見た目は。でも万一無謀な戦いになった時は、コイツが一番頼りになるのだよ。

「おめえ何か失礼な事考えてるだろ？」

「やい！デル公！お客様に失礼なことを言うんじゃないやねえ。」

「デル公？」

「お客様？剣もまともにふれない様なブタ腹抱えたオツさんが。ふざけんじゃネーよ。」

耳をチョン切ってやらあ！顔を出せ。」

「ソレって喋る剣か？」

「そうですよ。旦那。意思を持つ魔剣。インテリジェンスソードでさ。」

「いったい、どこの魔術師が始めたんでしょうね。剣を喋らせるなんて。」

とにかくコイツは口は悪いわ、客にケンカは売るわで閉口していました・・・。

「やいデル公、これ以上失礼を言うなら、貴族に頼んで溶かしちまうからな！」

「おもしれえ！やって見ろ！どうせこの世にゃ飽き飽きしてたトコさ。」

溶かしてくれるんなら、上等だ！」

スゲ、コイツの口の悪さは一級品だ。退屈はしないだろ。

「やってやらあ！」

「店主、オレ、こいつ面白そうだ。コイツを貰おう。」

そして・・・

「お前デルフって言うのか？」

「ちがわ！デルフリンガー様だ！おきやがれ！」

「オレはヤマダ タロウだ。宜しくな！」

オレはデルフを握らせて貰うと・・・やはりルーンが光ってる。デルフも気づいたみたいだ。

「おでれーた。見損なってた。オメ、「使い手」か？」

「使い手？」

「フン。自分の実力も知らんのか。まあいい。相棒よ、ヨロシクな。」

「オヤジ、コイツを貰うぞ。いくらだ？」

「新金貨で百枚で結構でさ。」

「安いな。」

「厄介払いですよ。こっちに見たら。」

オレは袋から金貨を百枚取り出し主人に払った。
主人は慎重に枚数を確認すると・・・。

「毎度♪」剣を取りオレに渡してくれた。

「どうしても煩いと思う時は、こうやって鞘に収めたら静かになり
まさあ。」

オレはデルフを受け取ると店を出た・・・。
ルイズ、キュルケ、タバサが待ち構えてた。

「ねえ、ダーリン♪聞いてよ。タバサったら、
ダーリンに貰ったお金の分、全部食べてしまったの。」

「おかげでクックベリーパイ。二枚しか食べられなかったわ。」

「・・・まだ大丈夫・・・。」

「お、お前等って、人の金だと思って平気で食いやがるな？」

「あらん♪女性はデザートは別腹よん♪ね、タバサ♪」

「・・・もう少し食べたい・・・。」

「クックベリーパイ……。 (泣)」

「分かった分かった。もう買い物は終わったから、あと一軒だけ奢ってやる。それで最後だぞ。」

「あらん♪ダーリンったら太っ腹！ (ガン見)」

ウルセ。腹を見て言うな！

「……。まだ食べられる♪嬉しい♪……。」

「クックベリーパイなら大丈夫。もっと食べたい♪」

高い買い物になったな……。 (TへTO)

こうして買い物も終え、学園へと帰った。アレからさらに食いやがったタバサには本当に呆れた。

確か原作では、キュルケってサイトに剣を買い与えてたな。

オラは逆にたかられる。。。

同年輩と中年の差別かよ。 (TへTO)

デルフとキモ男（後書き）

マチルダフーケ封印&デルフGETTです。

やはり中年には誰もプレゼントはくれません。

逆にカモにされています。

タバサ・・・怖い子・・・。

キモ男の憂鬱（閑話）（前書き）

キモ男の閑話です。

今後の予定を考えて思考がループしてます。

キモ男の憂鬱（閑話）

デルフをGETTしてから、朝のトレーニングに剣の素振りをプラ
スした。

真剣に練習しないとワルドとの戦いでは、マヂでヤヴァですからね。
いきなりアレな事は魔法以外はムリですから、地道な基礎訓練ある
のみですよ。

持ってた「はじめての剣道」と言う子供向けの本があったので、そ
れを見ながら素振りの日々。

「なあ、デルフ。お前ってただの喋る剣じゃねえんだろ？」

「おうよ！おれ様は魔剣、デルフリンガー様よ。」

「なら、何か必殺技とかあるんじゃない？」

「それなんだがよ。長年生きて来たせいか、覚えていねーのよ。残
念ながら。」

「使えネ。やっぱタダの駄剣だわ。」

「忘れてるだけだつて。相棒。しかし、本当に相棒の身体ってムダ
の塊だねえ。」

さぞや女にや相手にされなかったらう。可愛そうに。」

「ウルセ。三十路超えてDTだわい。未だに女の子と手も繋いだ事
が無いわい。」

文句あるか？駄剣。」

「いえいえ。ありませんって。ワハハハハ。」

この駄剣は……。+。(、ダ。)。+。

イベントスケジュールを思い出して見よう。

確か原作では……………。

「ギーシュとの戦い」>潰した。

「シュヴルーズ先生爆殺未遂事件」>潰した。

「マルトー&シエスタとの友好」>それなり……。

「フーケ事件」>潰した。

「デルフリンガーGETT」>自力で買った。

学園のセンスしてる以外はあまり目立った事はしていないな。
かなりのイベント潰したけど、
ワルド戦で不利になる事ばかりだったから、潰して正解だわさ。
今後は潰さずに原作ルートに従うか……。

マチルダは二ヶ月に一回位、

鍊金した金塊を渡す事で今後も仲間扱いしてくれる事になりますた。

全部暴露したから、ヤヴァな事件が起きるから、危ない話には注意してくれとお願いしときました。
彼女が事件に巻き込まれたら、テファが哀れになるのは確かですモン。

しかしガンダのルーンは有難いね。
デルフ握ったら戦い方のイロハが自動で頭に入るのよ。

筋力とかスピードもアップされる・・・が、メタボが悲しい。

腹がタプンタプンと踊っています・・・。(ΩДΩ)

「相棒、悪い事は言わネから、もう少しダイエットしなよ。
デブガンダと呼ばれるぜ。このままじゃ。」

「確かに・・・。
魔法は使えるタダのデブじゃネ？だからオメを使って特訓してんのよ。」

「この程度じゃ特訓にはならネって。
もっとオレ様の姿を思い出させる程の地獄を味わせてくれなきゃネ？」

「オメって偽装サビだろ？」

「どうだったかな？何せ六千年生きてると大半の事はすっかり忘れてしまったモンね。」

「耄碌駄剣デルフか・・・。悲しい。養老院にでも入れようかな・・・。

」

そう言えば「ゼロ魔」特有の女の子とのフラグが全然立っていない事に気づいた。

マチルダは頼めば相手してくれそうだけど、

それ以外の子は「オサイフ」扱い。(ΩДΩ)

ワルドとの戦いまで目立ちたく無いとフラグイベント潰した報いだな。

さつて、朝の訓練はこの程度にして・・・メシ食おうとっ

最近厨房でメシを頼んでる。

ミクミク食堂は、お子様と一緒に食べるのが苦痛。

センセ連中とはあまり気が合わない。>コルベ先生とオスマン、シ

ユヴルーズ先生程度です。

平民の連中と酒飲んだりメシ食うのが楽しいんですよ。

やはり。

しかしシエスタって、酒豪です。

ハイ。虎になります。

あの子にや酒を飲ますと絶対にヤヴァです。

一回飲ませたらガンガン飲んで、マルトーもビびっていました。

虎の女にや怖いモノはナシです。

原作でもかなりの虎でしたが、現実には凄いです。

特にメイドしているとストレス貯まるのでしょう。

かなり鬱憤が貯まっております。

何か楽しいオモチャ無かったかな・・・この時代の平民でも遊べる。

のんびり考えよう。（　　；）

もうすぐお姫様来訪イベントもあるのよね。

ワルドも一緒に学園に来る。

アイツって確かロリだよな・・・。

何とか敵から味方に引き込めないか？

オカンの事件で、どこか狂った人間だから、頃した方が良さそうだけど、オレではキツいかも。

味方が足りない。はあつ。。。。

今度、マチルダと酒でも飲んで相談するべ。

「マルトーさん、朝ごはんお願いしまあす。」

「おお、我等が鍊金。もう出来てるぜ。」

すっかり鍊金扱いされてるオラです。

鍋に穴開いた。鍊金！

包丁が折れた。鍊金！

いや、鍊金ってこの時代、万能に近いですね。

神様に感謝ですよ。この魔法くれて助かりました。

金に困ってても何とか出来るもんね。

メシ食べてると、シエスタがお茶とか注いでくれる。

この子もエエ子なんだわ。ただ、酒豪は怖つ。
DTのオラにや扱い辛いわ。

ギーシュには色々とおたくの技術を仕込んでいる。

ヤツは薔薇だが、オタの素質も眠ってた。

一番のお気に入りかミクたんらしい。

あの腰のクビレの皺が凄くキタらしい。

そうですね。

某有名なフュギアでアレ見て、

下手な現実の女よりクルもんがありましたから。

ゴーレムもワルキューレからガンダ。のザク風に仕込んだ。

アレって結構単純な形だけど、戦うロボットには一番向いてるもんね。

色々仕込んだら、現実の女よりも二次元世界の女に目覚めつつある。

でもモンモンは放置するなよ。

アレは本当に怖つ。

撲殺未遂事件の恐怖は生徒全般に伝わっており、

「モンモン」はキレさせるな！

が隠れた合言葉になってる。

一時ギーシュを狙ってたケティも恐怖でギーシュを狙う事を諦めたらしい。

この世界のフュギアは色々とかやヴァいので、当分は作らない事にした。

特にテファは見つかるとヤヴァ過ぎです。マチルダ事件で懲りました。

たよ。

でもネットが出来るのでネタにや困りません。

昼間は充電してて、夜は楽しくネット♪

ホンマに異界かよ？と思う時もありますが、楽しければOKですねえ。

マチルダがこの前、遊びに来て、パソのユーチューブ見せたら、感動してた。

動画なんて見た事も無いから当たり前だけど、自分の話がアニメになってるの見て、

もしフーケ続けてたら、こんな情けない人生送ってたの？と泣いてた。

話の筋は狂うだろうけど、悪党は色々居るでしょ？

一人位は善玉に変えても問題無いよね。

コルベ先生はどうしようか・・・。

あの方もトラウマがある方ですからね。

特にアニメスの一件。

何とか回避させたいですよ。

この時代の天才ですから！！

いやマチで。

誰も考え付かなかったエンジンの原型をオモチャとは言え、作り出せる人。

天才って無から作れる人の事と思うんです。

自分達の世界なら、間違いなく歴史の重大人物に残った人ですよ。

何とかしてあげたいな・・・。

ま、悩んでも仕方ない。

なる様になるか♪

キモ男の憂鬱（閑話）（後書き）

閑話です。

お姫様来訪（前書き）

新章です。

お姫様はどんな人が来るのでしょうか？

お姫様来訪

好きっとか嫌いとか、最初に言い出したのは誰なのかしらん♪
駆け抜けてイクううう、わったっしのメモリアルううう♪

いや〜、やつぱしトキ。モは最初のシリーズがNO1ですよ。
普通のゲームは後の方が良くなるのですが、とき。モだけは、最初が絶対に一番。
PSPにも移植されたのは当たり前だと思います。>最新版よりも高値だもん。

って、バカ言ってますが。タロウです。

隣には・・・。

マチルダが寝てます。

ヤッてしまいました・・・。

いえね、昨夜、色々とマチルダと飲みながら話し合いしてたのですよ。

そしてパソのネット見てて、マチルダが隠しアイコンをクリック・・。

みんななら分かるよね。

そう、エ。動画を見られてしまいました。

そしたら、変なスイッチ入ったのか、マチルダに押し倒されたのです。

それから、くんずほぐれつ。

上に下にです。

神様、オレ。

魔法使いの資格無くしたかも・・。

「ナニをブツブツ言ってるんだい？こんな美人が隣に寝てるんだよ。誇りに思いな！」

女は強いね。

まっ、コレで彼女が裏切る事は無いだろ。多分・・。

でも彼女。

初めてでした・・・。

結構遊んではいましたが、元は貴族のお嬢様。
零落れてからは、ドロボウ、そして保護者。
遊ぶヒマも男作る余裕も無かったらしいです。

でもマチルダは本当にいい女ですよ。

ワルドにや勿体無い女です。

元々は優しい女だったのに、
テファと孤児養うためにフーケを始めたのですから。

まあいい、デキてしもーたモンは。

キツチリと責任取ります。

取れるかな・・・。

話変わって、自分、痩せました。

神様に水魔法貰ったので、自分の身体の水の流れを変えて見たのです。

メタボって身体の余分な脂肪の集まり。

それを除去して、純粹に必要な水のみ残したら。

あゝ不思議♪

若い頃のボクに近くなりました。

マチルダもどうしたの？とビククラしています。

ルイズにも特訓続けてたら痩せたヨン♪
と、報告したら、何故か顔を赤くして、

「よ、良かったわね。さすがわたしの使い魔よ。
今後もしっかりと特訓して精進しなさい。」

だよ。

しかし痩せると楽だねえ。

今までは走ると息切れしてたのに、身体が軽いと足の運びもスムーズ。

それにデルフ使った素振りも凄くキレイがいい。
この調子ならワールド戦も何とかなる・・・かな？

でも、オタクは止めません。

そうそう、自分、使い魔召喚も済ませました。
一応、魔法使いなので、
使い魔召喚して使えそうならルイズに預けようと思って。

だって、ルイズ。

誰もオレが使い魔として認めてくれません。

かなり不憫です。

ですので、オレが召喚して、
動物類なら貸してしまおうと思ったのよん♪

そしたら、出て来たのが・・・。

「ピ。チュウ」

メッサ可愛いわ。リアルでも。

だけど、ルイズに貸そう。

偽装使い魔になるしね。

そしたらルイズ、大喜び。

キュルケにもわたしの使い魔ピカ。ユウよゝと自慢しまくりです。
良かったねええ。

キュルケはフレームに尻尾から電気を出せ！とムチャを言ってます。

ピカ。ユウにも、仮御主人様に仕えてね！とお願いしたので、
納得してくれたみたいです。

さて、今日はフリッグの舞踏会。

フーケのイベントが無かったので、ルイズ達のシュバリエ授与はナシ。

オレも痩せたので、今までの服がダブダブになり着るモノが無くな

ったよ〜！！

と、シエスタに泣きついたら、服のサイズを治してくれました。

田舎の子は万能ですよ。

ウチの婆ちゃんもスーパーババアでした。

「がばい婆ちゃん」って知ってる？あんな婆ちゃんです。

とにかく山があつたら何でも出来る。作れる。

機織も出来たので、自分で服も作れる。

蕎麦もお菓子もおカズも、作れないモノは殆ど無かったですよ。

シエスタ見てて、昔の田舎の子もこうだったんだろう？と思いました。

おかげで全部着れる様になりました。

バンザーイ。

お礼に持ってたポテチあげたら大喜び。

女の子は甘いのも辛いのも好きだね。何時の時代でも。

さって、舞踏会です。

一応、御主人様を入り口で待たないと・・・ね。

ミクミク食堂の上の豪華ホール入り口にて待ちます。

「ヴァリエール公爵が息女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール嬢のおな〜り〜！」

ルイズは桃髪にホワイトドレスでお出ましです。

もち、偽装使い魔ピ。チュウを連れて。

正直、本人も周囲もピ。チュウにウツトリ。
ヤッパ、カワイサはすべてに勝るねええ。

オレは一応、使い魔なので、ルイズの手を取り、ホールにリードよ。
痩せたせいとか、以前程のキモサは消えたみたいで、邪険に扱われず
に済みそう。

もう現代に帰っても絶対に。ブらないド！

多少見栄えが悪くても、メタボよりはマシです。ハイ。

ルイズは。カチュウに任せ、マチルダと踊るオラでした。

本人もピ。チュウと踊るのに夢中だったしね。

翌朝・

ルイズは自分のベッドの上で夢を見ていた。

故郷の実家の屋敷が舞台。

幼いわたしは、母の声に脅え、屋敷の中庭にある「秘密の場所」。
中庭の池に浮かぶ小船の上だった。

母が自分と呼ぶ声に脅え、小船に用意してあった毛布に包まりガタガタと震えてた。

そんなわたしを呼ぶ声がする。

誰だろう？ 年の頃は十六位の男性。顔が見えない、でも誰かはすぐ分かった。

憧れの子爵、ワル。様だ・・。

そこで目が覚めたのよ。わたし。

隣には使い魔から借りた偽装使い魔のピ。チュウが寝てる。

電気ネズミらしいけど、正直、アタリだったわ。コレ。
使い魔のタロウに心底感謝したわ。

もう誰もわたしの使い魔をバカに出来る人は居ない。
キュルケなんか自分の使い魔のフレイムに尻尾から
電気を出せとムチャ言って泣かせる始末。

スカッとしたわよ♪

昨日の舞踏会もピ。チュウと踊れたしね。
もう返せって言われても返したく無いわ♪

はぁ、始めからこの子が来てくれたらね・・・。
愛しいピ。チュウちゃん♪

夢に出た人って誰だったかしら・・・。
まっいいわ。

ピカちゃんのご飯を厨房に貰いに行こうっと♪

朝、教室に現れたルイズは羨望を集めてた。

「ねえ、ルイズ・・・。」

「お断りよ！！この子は誰にも貸さない。」

「少しでも触らせて・・・。」

「ダメ、わたしの大切な使い魔よ♪ベッドでも離さないんだから。」

ルイズは新使い魔の。カチュウに熱中してた。
周囲も羨ましくて、触りたくて仕方ない。でも触らせるのもイヤっ

て・・・。

ルイズは学園に入って初めて羨望を浴びる快感にハマッてた。

皆がルイズと。カチユウを囲んでワイワイしてると、教室の扉が開き、ミスタ・ギトーが現れた。

生徒達が静まり、不気味な雰囲気。ギトーがどう言いか戸惑っていると、開口一番。

「では授業を始める。私の二つ名は「疾風」のギトーだ！」

生徒はシーンと静まり、その様子に満足したギトーは次いで・・・。

「最強の系統は知っているかね？ミス・ツエルブスト！」

「虚無じゃないんですか？」

「伝説の話をしてるんじゃない。現実的な答えを聞いているんだ。」

「「火」に決まっていますわ。ミスタ・ギトー。」

ギトーとキュルケの口論は続き、
ならキュルケの火の魔法をぶつける！と言う話になった。

オレはルイズの隣に座ってて、ヤヴァイ！と思い、
キュルケが魔法を発射した直後、水の魔法で氷の壁をキュルケの前

に展開。

跳ね返された火の魔法は霧散してしまった。

ギトーも一瞬キョトンとしてたが、誰かが助けたのだろぅと思って追求しなかった。

ギトーは次いで、

「ユキピスタ・デル・ウインデ・…」と偏在の魔法を発動しよう・…と、してると。

ガラツと音がして誰かがドアを開け、発動は中止された。

「あやや、ミスタ・ギトー、失礼しますぞ。」コルヴェールだった。似合わないヅラ付きの・…。

「授業中です。」

「オッホン、本日の授業はすべて中止です。えー皆様にお知らせがあります。」

勿体ぶった調子でコルヴェールはのけぞり、その拍子にヅラが・…。

「・・・滑りやすい・・・。」

タバサの毒の効いた言葉に教室は爆笑の渦。

キュルケが、「貴女たまに口を開くと言うわね。」と大喜び。

「黙りなさい、ええい、黙れ、このこわっぱどもが！

大口を開けて笑うとは貴族にあるまじき行い。

笑う時は下を向いてこっそり笑うものですぞ。

これでは王室に教育の成果が疑われる。」

大声で怒鳴るコルヴェールの声に教室は静まった。

そして、アンリエッタ王女が来賓するので、今日は授業を中止。生徒は正装し式典の準備をすると言う事になった。

いよいよ物語の山場、アルビオン攻防戦となる。

その最初の山場がアンリエッタ王女来訪だ。

どうやってあのアホ王女に絡もうか・・・

そしてワルド対策。

フーケ事件も起きなかったから、ワルドはオレの事は知らないと思う。

アンリエッタ王女は・・・分からない。

あの女は正直、原作でも最大のパープーだぞ。

ロクに魔法も使えないルイズに、

（一応、爆発の加減は出来る様になった。そしてライト、ロクなどのコモンはOK！）

お使いに行つて♪と平気で頼むアホ。

オレは頭を抱えてしまふ。

放置出来ない・・・よね？

お姫様来訪（後書き）

次回は楽しみのお姫様来賓です。

ワルドの憂鬱（前書き）

本作の主演はワルドです。

彼の悲哀を楽しんでください。

ワルドの憂鬱

魔法学園に続く街道を金の冠を御車台の隣につけた四頭立ての馬車が、

静々と歩んでいます。

馬車を引いているのは馬では無く、ユニコーン。

無垢なる乙女しか背に乗せないといわれるユニコーンは
王女の馬車を引くのに相応しいとされてた。

その馬車の中には・・・。

年の頃17歳程の若き王女、

アンリエッタ姫と枢機卿、マザリーニが乗ってた。

アンリエッタは退屈してた・・・。

「これで十三回目ですぞ。殿下。」

困った声でマザリーニは言った。

「なにがですか?」

「溜息です。王族たるもの、

無闇に臣下の前で溜息などつくものではありません。」

「王族ですって！！まああつ！！」

アンリエッタは大声で言った。

「このトリステインでの王様は貴方でしょ？枢機卿。
今、街で流行っている小唄はご存知ですかしら？」

「存知ませんな。」

大嘘である。

彼はこのハルケギニアの事なら大陸に住むドラゴンの鱗の数まで知
っている。

都合が悪いので、知らぬフリをしてるだけである。

「それならば聞かせて差し上げますわ。」

「トリステインの王家には、美貌はあっても杖は無い。
杖があるのは枢機卿。灰色帽子の鳥の骨」

「街女が歌う様な小唄など口にしてはなりません！！！」

「それなら何か遊ぶオモチャ出してよおお。
もう退屈はヤ！何時も国の行事ばかりで、ちっとも遊びに行けない

じゃ無い？

アタチ、もうヤ！おうちに帰るのおお。」

「姫、駄々こねてはいけません。」

「ヤアアア。オウチであちよぶのお。」

アンリエッタ姫は退屈し興奮すると、
幼児帰りしてお子ちゃま化して泣き出してしまつのである。
何時もは毅然としてるのだが・・。

「姫、学園にはルイズ様が居ますよ？」

大人しくして行事が終わつたらルイズ様と遊ばれては？」

「ホント？ウソ言わない？」

「ホントですとも。ルイズ様は今、魔法学園の二年生ですよ。」

「わーーーーい、ルイズと遊ぶ、ルイズと遊ぶ。」

「姫、学園の行事が終わるまではお利巧さんにしてるのですよ。」

「うん。分かった。」

「マザリーニ枢機卿、もうすぐ学園ですね。」

やれやれ・・ようやく幼児化が納まつたか・・。

まったくこの姫には泣かされた。

幼児化しない時は、美しく毅然とした姫なのに・・。
それがスイッチが外れると突然幼児化。

いつものオモチャを忘れたのが、私の敗因か。気をつけないと。

馬車の外では、護衛のワルドがドキドキしながら、姫の嬌声を聞いてた。

彼はロリであつたのだ。

彼は初めて姫の幼児化する声を聞いた時、
婚約者の（だっただが。）

ルイズの幼い日の声を彷彿する声に痺れてしまったのだ。
姫のこの声だけでも「ご飯三杯はイケる！」
と公言したい、ロリ子爵だったのだ。

（ああ、アンリエッタ様。
貴女の甘い声にはドキドキします。貴女がその声を出される限り、
このジャン・ジャック・ワルド。国に忠誠を誓いましょう。）

何と！ワルドはロリのためにオカンの遺言も聖地も吹っ飛んでしまつてた。

ロリこそ正義！ロリのためなら、世界も敵にする。
それがワルドだったのだ。

ちなみにレコンキスタの勧誘はあつたが、
「幼児」が居ないと知ると、「イラネっ！」と断つたのである。

やがて学園に王家一行の馬車は着いた。

「トリステイン王国王女、アンリエッタ姫殿下のおな——り——
」。

魔法学園の本殿前に王室馬車が止まると、扉をくぐって現れたのは、
まずはマザリーニ枢機卿スウキキョウだった。

生徒や教師は一斉に緊張したが、マザリーニは意に介した事は無く、
馬車の横に立つと、続いて降りて来る王女の手を取った。

生徒、教師、オールドオスマン達の間から歓声があがる。

王女はニッコリと薔薇の様な微笑みを浮かべると、優雅に手を振った。

「アレがトリステインの王女？フン、あたしの方が美人じゃないの。
」

キュルケはつまらなさそうに呟く。

「ねえ、ピカちゃん。あたしとどっちが綺麗？」

「ちよつと・・・キュルケ。わたしのピカちゃん誘惑しないでよ。」

「ちよつと位はいいじゃない♪だってカワイイんだもん♪」

「キュルケには自分の使い魔居るでしょ。」

ソッチを可愛がりなさい。この子はわたしの♪」

「ルイズのいけずう。」

タバサは二人の嬌声を無視して、ピ。チュウの頭をナデナデしてた。

ワルドはルイズに気づき、手を振ったのだが・・・。
まったく気づいて貰えなかった。

「何故、ルイズは僕を無視してるのだ？
友達と会話してたからか？姫の方も向いていなかったが。」

ワルドは婚約者（元です。）に無視されたショックで混乱してた。
彼女^{ルイズ}の姿は幼い日と殆ど変わらず、まさに理想の幼女だったのだ。

ああ、もう一度彼女を抱きしめたい。
学園滞在中に何とか昔みたいになぁ。

ワルドはルイズの子供時代と殆ど変わらない幼児体系に惚れ直してたのである。

何度も言おう。

ワルドはロリだったのだ。

その様子を見てたオレは変だな？と思ったのだ。

ワルドは確かにルイズに手を振った。

原作では、毅然とした態度だったハズだが。

まさか真性のロリ？？

だったら攻めようがあるな。

オレは今宵、ワルド攻略の秘密兵器を作る事にしたのだ。

そしてその夜・・・。

ルイズは寝巻きに着替え、ピカ。チュウと寝転んでじゃれてた。

「ああ。もうカワイイ。わたしのピカちゃん♪」

抱きしめてゴロゴロと転がってたのだ。

ピカはいい迷惑だが。

そうしてると・・・ドアをノックする音が・・・。

「誰だろ？」

ルイズがドアを開けるとフードを被った少女が押し入って来たのだ。

「貴女は？」

少女は杖を取り出し軽く振りルーンを唱えたのだ。

「ディテクトマジック？」

「どこに耳が、目が光ってるか分かりませんかね。」

「ひ、妃殿下！」

「お久しぶりね。ルイズ・フランソワーズ！」

アンリエッタはフードを脱ぐと、感極まった表情でルイズに抱きついた。

「る、るいじゅううう。アタチ、ルイジュと遊びたかったのおお。寂しかったのおお。」

「ひ、姫。昔と変わりませんね？」

「ルイジユ、ちょんな硬い事言っちゃヤーー。あちよぼ。あちよぼ。」

「本当つに変わりませんね。姫。昔、貴女とお菓子の取り合いしてた頃と・・・。」

「だってちゃみしかつたんだモン。あたち何時も一人ぼっちだったんだよ?」

「えーえー。そうでしたね。おかげでわたしがどれだけお菓子を譲ったか・・・。」

「今でもあの恨みは忘れてませんよ。」

ルイズは昔と変わらず、興奮するとさらに幼児化する姫に呆れてた。可愛いピカとの愛のひと時を邪魔されたから余計に・・・。

「ねえ。ルイズ?その可愛い生き物は?」

「帰ってください。姫。もう寝る時間です。」

「ヤッ!ねえ、そのヌイグルミみたいに可愛い生き物、触ったらダメ?」

「メツです。わたしの大切な使い魔です。」

「つ、使い魔でそんなに可愛い生き物がああああつ。マザリーニに頼んでアタチもちゅかいまああ。」

「お、落ち着いてください。姫。分かりました。ちょっとだけ触らせますから。」

ルイズは相変わらぬの姫に根負けし、ピカを少しだけ貸す事にした。

そうして満足した頃・・・。

幼児化が納まったアンリエッタが話を切り出したのだ。

「ねえ、ルイズ。」

「姫さま、どうなさったのですか？」

「今から話す事は誰にも話してはいけませんよ。」

「なら聞きません。」

「そんな事言わないで、聞いてよ。ルイズうう。」

ヤバイ、またスイッチが入る。

ルイズは慌てて聞きますから、ネツ？と何とか幼児化を止めた。

「わたくしはゲルマニアの皇帝に嫁ぐ事になったのです。」

「それはおめでとうございます。」

「ちよっ、ルイズ。そこは何故？とか聞くべきでしょ？」

「では・・・。何故ですか？姫。」

これでいいんだろ？と言いたげな人です。

「仕方ないの。同盟を結ぶためなのですから。」

はよ帰れ！と思いながらも、嫁に行けるのか？と疑問に思うルイズ。

「そうだったんですが・・・。」

「いいのよ、ルイズ。好きあった相手と結婚するなんて、王族に生まれた時から諦めていました。」

「姫さま・・・。」

そうして話すうちに、ヂツは、アルビオンの皇子にしたためた手紙がある。

それを盗られたら同盟もポシヤる。何とか取り返して来て欲しい。お願いプリーズ。長くなるので省略するが、姫の話はそうだった。

ルイズは呆れてたが、王族命令となると行かないとダメだ。

しかしわたしはドットも出来ないダメメイジ。

仕方ない。本職の使い魔を連れて行くか？と考えたのだ。ピカも連れて行くけどね。」

「分かりました。では、姫。トモダチとして、アルビオンに行つて参ります。」

ですが、護衛も必須。わたしの使い魔一号も連れて行きます。」

「・・・使い魔って。二匹も居るの？」

「いいえ、人間です。しかもスクウェアメイズです。」

「そ、そう。そう言う人が居るなら安心ね。」

「お任せください。姫。ではお帰りはコチラです。」

「分かりました。ではこの手紙と「水のルビー」の指輪を持って行ってください。」

「せめてものお守りです。お金が必要なら売り払って旅の資金にしてください。」

ルイズは深々と頭を下げた。

「この任務にはトリスティンの未来がかかっています。母君の指輪がアルビオンに吹く風からあなた達を守りますように。」

ルイズは疲れるけど、しゃーねー。。。と明日は一番で使い魔を叩き起こす算段を考えてた。

その頃、タロウはワルドが絡む事を計算して、ワルド好みのフュギアを作成してた。

「フツ、ヤツの好みは多分。。。コレだろ？」
そこには。。。O l o v e r のモモたんが、尻尾付けて鎮座してたのだ。

「苦労したぜ。妹キャラ、そしてロリ。オマケに尻尾付き。完璧だ。」

「

オレは一仕事終えた満足感で、その日は安らかに眠れた。

翌朝・・・。

「タロウ。起きろおおお。」

ドアを蹴飛ばすと、ルイズはオレの部屋に押し入って来たのだ。
寝ぼけてたオレは、思わずキョドったが、ああ、アノイベントか？
と気づき。

「御主人様、朝からなんですか？」

「一応聞こつ。」

「タロウ、悪いけど、今からアルビオンに行くわよ。」

「学校には？」

「オスマン校長には連絡しといたわ。アンタ、護衛しなさい。使い魔でしょ？」

「ピカは置いてくの？」

「ンナ訳無いっしょ。連れて行くわよ。」

「そうですか。少し準備しますので、外で待ってて頂けません？着替えをしたいのです。」

「わ、分かったわよ。ノンビリしていられないから早くしてよ!」

多分、ワルドも合流するだろうから、ブツは持って行くか。金は十分。

しかし馬はどうしょ……。まだ乗った事無いよ。オレ。

「タロウ。聞いてたわよ。大丈夫、アタシが乗せて行っただげる」

なんと、ソコにはマチルダが旅支度を終えて、立ってた。

お願いするか……。馬に乗れないオレではどうにもならないモンね。

「お願いします。ロングビルさん。」

「ウン、いい返事」

ルイズにはオレは馬に乗れネ。

だからロングビルさん（ルイズは出来てる事承知）に乗せて行っただけ貰う。

アルビオン出身だから道はバッチリ、と言う事で、
旅はロングビル、タロウ、ルイズの三人となった。（ピカも。）

そろそろ出発しようとしてると、ピカがルイズにジャレて遊びだした。

「チョッ、ピカちゃん。大人しく乗って。お願い。」

ルイズとピカがジャれてると・・

一陣の風が舞い上がり、ルイズに抱きつくピカ。ユウを吹き飛ばしたのだ。

「ぴかーーーーっ!」

「ピカちゃーん。」

「誰だ!」

朝もやの中から一人の長身の貴族が現れた。羽帽子を被っている。

「……チョツと・・アンタ・・

わたしの大切なピカちゃんに何て事してくれたの?」

「僕は敵じゃない……。ホゲーーーーっ!」

ルイズは皆まで言わせず、貴族に対し爆発魔法を発射した。手加減ナシ……のを。怖っ。

粉塵が収まると、ヨロヨロと貴族は立ち上がった。

だがルイズの怒りは収まっておらず、貴族の大切な場所をカーンと言う音が聞こえるみたいに蹴り上げたのだ。

「うわっっっ、アレは……。」

「痛いでしょうねえ。男性には。」

「何て事をしてくれたの？アンタは・・・生きて帰れるとは思わないでね・・・。」

氷よりも冷たい声でルイズは貴族の男性にトドメをさそうとしてる。

「ま、待ってくれ。僕だ。ワルド子爵。女王陛下の魔法騎士隊、グリフォン隊隊長。ワルドだ。」

「そのワルド様がどうしてわたしの大切な使い魔のピカちゃんに乱暴したのですか？

返事によつては残りの・・・。」

「ま、待ってください。ルイズ様。お願いします。どうかトドメは勘弁してください。」

「じゃ聞くわ。言い訳を。」

ワルドは凍えた心で考えてた。あの動物を飛ばす事で彼女の印象を良くしようと思つてたハズだ。

しかしアレは彼女の使い魔・・・マズイ。完璧に怒ってる。

とにかく言い訳しないと、マズイ。片方も潰されてしまう・・・。男として最悪の結果になる。

「すまない、ルイズ。僕の婚約者が異型の動物に襲われてると勘違いして吹き飛ばしてしまった。
本当に申し訳ない。許してくれ。」

「ふーん？誰が婚約者ですって？」

「ル、ルイズ。どう言う事だ？」

「そんな話は聞いていないと言う事です。」

「そ、そんなああ。」

「ま、許してあげますわ。」

それで、ココに来たのはと言う訳ですか？これから出かけるのですが。」

「君達に同行する事を命じられたのだ。君たちだけでは心元ないと言う事だね。」

しかし部隊をつける訳には行かず、僕だけが指名された訳だ。」

「そうですか・・・。行き先はご存知ですか？」

「ああ、アルビオンだ。」

「分かりました。同行を許可します・・・。」

まだ腹立ちが収まらないのか、ルイズはプリプリしながら馬にピ力を大切に乘せて出かけ始めようとしてた。

ワルドはルイズにグリフォンに乗りたまえと言ったが、
どうして他人の男性の馬に乗らなければならないのですか？と、
べも無い。

仕方なくワルドは一人、グリフォンに跨りトボトボと皆の馬の後を
付いて行く事になった。

アリ？凄い話の筋が变ってるど？

確かルイズはワルドの婚約者だったよな？

それが違う。性格も変だ。

やはり別な世界の話なのだろうか???

オレは悩みながらマチルダの後ろに捕まりパカパカと馬でアルビオ
ンに旅立ったのだ。

。アンリエッタは、彼女達に加護を与えてください。ブリミル様・
と、オスマンと共に学園の窓からルイズ一行を見送ってた。

ワルドの憂鬱（後書き）

ギーシュが行かない粗筋となります。
モグラの代わりにピカが吹き飛ばされ
ルイズが怒ると言う話にしたかったです。
お姫様は今回はヌルイです。お許しを。

男達の熱い夜（前書き）

ワルドとキモ男の熱い夜の語りです。
男達のロマンを感じてください。

男達の熱い夜

あーるー晴れたー昼下がりー♪

思わずドナドナの唄を歌いたくなるワルドを見ながら旅してるタロウです。

目の前にはマチルダのナイスバディが……。くくつ……。

「遠慮しなくてもいいのよ♪」

今は旅だ。変な空気はゴメンだ――！ガマンしよつ。

ワルドは蹴られた股間が大変なのか、水の秘薬を飲みつつ、旅してる。

不憫だわ……。

しかしルイズとの婚約は破棄されたと言うか、ルイズの耳にも届かなかったらしい。

ワルドの絶望した顔は大笑いだったが。

しかしコレでワルドのロリは疑惑から確定した。

マチルダ見ても空気見てる感じしかなかったど。ヤツは。後で性癖を聞いて見るか……。さりげなく。

しかし、色々物語のイベントをイジツたせいとか、キャラの設定が狂ってる。

ルイズはツンデレは変わらないが、面倒見が良さそう。

ワルドはウワサだったロリ疑惑が確定しとる。

タバサ&キュルケはまだ分からネ。

マチルダは・・・。

シエスタは色々と厄介になつてゐるね。特に生活面。

一番、原作と違うのはオイラだ。
とにかくキモデブだったもん。

おかげで原作キャラの女性陣に嫌われはしないけど、空気扱い。
ま、いいけど。

マチルダは居るし。

しかしコレで旅の予想が難しくなった。

山賊は襲い掛かるのか？

そしてラ・ロシエールでは誰が襲撃するのか。

成り行きに任せるっきゃ無いけど、用心はしてオコ。

今回はノンビリと馬を走らせているので、乗り換えの必要はナシ。

原作ではワルドのファルコンがやたら飛ばすから、サイト&ギーシ
ユは馬を乗り換えてたな。

ノンビリと走らせれば、馬の旅もオツです。眠くなりそうだけど・・・。

夕方近くになり、さすがに夜の行軍は危険と言う事でキャンプを張る事になった。

しかし女性陣にはキャンプは酷つて言うか、野宿は危険。

オレが鍊金で簡単な屋根付きの家を作り、そこで寝て貰う事にした。ピカはモチロン、ルイズ達と寝てる。

俺たちはワルドと一緒に交代で火の番。

最初はワルドに起きててもらってオレは深夜から朝まで不寝番だ。眠くなったらマチルダに捕まって寝るもんね。

ワルドがオレを起こしたので、交代する事にした。で、ワルドにさりげなく聞いて見る。

「ワルド子爵。貴方はルイズが好きなんですよね？」

「タロウ ヤマダ殿だったか？そうだ。僕はルイズが好きなんだ。」

「でも相手されていませんね？」

「グッ、まったくその通り。股間の痛みと共に実感したよ。」

「で、お聞きしたいのですが、貴方は大きい父とツルペタとドチラが好きです？」

「怪訝な事を聞くね？そりゃチツパイでしょ。人間なら当然。」

「ライライ、言い切ったぞ。コイツ。」

「そ、そうですね。自分、人形を作る趣味あるのですよ。」

ワルドの目が輝きおった。何か勘付いた？

「良かったら見て頂けませんか？コレなんです。」

「こ、これは・・・コレは自分の求めてた世界か・・・。」

チーン、確定です。

コイツはロリだ。

「いかがです？中々の出来と自負してるのですが。」

「凄い出来だ。まさかここまで細かく造形出来る錬金術師が居るとは。」

「自分の国ではロリータと言うジャンルあります。ですが、危険人物認定されかねないのです。」

だから、そう言う人種が架空世界の女の子で満足するために作られた人形なんです。

いかがです？

ちなみにToo overのモモたんと言います。」

「モモたん、

素晴らしい出来だ。これこそ求めてた世界だ。欲しい。金ならいくらでも出す。」

「代金は結構ですよ。今回は。ただ次回からは買って貰います。で、今回の代金代わりなんですが・・・。」

「何を知りたいのかね？」

「ワルド子爵の趣味についてです。」

「趣味か・・・。そうだな。自分は少年時代から大人の女性を嫌悪してた。」

何故かは分からない。

だが、反対に幼い幼女、もしくは胸が小さい女性を見るとドキドキしたもんだよ。

誰にも言っていないがね。何故かキミには素直に言えたが。」

「そうですか・・・。やはり貴方もコッチ側の人間だったのですね。」

「そうだ。僕はロリ好きなんだな。ルイズの幼い頃。そして我が国の姫。」

「ひ、姫って？」

「あ、知らないのか。」

いや、我が国の姫、アンリエッタ殿下は興奮されると幼児化してしまわれるのだ。

ああ、彼女の甘い声だけで、僕はパン三枚は食べられる。」

コイツ、真性ロリだ。

日本に来たら、絶対にハマるな。

それから色々とワルドに妹キャラとか、その他色んなロリ関係を熱

く語ってしまった。

おかげで、ヤツは完徹してしまったが。

「素晴らしい夜だった・・・。」

と、真っ赤な目をして言い切った。

レコンキスタ知らネ？と聞いたら、勧誘されたけど、チツパイとか妹関係とは違うので断ったそう。

コレでワルドとの戦いは消えたとおレは確信出来た。つて、なるとレコンからは誰が俺たちを襲うの??

ルイズ達を起こして、朝餉を軽く食べ、ラ・ロシエールへ向けて出発。

ワルドは眠そうではあったが、オレから貰ったフュギアを大切に抱え、ニヤニヤしとる。

余程嬉しかったのだろう。

犯罪手前で止めてオレも良かったわ。

放置してたら、街中で絶対に幼女を襲ってるぞ。確実に。

昼前にようやく、ラ・ロシエールにたどり着いた。

あるええ。襲撃無かったぞ。

やっぱ、ワルドはいねえ。フーケはいねえで人が居ないのか？

アルビオン行きの船聞いたら、明後日にならないと出ないって事らしい。

ここらは原作と同じだね。ウンウン。

仕方ないから宿を取って、旅の疲れを取る事にした。

一応、貴族なのでこの町で一番高級な「女神の杵」と言う宿。するとそこに居たのよ。キュルケとタバサ。ギーシュにモンモンまで。

何しに来た？と聞いたら、俺達が出るの見て面白そうと思って着いて来た。

ヤツラはシルフィードだから、昨日の夕方には着いてたって。金あるの？と聞いたら。。。オレを当てにしてるんだと。

ガツコに帰ったら返せ！と言って貸してやる事にしたわい。それから酒盛りして、ワイワイやってたが、さすがにワルドは完徹。眠いつて事で、部屋に押し込み寝かせた。

部屋割は「キュルケ、タバサ」相部屋。「ワルド、ギーシュ」相部屋。

「モンモン、ルイズ&ピ。チュ」相部屋。「オレとマチルダ」相部屋。

もう認知されてるのだ。彼女とは。嬉しいなっ・・・と・・・。

マチルダとワインを飲んで色々と話し合いました。

オレの世界の物語ではワルドは敵だった。

だが、ヤツは口リ。

レコンキスタには一応誘われたけど、趣味じゃネ！と断ったとか。そして物語では、この宿の手前の峠で盗賊が襲ったハズだが、ソレも無し。

色々とマチルダに聞いてたら、昔の伝手があるから少し調べて来る

と、姿を消した。

危ない事しないでね」と頼んだのはモチロン。

二時間位で帰ったマチルダが言うには、

黒頭巾被った女が雇った盗賊がこの宿を明日襲う予定だとか。

多分、ミヨズニトニルン、シェフィールドだろう。

使える人間が枯渇してるのか？

ま、マチルダのおかげで対応も楽になった。

感謝を込めて彼女に指輪を鍊金したったら大喜び。

その夜は静かに過ごせた・・・。

翌朝。

何故かワルドがピカ。ユウにケン力を売ってた。

何でも手合わせをしる。負けたらルイズと別れるって。

アイツ、絶対にアホだ。（原作ではサイトだったが。）

見る、ルイズがまた怒ってるぞ。

慌てて土下座して、ピカにもゴメンナサイして許して貰えたけど。

オレもキモ男とか変態とか良く言われたが、ヤツには負けた。

完敗だ。勝てる気がしない。

学習能力、ナシに就けれるグリフォン隊隊長って、余程お気楽な部署なの？

その夜、襲撃の可能性が高いから、今宵は酒盛りナシ。
そう告げて荷物も纏めて何時でも出られる体制にした。

男達の熱い夜（後書き）

主役のキモさが霞んでしまいました。

大きな穴の中の山賊さん♪（前書き）

初戦闘です。

割合まともに戦えています。よね？（＾
―
＾
・
）

大きな穴の中の山賊さん♪

タロウ！ウルトラマンNO6♪
ウルトラの父が居る、ウルトラの母が居る、
そしてタロウがココに居る♪

タロウです。只今絶賛戦闘中です。ハイ。

シェフィールドさん、ワルドとか雇えなかったので、
山賊を大量に雇ったらしいですね。

少なめに見ても千人は居るぞ。

オイオイ・・・。

たった数人を殺すためにはオーバーキルでしょう。
普通ならば・・・。

しかし普通で無い人間が少なくとも三人。
見習いのルイズを除けば、他の生徒も戦力になります。
まずは、オレとマチルダの順番ですね。
とにかく敵が多すぎ。減らす必要があります。

「マチルダ、オレは大きな落とし穴を作る。
そいつ等が落ちたらゴーレムで踏み潰せ。
情けは無用だぞ。」

「当たり前よ。情けかけたらコッチがお陀仏。
ワルド、アンタは偏在使えるんだろ？
偏在で子供達を個々でガードして。」

「承知です。」

この世界のワルドは使えるね。裏切る心配も皆無。
オレを神とか先生とか言い出したのには参った。

余程フュギアが御気に召したみたいだ。

生きて帰れたら、また作ってやる。

タバサ、キュルケ、ギーシュ、ルイズ、モンモンは戦闘には参加せず、自分の身のみ守れと告げた。

今は邪魔だ。

「マチルダ、来るぞ。穴を作るからその後ろにかくデカイゴレムを。」

「任せな！」

オレは深い穴を錬金で作る瞬間を待ってた。

既にイメージは完璧。

来た！

敵が穴を作る場に到達。

瞬間的に錬金で大穴を作成。

穴の底には竹やりを設置してたのは言うまでも無い。

「ヨッシ、マチルダ。少なくとも半分は落ちた。潰せ！！！」

「アイヨ。アンタ。」

何か長年連れ添った夫婦みたいな会話しながら、戦闘してる俺たちって・・・

穴の中は阿鼻叫喚の地獄。

悪いね。

俺達はまだまだ生きたいの。アンタ等に命は渡せないってーの。残りの半分の山賊連中はさすがに脅えたのか、勢いが減じた。だが、見逃す訳には行かない。

「マチルダ、ワルド。ヤツラを見逃すなよ、とにかく潰せ。」

「「応!」!」

「キュルケ、悪いが穴の中のヤツラを焼いてくれ。ギーシュは焼いたら埋めろ。」

「分かったわん、ダーリン♪」

「師匠、初めての戦闘。見事です。後始末はお任せを。」

「タバサ、オレと組んで接近して来る連中を叩き潰してくれ。オレは接近戦闘に入る。」

「・・・承知・・・。」

「ルイズとモンモンはピカと一緒に隠れてろ。今は邪魔だ。」

「分かったわよ。ピカちゃん。コッチに居てね。」

「仕方ないですわね。」

やはりルイズにピカ渡したのは正解だったね。

もし一人だったら、無謀にも戦闘に参加してグチャグチャにかき回されただろう。

「デルフ、初戦闘だな。頼むぜ。」

「嬉しいねえ、相棒。じゃオレ様も頑張りますか♪」

デルフはサビ剣から、見事な光る剣になりおった。
それからはもう一方的。

戦闘は最初の一番槍が一番大切と言うが、アレは本当だ。

俺達の一撃で、多くの戦力を減らされた山賊はもう烏合の衆でしか無かった。

だが見逃す訳は無いので、徹底的に潰し、排除した・・・。
生き残りは僅かな重傷者のみ。

ソイツ等もいずれは獄の露と消えるだろう。

「終わったな・・・。」

「そうね。アンタ。」

「皆もご苦労だった。ルイズも邪魔せずに大人しくしてくれて助かったよ。」

おかげで連携も完璧。敵も殆ど殲滅できた。ありがとう。」

「ダーリン、本当は強かったのね？ 錬金だけかと思ってたわ」

「・・・見事だった・・・」

「師匠、見事な采配でした。ギーシュ、勉強になりました。」

「先生、素晴らしい采配でしたよ。」

我々の戦力を見事に最大規模に発揮出来たのは先生の采配があればこそです。」

「ふ、ふん。わたしの使い魔なら当然よね。でも助かったわ。アリガト」

「ピカー」

「皆、第二陣が来る可能性も高い。とつととアルビオンに行こう。ワルド。風石が足りないかも知れないから補助魔法を頼む。」

「お任せを。」

このワルド、本当に使い易い。

ロリなのはアレだが、戦闘に余計な感情は入れない。

そしてオレを信頼してくれてる。

コレが大きい。

この世界のワルドはアタリだったよ。

本当ならタバサ辺りを当てがいたいけど、彼女はガリアの王族だもんな。

さすがにムリ。

いい感じのロリツルペタ居たら、何とかしてあげたいよ。

木の上の船着き場に着くと早速交渉。

ワルドが足りない魔力を補う事で出航許可を得た。

キュルケ達をどうするか迷ったが着いて行くと言うので、

自分の身は自分で守れと言うと分かったと言うので、連れて行く事になった。

積荷を聞くと硫黄らしい。

多分、原作と同じで風賊のウエールズが襲って来るんだろうね・・・。

こうして初戦闘は何とか全員無事に勝利出来た。

やはり戦闘は数と信頼だ。

次はアルビオンか・・・。

ウエールズが斃れると厄介なのね。

ワルドは既にコッチ側だから、気をつけるのはヤンデレシェフィールドのみ。

あのヤンデレ姉ちゃんはジョセフにベタ惚れしてるから厄介なのよ。出会ったら全力で潰さないで。どうしようかな・・・。

思考のループしてたら、疲労からオレはマチルダに背を預け寝てしまった・・・。

大きな穴の中の山賊さん♪（後書き）

ワルドが味方だと、心強いですわ。
次回はアルビオンです。
モンモン忘れてました。加筆修正。

虚無の目覚め（前書き）

ルイズに虚無に目覚めてもらいます。
今回はオフザケ無しです。

虚無の目覚め

ねんねんころりーよー、おころりよー♪

アーア。良く寝た。

マチルダの背中借りて爆睡してました……。が。

ココはどこ？

何時の間にかアルビオン空軍の空賊船モドキに捕縛されてました。マチルダには、多分ウェールズだろうから、暴れずに大人しく捕まれと言ってたので、皆、素直に捕縛されたみたいです。

でも一応ウェールズかホンモノの海賊モトイ、空賊さんが確認しないかね……。

……。

どうやら本物のウェールズ皇太子でした。

マチルダと顔を合わせたら、向こうが気づきましたもん。

「サウスゴード伯爵の遺児、マチルダ殿ですね。」

「ああ、そうさ。今はトリスティンの魔法学園で秘書で働いてるよ。」

「サウスゴード伯爵の件、本当に申し訳なかった。許せとは言いません。」

ただ、本当にすまなかったと思います。」

「もういいよ。アンタ等も大変な目に遭ってるだろ？」

「もったもです。」

「は、始めまして。トノスティン王国、ラ・ヴァリエール公爵三女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールです。アルビオン王国、ウェールズ・テューター様にアンリエッタ王女から密書を預かっております。」

「ありがとう。ウェールズ・テューダーだ。ヴァリエール公爵三女、ルイズ殿。」

「遠い所を本当にありがとう。」

ルイズがアンリエッタから預かった指輪をウェールズの持つ風のルビーと交差させると、

共鳴し、虹色の光を振りまいた。

王家にかかる虹らしい。・・落ちかけているけど。

ウェールズの持つアンリエッタから貰った手紙は城にあるので、一旦城に帰る事になった。

その際、「マリー・ガランド号」にも避難民を乗せて退避して欲しいらしい。

だが・・。

ウェールズがこの場で斃れても、その遺体はアンドバリの指輪で、レコンの傀儡となってしまうのである。

何とか出来なかな??

いずれは、死体ウェールズがアンリエッタを浚いに来る迷惑も蒙る。どうするべ??

こう言う時は愛しのマチルダと相談に限る。

「なあ、マチルダ。相談あるんだべ。」

「なんだい？アンタ。」

「ウェールズなんだけどね。この場で斃れても、遺体が再利用されてしまうのだよ。」

「トリステインのラグドリアン湖の水の精霊から奪ったアンドバリの指輪でね。」

「気持ち悪い話だね。そしたら、私達にも迷惑がかかるのじゃないの？」

「その通り。オレの国の物語じゃ、アンリエッタを死体のウェールズが浚いに来てしまうのだわ。」

「迷惑なのよね。死体になられると。再生不可能な死体でも何とかしてしまおうと言うらしいから。」

「ふーん。そしたら死ぬとか騒いだら、何とか叩きのめして船に乘せるのが一番だろうね。」

「王家の王様も含めて。」

「難しいだろうけど、何とかしないとね。後で迷惑を蒙るのはコッチだもん。」

「困ったもんだ・・・。」

結局、当たって砕けてダメなら死なない程度に叩きのめして船に放り込む。

こうする事にした。

それよりもアノ指輪だ。

どうにかしてシェフィールド&虚無モドキの坊さんから取り上げないと、世間が迷惑ですよ。

あのガリアの無能王、ジョセフも含めてね。

その時、俺達の会話をタバサに聞かれてた事はまだ知らなかった・・。

白い国、アルビオン大陸の真下の秘密の港からニューカッスルに着いた俺達は、

ウェールズ案内の元、ジェームズ一世に接見した。

もつともマチルダはジェームズだけは会いたく無いと拒んだがムリは無い。

ウェールズもジェームズだけには会わせず、待機してもらう事にした。

ジェームズ一世は俺達に会うと「ようこそ、トリステインからの客人よ！」歓待してくれた。

王の玉座前のホールは兵士が明日の決戦に備え、ありったけの食料でご馳走を作り、

酒を酌み交わし、大騒ぎしてた。

明日は死ぬ身だと言うのに、彼等は明るい。

だが、死なれると厄介なのよ。ホンマに。

ジェームズにはさすがに話が通じないので、オレは密談出来る部屋を準備してもらい、

マチルダ、オレ、ウェールズで密談する事にした。

「ウェールズ王子、貴方は明日の決戦で斃れる気なのですか？」

「タロウ殿でしたね。当然です。王家の最後をレコンキスタに見せ

てやるつもりです。」

「残念ですが、敵は貴方の遺体も再利用するケダモノですよ。悪い事は言いません。一回逃げて、再起するべきです。」

「遺体を再利用するとは？」

「そのままの言葉ですよ。」

ウェールズさんが戦死したら、ヤツラは貴方の遺体をアンドバリの指輪と言う秘宝で、再利用。

傀儡に使ってしまうのです。その後は貴方に価値が無くなるまで使われてしまいます。」

「な、なんと。。でも何故キミはその事を知ってるのだ？僕達でも知らない事を。」

「マチルダには話しましたが、オレは異界からルイズによってこの世界に召喚されました。」

その世界では、この世界の事がルイズを中心とした物語になったたのです。

色々と確認しましたから、間違いありません。

今回の戦争の真の黒幕はガリアの無能王、ジョセフです。

ヤツの傀儡として、レコンキスタのクロムウエルは踊ってるのみです。

ヤツが虚無と称する力はラグドリアン湖の水の精霊の秘宝、アンドバリの指輪に寄るだけです。

貴方達の味方が全てヤツに寝返ったのは、アンドバリの指輪で精神を誘導されたからです。

また斃れた多くの兵士も死体兵士となって、この城を攻めています。貴方が倒れたら次は貴方が亡霊となって戦わされるのですよ？

貴方はそれを望むのですか？でしたらこの場で、自分達が塵も残さず、貴方を処理します。

王と一緒にね。」

もう腹を決めたモンね。

このアホ王族を放置してたら次はトリステインだ。潰すのはムリでも迷惑を蒙るのはカンニンですぜ。

ウェールズはあまりの内容に絶句してたが、オレの話には色々と納得してみたいだ。

特に貴族すら寝返ったのはあまりにもおかしいと感じてたらしい。だが、何もせずにこの城を渡すのはシヤク。

何かイタズラ出来ないか……。あつたああああ。

「王子、この城には「始祖のオルゴール」と言う秘宝ありますよね。アレと貴方の持つ風の指輪がセットで無いと、虚無魔法の詠唱は聞き取れません。」

「ルイズ嬢が虚無？」

「そうです。そうすれば彼女は巨大な爆発魔法を出せます。

オルゴールと風の指輪がセットで無いと、虚無魔法の詠唱は聞き取れません。」

聞けるのは虚無の伝承者だけです。ガリアのジョセフも虚無です。」

「そ、そうなんだ。分かった。明日一番でルイズ嬢にお貸ししよう。今は藁でも掴みたいからね。」

「お願いします。」

その夜の密談はそれで終わり、明日に備える事にした。

ルイズとワルドの結婚式イベントはルイズが嫌ってるからナシ。
ワルドも味方だ。

生徒のモンモン、キュルケ、タバサ、ギーシュ、そしたピカは朝
一番で、

難民と一緒に帰ってもらう事にした。

ルイズには重要な役目があると言い、残ってもらった。

「ルイズ、この王子の風の指輪、それを嵌めてこのオルゴールを聴
いて欲しい。

君の魔法が聞き取れると思う。今こそ本当の事を言おう。君は虚無
だ。」

「わたしが虚無??」

「そうだ、虚無^{ゼロ}のルイズだ。君が魔法を発動出来なかったのは、系
統を知らなかったから。

オレがこの国に呼ばれたのも虚無だからだ。虚無の系統者は伝統的
に人間を召喚するのだ。」

「ほ、本当に??」

「うん。本当だ。そしてその聞き取れた詠唱は、敵にブツケテ欲し
い。

爆発魔法と言うのが出て来ると思う。

その詠唱を今まで貯まっていたストレスと一緒に眼前の敵に叩きつけ
る。」

「タロウはこの国に来てから、わたしを色々と指導してくれた。
おかげでコモンとは言え使える様になった。

使い魔として。ピカも貸してくれた。わたしはタロウを信じる。
そして敵を殲滅し、王子を死なせない。」

「ありがとう。ルイズ。じゃ指輪とオルゴールを。」

「ルイズ嬢、お願いします。」

ルイズが風の指輪を嵌め、始祖のオルゴールを開くと、自分達には聞こえないが彼女にだけは、
虚無の詠唱が聞こえたらしい。様々な詠唱を聞き、エクスプロージョン爆発の詠唱も覚えた。

指輪とオルゴールを手に持ったルイズは、城のベランダに立ち、詠唱を始めた。

詠唱が終わるとルイズはカツ！と目を開き、「エクスプロージョン」と発動。

地響きと共に眼前に迫ったクロムウエル率いるレコンキスタの大半が消し飛んでた。

さすがの威力に多くの兵士はアツケに取られ、ウェールズもビックリしてた。

ジエームズもワルドも・・・。

「凄まじい威力だな。コレが虚無か？」

「そうです。ですが、彼女の事は国家機密にしてください。
緊急事態でしたので他国の王家の前で使いましたが、

他の国やトリステインの貴族に知られる訳には行きません。」

「そうだね。自分達も絶対に口は割らない。さてどうしようか？これから。」

「そうですね。ワルド居るか？」

「何でしょう。先生。」

「すまんが偏在でレコンキスタのクロムウエルを見つけて来てくれ。死んでも指輪は残ってるハズだ。アレを他国に取られる訳にはいかない。」

「御意です。早速・・・。」

「タロウ君。君って・・・。」

「何故かワルド子爵に好かれてしまいましたよ。アハハハハ。」

「僕ともトモダチになってくれるか？王家としては無くただのトモダチとして。」

「いいですよ、ウェールズ王子。」

「呼び捨てで構わない。タロウ君。」

「じゃオレも呼び捨てです。ウェールズ。」

「ヨロシクな。」

ワルドの偏在は斃れてたクロムウエルを発見。

指輪は無事回収された。

指輪を外すと今まで攻撃しようとしてた生き残りは正気に戻り、亡霊兵士は死体に帰ってしまった。

これでアルビオンを騒がせてたレコンキスタは完全に壊滅。
シェフィールドらしき女は居なかったらしい。
チツ。

これなら残りのアルビオン正規軍でも何とか出来ると言う事で戦争状態は終了。

ルイズの任務は完了した。

始祖の秘宝は、封印して貰い、
アルビオンの使い手が現れる日まで、大切に貰う事になった。

タバサ達を乗せた難民を乗せた船はまだ出港して無かったので、
ルイズとワルドも一緒に帰って貰う事になった。
ワルドは帰国したら、もっといいフュギアを作ってあげるから、
子供達の護衛を頼むと言うと喜んで引き受けてくれた。

アンドバリの指輪はオレが預かり、王家との面談後水の精霊に返す予定だ。

さすがに危険だもん。この指輪は。

俺達はマチルダと知り合いに会ってから帰ると言い、
彼女達と別れ、一路、テファの住む森へと旅立つ事にした。

虚無の目覚め（後書き）

次回はテファとの出会いです。
楽しみですね。

ウエストウッドの天使（前書き）

テファと会います。

少しでも神様使います。お許しを。

今回は短いです。

ウエストウッドの天使

あゝるゝ日ゝゝ森の中ゝテファたんにゝ出会ったゝ

タロウです。ども♪

マチルダと一緒にテファに会うため、ウエストウッドの森へと向かっております。

馬を一頭ウェールズがくれたのです。

おかげで楽々な旅です。

マチルダも故郷なので、道は詳しく安心していきます。
で、出会えましたよ。

ヴァストレヴォリユーション
双山に。

普通、巨乳と言うとバランス悪くなる方も多いのですよ。
バストに引っ張られて、他も巨大化される方。

でも彼女は完璧。

出る所は凄いのに、ウエストは締まり、そしてヒップ。

まさに「ボンツキュッボン」です。

コレは彼女のための言葉ですな。

まさか現実に拝める日が来るとは・・・。

ルイズに感謝しましたわ。

思わず拝んでたら、マチルダとテファが呆れていました。

だってこんなの見たら男なら誰でも拝みますよ。
ホンマに。

女性なら嫉妬で狂う人が出るのも仕方ないです。

でも彼女は清純な乙女。

不埒な思いはNGです。

「始めまして。トリステインでマチルダと一緒に働いてるタロウ
ヤマダと言います。」

「は、始めまして。わたし、ティファニア・ウエストウッドと言いま
す。」

テファと呼んでください。お姉さんの同僚なんですか？」

「ああ、テファ。その内に旦那にするつもりだがね。」

「ちよつ、マチルダ。」

「なんだい？裏切るつもり??」

氷よりも冷たい目で見られては反論も出来ず、イエス、マイマム、
と言うつきや無いです。

そしてテファや子供達と歓談。

子供達がオモチャも持っていない事を知り、竹とんぼを鍊金してあげ
たり、

女の子にはり。ちゃん人形を作ってあげた。コレは女の子のツボに
来たみたいで、泣いて大喜び。

着替えは自分で作ってね、とお願いしたけど。

男の子は超合金Zですよ。コレもツボに来ましたね。

お面とか色々とおもちゃ作ってたら夕方。

ご飯の支度すると言うので、お世話になりました。

仕送りが潤沢なせいか、そんなに貧しい食事ではなく、美味しく頂けました。

でも彼女、家でも帽子を取らないのですよ。

不憫です。

何とか出来ないかな・・・。

さすがに鍊金とか水の魔法でもフェイスチェンジは難しそう。

何よりも失敗が出来ない。

困った。

<久しぶりじゃの〜！>

おお、ネ申様。お久しぶりです。

<テファたんハアハアしてたのじゃろ？>

それもあるのですが、彼女の耳、何とか出来ません？

<そうじゃな。何とかしたるわい。ワシも彼女好きじゃしね。>

おおおお。さすがネ申様。ありがたい事です。

<ま、自力で頑張ってる褒美じゃ。彼女も町を歩けるだろ？>

そうです。では・・・。

<ウム。ちえゝゝんじゝもう出来てると思うぞ。>

おお、ありがたやありがたやゝ

<ウム。じゃワシは消えるぞ。ばいばいきーんゝ>

これでテファの耳は大丈夫だ。ウエストウッドからトリスティンに連れて行こう。

金なら何とかなるしね。

「テファ、帽子を取ってごらん？」

「えっ、でも・・・。」

「心配しなくても大丈夫。魔法でキミの耳は普通の耳に変えた。もう誰もキミをハーフエルフとは分らない。安心して、帽子を取りなさい。」

「アンタ、何時のまに・・・。」

テファは恐る恐る帽子を取り、自分の耳を触る。

長かったエルフの耳が普通の耳と分かると泣いて大喜び。

可愛そうに。辛かったんだろっね。

これで親も家も無くしたのだから。

そしてマチルダと協議し、テファや子供達は全員トリスティンに引き取る事にした。

住む場所は学校の郊外に孤児院を建築。

金はオレが出すからと言い、全員荷物をまとめ、トリスティンに行く事になった。

明日は全員で馬車に乗り、スカボローの港に向かう。

サイトも居ないし、この村の近くの戦闘もレコン潰したから大丈夫だろ。

こうしてウエストウッドの天使は消えた。

ウエストウッドの天使（後書き）

テファをトリステインに連れて行きます。

まだハーレムはありません。

あるのか・・・な？（＾|＾・）

次回から新章に入ります。

虚無のルイズ（前書き）

ルイズを交えたゴダゴタの日々です。
主人公が恫喝されています。

虚無のルイズ

俺達がテファと出会ってた頃・・・

ルイズ達一行は難民と共にトリスティンに着いてた。

港からワルド護衛の元、

馬とタバサの使い魔シルフィードに便乗し、城に着いたのは翌日の昼頃。

王城に着いたルイズ一行は王女に接見を求めた。

> 空からは来ていないので、衛士隊とは揉めなかった。

「ルイズ！」

駆け寄るアンリエッタの姿を見て、

ルイズは「はあ、これで解放されるわ・・・」と安堵してた。

一応、キチンと言ってオコ。

「姫様！」

二人は魔法衛士隊が見守る中、ひっしと抱き合った。

「ああ、無事に帰って来たのね。うれしいわ。ルイズ。

ルイズ・フランソワーズ・・・。」

「姫様・・・。」

「件の手紙は無事預かって参りました。その他の話はココでは無く・・・。」

「分かりました。同行の皆様。すいませんが、別室にお茶など用意させます。」

そちらで御待ち頂けますか？ワルド子爵。この度の護衛。本当にご苦労様でした。」

アンリエッタは同行の皆にお礼を言うと、ワルド他の皆を別室に案内。

ルイズとアンリエッタはアンリエッタ居室で密談を開始。

「道中、何があったのですか？」

「はい。ラ・ローシエルでは多くの山賊に襲われ、ワルド子爵、自分の使い魔タロウ・ヤマダ。」

そして婚約者のロングビル嬢の迎撃で、山賊を撃退。その後アルビオンに渡りまして、

途中、空賊に襲われたのですが、それが・・ウェールズ様でした。

彼と出会い、明日は全滅覚悟の討ち入り壮行会を行っていたのですが、私の使い魔、タロウの

機転で、わたしのある魔法を発露。レコンキスタは壊滅させました。

」

「まあ、レコンキスタを壊滅させたのですって。ルイズ。貴女はどんな魔法を？」

「姫様、この話は絶対に国にも漏らさないください。お願い出来ますか？」

「大切な話ですもの。当然です。確約しましょう。」

「分かりました。お話しします。私は虚無だったのです。アルビオンの秘宝を借りて、

虚無魔法の詠唱の一部を取得。

エクスローション
爆発を発動させ、レコンキスタを壊滅させました。」

「そ、そうだったんですか。」

王家の誰かが何時か目覚めると言われてた、虚無がルイズだったのですね。

では、アルビオン王家は？」

「ハイ。無事です。ウェールズ様も元気で復興に力を尽くされております。」

「本当にご苦労様でしたね。」

ルイズ・フランソワーズ。貴女のおかげでわたしは安心して嫁げます。」

「姫様、虚無の件は絶対に秘匿してください。」

わたしも完全に目覚めた訳ではありません。」

「分かっていますよ。ルイズ。」

その後、使い魔のタロウが所用でアルビオンで別れたので、帰国後再度王家に出頭するので、その際はヨロシクと言い、ルイズ達は城から学園に帰った。

褒美はさすがに事が大きいので、少し待ってて！との事。期待デキネけどね。

俺達はテファと子供を連れ、トリステインに向かった。

さすがに子供連れでは馬でもキツイので、馬車を作り、馬を借りたが。

御者はマチルダに頼んだ。馬の機嫌なんか分かんないモン。(T)

ようやく首都、トリスタニアに着いたのは翌日の夕刻。

ココで一時的子供達とテファは宿を取り、

孤児院の建築が終わるまで待機して貰う事にした。

マチルダと二人、学園へ帰ると、既にルイズ一行とワールドは学園に着いてた。

「先生、お帰りなさい。」

「アンタ達、遅かったのね。何してたのよ、」

諸々から色々と質問され、ワタワタしながら受け答えしてた。それにしてもワールド。仕事はいいの？

。「先生を王女に謁見させるまでは護衛の仕事は継続中です。」と・・。

後でフュギア作ってあげるよ。今回は本当に頑張ってくれた。原作では裏切り者ワールドだったが、アレなのを除けば頼りになったよ。

ホントに。

オレとマチルダはオールド・オスマンに報告し、学校郊外の土地を貸して！と頼んだ。

孤児が居るので、近所で面倒見たい。

マチルダの妹も居る。だからお願い、オスマン！

別に問題なく借りれてしまったけど。

建築はオレとマチルダと言う二人の土メイジが居るから、問題ナシ。明日にでも建ててしまおう。

その後、ルイズの部屋に行き、アルビオンでは話せなかったルイズの虚無について、

真実を交えた作り話として教えてあげた。

オレがこの世界に入る時、神から少しだけお前の事を聞いてた。

ルイズは虚無。

だから、ドット魔法すら使えなかった。オレがルイズに魔力コントロールを教えたのは、

危険防止もあるが、普段でも武器として役立てる様にしたかったのだ。

護衛のオレが居る時は別として、居なくても何とか我が身を守る様になって欲しかった。

虚無魔法を完全に知るには、ルイズは水のルビー、始祖の祈祷書が必要。

始祖の祈祷書は必要な時にしか、伝承者でも読めないマジック本だ・。とね。

あつけにとられて聞いてたルイズだが、実際に自分は虚無だったし、一部だけとは言え、

魔法も発動した。疑う余地はない。

分かった、後日、王宮に行くので、その際に王女に謁見し、説明して欲しいと頼んだのだ。

オレはルイズの部屋を出て、自分の部屋に久しぶりに帰ろうとしてた・・・が。

「・・・・・・・・・・。」

タバサ、何でオレに絡むのよ？（泣）

「何か御用ですか？ミス・タバサ。」

「貴方は何者？？」

「以前、お答えしたと思いますが、他国のメイジ、タロウ ヤマダですよ。」

「アルビオン行きの船の中で秘書との会話を聞いた・・・。」

ゲツ！！まずいぞ。アレを聞かれてたのか・・・。
どうしょ・・・。

「貴方の国の物語に私達の世界が書かれていたと聞いた・・・。
私の事も知ってるの？」

どう答えよう。さすがにタバサの事は危険。下手に関わると国家問題。

困った・・・。

「ミス・タバサ。この事は絶対に誰にも、そう、貴女の上司、イザベラにもね。」

「何故それを・・・。」

「ご存知の通り、この世界はオレの国では物語となつてたのです。その中には当然、タバサ、いやシャルロット姫の事も書いてありました。」

貴女の家的事もね。母上がエルフの毒を盛られ、発狂されているとの事。

大変だと思います。協力してあげたいのは山々ですが、自分もこの国では力の無いメイジ。

ましてや国家間問題にもなりかねません。

ただ、貴女の母上を治せるかも知れない方法は分かります。」

「それは、ナニ？」

「エルフに作らせるのです。貴女の母上を狂わせたのはジョセフが懇意にしてるエルフ。」

ビターシャルです。ですが、ヤツは強い。

カウンターと言う常識の通じない魔法を使います。

下手に攻撃しても、すべて自分に跳ね返る恐ろしい魔法です。」

「・・・そう・・・でも今までは手がかりすら分からなかった。感謝する・・・。」

「絶対にアセつてはダメです。自分の物語ではジョセフは滅びます。それまで待つのです。」

「彼は自滅するの？」

「その通り。彼は狂っています。貴女の父、シャルル公を暗殺してから、人間の心無くしています。」

「分かる。もう道理が通じなくなっていると、イザベラも言ってた。」

「出来る協力はしますから、絶対に突っ走らないでください。一人で戦うのは無謀です。」

「まずは時を待ってください。」

「・・・分かった。貴方の采配は見事だった。信じる・・・。」

「ありがとう。タバサ。」

でも、本当にこの件は誰にも言わないで欲しい。オレも自分の身が可愛いからね。」

「当然。わたしも誰に言う訳が無い。でも、言いづらい事を話してくれて感謝する。」

「時を待ってください。そうしたら、貴女の未来も開ける。今は我慢の時期です。」

「辛いけど、分かった。色々ありがとう。」

そう言うとタバサはスタスタと寮に帰って行った。

「たたく冷や汗出たぜ。」

まさか聞かれてたとは・・・。

何とか納得してくれたけど、どこかで暴走するのよね。特に母親絡みだと。

注意してオコ。

部屋に帰り、フロに水を張って沸かす。もう疲れた。今日は寝ようと思う・・・。

翌朝、マチルダと一緒に孤児院を借りた土地に建ててた。

二階建てで、二階の部屋数は男女別に五部屋作り、一回は食堂と管理人室。

マチルダに入ってもらおう。テファはその隣だ。

フロも当然作り、井戸を掘っておいた。コレで大丈夫だろう。

夕方までかかったが、固定化もマチルダと二人でガツチリかけたので、相当頑丈になったと思う。

ようやく孤児院の受け入れ支度が終わった夜半。

ルイズから呼び出され、明日、王城に出かける事になった。

考えて見たら、あの姫と会うのは初めてだわね？

城の帰りにテファ達を連れて帰ろうっと♪

虚無のルイズ（後書き）

次回は王女との謁見です。

人形の錬金術師（前書き）

主人公が二つ名を姫に貰いました。

人形の錬金術師

翌日、オレは何時もの如く、マチルダに乗せて貰ってトリスタニアに向かった。

同行はワルド、ルイズ+ピカだ。

ワルドには劳いの意味で、モモたんの姉のナナたんフュギアを渡した。

中々の力作です。

これで双子が出来たぞ！と言ったら狂気してますた。

もう一生着いて行きますって。ライライ・・・。（^ー^）

で、王宮に着いた訳です・・・。

ルイズとピカとマチルダの三人と一匹にて王女の居室に行く。少しドキドキしてます。

何せ前世を含め、女性の部屋に入っただのはルイズだけです。

未だにマチルダの部屋にも入った事はありません。

何せキモ男のヘタレでしたから。

マチルダとの過ちもあの一回のみ・・・。（T―T）

お姫様の部屋です。

何かマニアの匂いが漂うのですが・・・。

いえ、危ないマニアではなくて、自分に近いマニアの匂いです。

子供帰りする方と聞いてましたので、もしかしたら、自分の趣味と近いかも知れません。

流れに任せますか。

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール並

びに使い魔一号、

タロウ・ヤマダ、二号、ピカ。ユウ、参上しました。」

「ご苦労様です。ルイズ・フランソワーズ。

そして始めまして。タロウ・ヤマダ殿。ピカ。ユウ様。

この度のアルビオン遠征では活躍されたそうで。本当にありがとうございました。

私はトリステイン王国王女、アンリエッタ・ド・トリステインです。宜しく願います。」

「使い魔一号のタロウ・ヤマダです。隣がピカ。ユウです。

姫様、始めまして。」「ピカーーーッ」

オレはアンリエッタ王女と歓談しながらも、

部屋の周囲から何となく匂う、マニアの匂いに惹かれてた。

ルイズと姫が歓談始めてヒマとなってたオレは鍊金でフュギアを作り始めたのだ。

土鍊金については隠す必要も無いので、結構大胆になってます。

後で孤児院の女の子に渡すつもりで「リ。ちゃん人形」を作ってた。それを見かけた姫、顔がピクピクしてる？

「姫様、もしかしてお気に入りでしょうか？」

「いいえ、ですが、見た事の無い人形ですので・・・。」

「わたしの国の幼児が遊ぶ「リ。ちゃん人形」と言います。

着せ替えして遊ぶ女の子のオモチャです。」

「まあ、素敵ですね。でもタロウ殿ってお子様でもいらっしゃるのですか？」

「いいえ、知り合いに孤児が居るので、その子達のオミヤゲです。」

「優しい方ですね。それで、あのううう。」

「姫様、もしかしてお気に召したのでしょうか。」

「ハイ。もし宜しければお譲りして頂けないかと・・・。」

「分かりました。姫様に差し上げます。」

「まっ、本当でしゅか？アタチ・・・嬉しいiiiiiii。」

ヤベ。ウワサに聞いてた幼児化スイッチが入ってしまったみたいだ。

しばらく狂気してたら、収まったらしく、

それでもリ。ちゃん人形持ち、顔は緩みっ放し。

そして定期的に「お願い」される様になるのは後の話である。

それで今はどんな人形持つてるの？と聞いたら、見せてくれましたよ。

ええ、多分この時代のオモチャとしては最新鋭のでしょうね。

俺達の時代ならアンティーク人形となると思うアレです。

とにかくリアル過ぎで、夜は怖いアレです。

そんで姫様に、「夜は怖くないっスか？」と聞いたら、怖くてチビリそう。

でも他に遊べる相手も居ないと言うので、怖く無い様にイチついていいです？

と、聞いたら、お願いiii、と頼まれました。

趣味に走るべ！

人形自体の素材は変えず、顔形や体系をアニメ風のアレに変え、

少なくとも抱いて寝るにも良くなったと思う。
姫に聞いたら、とても嬉しい・・・とまた幼児化された・・・

脱線してしまったが、話は今後のルイズの事だ。

虚無の系譜に連なるルイズが、虚無を真に覚えるには、始祖の祈祷書と水のルビーの指輪をセットで持つ。

それでも覚える時期では無い時は祈祷書には文字は見えない。
そう説明してあげると、姫はんじゃやるわ！とルイズに祈祷書を読んだ。

指輪は既にもらったので、返さなくても良くなったらしい。
オレはルイズに「ヤヴァイ呪文が多いから乱用は絶対にするな！」と厳命したのは言うまでも無い。

魔法使いとしては、ルイズは幼児と同じだからね。

誰かがキチンと指導しないとイケません。
アンリエッタ姫は少しタイとこを除けば、巷で言われてた程じゃネえと思いました。

姫には人形の錬金術師として認識されたみたいだ。
金の錬金については、内緒にして貰う。
ピンボトリステインの金蔵にされたらたまりません。
人形程度が一番です。

姫からは褒美と称して、人形の錬金術師と言う別名を頂いた。
自分にはちょうどいい渾名なのでありがたく使わせて貰おう。

またアルビオン戦の功績として、孤児院の土地を正式に自分名義として貰った。

コレは嬉しい。

マチルダにも後で教えよう。

ただ、たまに人形を献上する様に言われたのだが、それはヨシとす

るべきだろ。

城を出た後、ワルドにルイズの護衛を頼みオレとマチルダはテファや孤児を迎えに行った。

テファ達は宿や町で楽しく過ごしてたみたいです。

そして孤児院が正式に自分達のモノと言うと大喜び。

持って来た馬車に馬を借りて取り付け、孤児院まで出発。

その日の内に着き、テファ達は新しい生活に入った。

孤児院に皆を迎え入れた後、オスマンに孤児院の土地を正式に譲渡された事を報告。

テファの事は孤児の一人としているので、まだシラネみたい。

あのスケベジジイには出来る限り知られたくないです。

アレ見たらセクハラするでしょうからね。

さて部屋に帰ってボケーツとしてたが、今後の事だ。

あまり大っぴらに金を錬金するのは凄いまズイ。

だが金が必要。特にテファ達孤児を養うためにもね。

なので、せっかく姫から人形の錬金術師と言う二つ名を貰ったのだ。利用するべきだ。

こうして、オレのこの世界でのオタク人生が再スタートした。

もう趣味全開でフュギア作るもんね。

R18スレスレでも構わないだろ。

購買層は絶対に居るし・・・。

人形の錬金術師（後書き）

主人公タロウのオタク人生再スタートです。

新装開店（前書き）

表はオモチャ屋さん。

そして裏は大きなお友達の店が出来ました。

新装開店

孤児院を開設してから一ヶ月程経ちました。
その間、マチルダは魔法学園を退職。

孤児院の院長となりました。

>正式にトリステイン孤児院となり、国からも給与出ます。

オレは孤児院の運営&教師&ルイズの指南役&フュギア製作と寝る暇も無い忙しさ。

でも幸せ。

何と言っても自分の思うままに作れる。

他人にアレ駄目とか、コレは作るなと言う論理委員会も居ません。

孤児院の一環として、オモチャ屋さんも開業しました。
表は子供向けのオモチャばかり。

店の名前はAKB31です。>アキバサティーワン。

売り物はもちろんオレが作った現代のオモチャモドキです。
店番は子供達とテファです。

何せ王女様が命名した、国の御用立の看板は伊達ではありません。
たまにイチャモン付ける貴族とか街のヤクザも来ますが、マチルダが追い返し、
貴族は看板見てビビッて帰ります。

姫様も良くお忍びで店に買い物に来られるのですよ。
エエ。

姫様が店番してるテファが羨ましいそうです。

で、表があれば裏もあるのが当然。

コチラはR18の大きいお友達専用のお店。

店の名前はエンジェルアイランド。

一見さんお断りの会員専用のお店です。

それでも繁盛するのですから、皆様、余程、飢えてるのですね。

コチラは主にマチルダに店番して貰っています。

下手なメイジなら叩き潰せる彼女なら安心して任せられます。

オラですか？

作るのに忙しくて店番なんか出来ません。

何せ在庫がすぐに無くなるのです。

何時寝たらいいのでしょうか？

あまりに忙しいので、ギーシュとモンモンをバイトに使い始めました。

彼等も生活が苦しいらしく、喜んでバイトしてます。

モチロン、R18は機密ですので、お子様向けのみですよ。

ギーシュが本体を整形。モンモンに色塗り。仕上げチェックは自分です。

マチルダも死ぬ程忙しいと言いますが、
フーケしてた時と違い、楽しい忙しさだよ。と言ってくれます。
お縄の心配は要らないしね。

そう言えば先日、モットとか言う貴族がいきなり来て、
ワシに店の権利を寄越せとか騒いだので、
王女の認可状を目の前に叩き付け、ご丁寧にお帰り願いました。

ルイズですが、虚無を意識出来てからはコモンマジックは完璧になり、

フライとかも出来る様になりました。

虚無魔法は読めるらしいけど、あまりにも危険なのが多いので、
絶対に詠唱するな！と厳命してます。

アリ??何か忘れてるよな・・・?
何だったっけ???

モンモンがブツブツ言ってたので、何でブツブツ言ってるの?
と聞いたら実家の干拓事業がコケて、オマケにラグドリアン湖がど
んどん水嵩が上がり、
周囲の村が水没。大騒ぎになってるとか・・・。

ヤベー！。忘れてた。

急遽、モンモン、マチルダ、ギーシュの四人でラグドリアン湖に向かいました。

モンモンが水の精霊の盟約の一人だしね。

湖に着くと、凄い事になってます。

村がかなり水没してしまい、村人が困りきって呆然としてるのです。貴族の自分達を見かけると、何とかしてえええ、と泣き着かれました

「モンモン、すまんが精霊様を呼び出して欲しい。大切な話があるからと・。」

「分かってますわよ。ミスタ タロウ様。しかしこの水嵩、どうしたらいいの？（泣）」

「ま、何とか出来ると思うから、精霊様を呼び出して。お願い。」

「ハイハイ。」

モンモランシが、自分の使い魔のカエル、ロビンに自分の血を一滴垂らし、使い魔に命令した。

「いいこと、ロビン。貴方達の古いお友達と連絡が取りたいの。これで相手はわたしの事が分かるわ。」

覚えていれば・・・だけど。じゃあロビン、お願いね。

旧き水の精霊を見つけて、盟約の持ち主の一人が話をしたいと告げてちょうだい。

分かったわね。」

カエルはぴよこんと頷いた。

それからぴよんと跳ねて、水の中に消えて行く。

「今、ロビンが水の精霊を呼びに行つたわ。

見つかったら連れて来てくれるでしょう。」

待つ事しばし・・・。

水面から何やらモゴモゴと盛り上がり、やがて何かを模ろうとしてた。

湖からモンモランシーの使い魔のカエルが上がって来て

ぴよんぴよん跳ねながら主人の元に帰って来た。

モンモランシーはしゃがんで手をかざし、カエルを迎えた。

指でカエルの頭を撫でる。

「ありがとう、キチンと連れて来てくれたのね。」

モンモランシーは立ち上がると、水の精霊に向けて両手を広げ、口を開いた。

「わたしはモンモランシー・マルガリータ・ラ・フェール・ド・モンモランシー。

水の使い手で旧き盟約の一員の家系よ。

カエルに付けた血に覚えはありますかしら？
覚えていたら、わたし達に分かるやり方と言葉で返事してちょうだい。」

水の精霊らしき水の盛り上がりは・・
ぐねぐねと粘土がこね上がる様にして形を取り始めた。

水の塊はやがてモンモランシーそっくりの形になってにつこりと微笑んだ。

それから再び無表情になって、水の精霊はモンモランシーの問いに答えた。

「覚えてる、単なる者よ。貴様の身体に流れる液体を、我は覚えている。」

貴様に最後に会ってから、月が五十二回交差した。」

「良かった、水の精霊様。今日は貴女にお話があつて参りました。」

「後は自分で話す。ありがとう、モンモランシー嬢。
始めまして。水の精霊様。わたしはタロウ・ヤマダと言います。
今回は水の精霊様にお願いとお届けモノがあつて参りました。」

「願いとは何だ？単なるものよ。そして届け物とは？」

「お願いとは、水嵩を上げるのを止めて欲しいのです。
周囲の国や村が迷惑しています。」

「断る、単なる者よ。我は忙しいのだ。」

「何故でしょうか？水の精霊様。」

「数える程もおろかしい程、月が交差する時の間、我が守りし秘宝をお前達の同胞が盗んだからだ。」

「秘宝？」

「そうだ、我が暮らすもつとも濃き水の底から、その秘宝が盗まれたのは、月が三十回程交差する前の晩の事。」

「じゃあ貴女は人間に復讐するために、水かさを増やして村々を飲み込んでしまったの？」

「復讐？我はその様な目的は持たない。ただ、秘宝を取り返したいと願うだけ。」

ゆつくりと水が浸食すれば、いずれは秘宝に届くだろう。

水がすべてを覆い尽くすその晩には、我が身体が秘宝の在り処を知るだろう。」

「気が長いですね。」

「我とお前達では時に対する概念が違う。我にとっては全は個。個は全。時もまた然り。」

今も未来も過去も、我に違いはない。いずれも我が存在する時間ゆえ。」

「水の精霊様の秘宝を盗んだ人間の名前は覚えていらっしやいますか？」

「確か個体の一人が、こう呼ばれていた。「クロムウエル」と。」

「そのモノはアルビオンにてアルビオン王家の手により滅ぼされました。」

そしてその秘宝の名前は？」

「我の秘宝は「アンドバリの指輪」と言う。」

「それは「コレ」でしょうか？」

「おおお、まさにソレじゃ。数える程もおろかしい程、月が交差する時の間、我が守りし秘宝、アンドバリの指輪じゃ。」

「では水の精霊様、これをお返ししたら水嵩を上げるのを止めて頂けますか？」

「ウム。我は人間を滅ぼすつもりは無い。ただ、単に我が秘宝を手に取り戻したかっただけじゃ。」

「ではお返しします。それと、一つお願いがあります。」

「出来る事なら聞いてやろう。単なる者。」

「ここに居るモンモランシー・マルガリータ・ラ・フェール・ド・モンモランシーを再び、

旧き盟約の一員として認めて欲しいのです。

彼女の父上が貴女様に無礼を働いてお怒りになつてゐる事は存じています。

ですので、彼女の父は再び貴女にお願いする事は出来ませんが、彼女には非はありません。

どうか、新しい盟約の一員として認めて欲しいのです。」

「フム。単なる者の願いは聞いてあげたいが。どうしたモノかの？」

「水の精霊様、どうか私の父のご無礼を許してくださいとは申しません。」

ですが、どうか私を盟約の一員として認めて頂きたいのです。」

「分かった。我が秘宝を取り戻して返してくれた単なる者の願いを聞いてあげよう。」

今後二度とあの様な無礼を働いたら・・・分かってるな？新しき盟約の一員よ。」

「モ・モチロンです。水の精霊様・・・」

こうして何とか水の精霊の増水騒ぎは収まった。

そう言えばタバサとキュルケが襲うのはもう少し先だったよな？
またイベント潰したかも・・・。

新装開店（後書き）

水の精霊に指輪を返しました。
またイベント潰したかも・・。

（^
|
^
）

コルヴェールとタロウ（前書き）

コルヴェールの愉快なへび君破壊阻止作戦です。

コルヴェールとタロウ

タロウです。毎日、自転車操業の日々です。

と言いましても借金で首が回らないのではなく、品物の生産が需要に追いつかないのです。

店を増やせと言われていますが、供給が不可能なので断り続けます。

欲しければ買いに来いの殿様商売ですよ。

店はテファと子供達でオモチャ屋AKB31は十分繁盛してる。在庫が足りなくなるので、土日は休業にする程。

モチロン土日はオレ達は必死に在庫貯めの日々。納入する時は護衛にワルドを頼んでいる。

一度、強奪されかけた事件もあったのだ。

それもR18のが。

それを聞いたワルド、真っ青になり、

「先生の商品を他人に奪わせる事は許せません。」と護衛を申し出たのだ。

ワルドにとって、エンジェルアイランドは王宮よりも大切な場所らしい。

エンジェルアイランドは口コミでハルケギニア全土に広まったらしい。

あそこの人形は男のロマンを適える夢の店だ！と。

そりゃ現代でも世界の最先端を走る日本のオタクですよ。
中世期のハルケギニアでは、夢想も出来ないレベルなのは自負があります。

さつて、話変わって。

モンモンの一家から感謝されてしまった。

干拓事業の失敗＆水の精霊を怒らせた事件で、すっかり国の信用を失ってたのに、

間を取り持ってもらえ、モンモンが盟約の一員となりたからだ。

ギーシュはオレの店の裏方要員として頑張って鍊金してたせいか、ドットからラインに上がったらしい。

日々の努力が実ったのね。ギーシュ君。

モンモンは相変わらずビンボなので、学校が終わると毎日オレの部屋に来て、

ギーシュが鍊金したオモチヤに色塗り。

コレは女性が一番と思います。

やはり根気良く塗り分ける技術は女性ですよ。

特に量産する場合は。

現代日本の工場でも手先仕事は女性の独断場ですね。

在庫も落ち着いたので、今日は同僚のコルヴェール氏の授業見学して来ます。

多分、愉快なへびくんだろうとは思いますが、

この時代でアレを考えるのは凄いと思いますよ。

自分は未来世界から来たから想像も出来る。

だけど、コルヴェール氏は自分の頭脳だけで、アレを思いついた。ココが凄いです。

ですので、絶対に見逃せません。

破壊もさせません。＞原作ではルイズが破壊しましたね。

ヒントを与えてピストンエンジンを作って貰いましょう。

何時までもマチルダの後ろで馬に乗るのはイヤです。（T―T）
車がこの世界に流れ着いていないかな・・・。

ミスタ・コルヴェールの授業が始まった。

コルヴェールは嬉しそうに奇妙な物体を机の上にデンと置いた。

「それは何ですか？ミスタ・コルヴェール。」
と生徒が聞くと。

コルヴェールは勿体ぶった咳払いをすると、語り始めた。

「えー、「火」系統の特徴を誰か私に開帳してくれないかね？」

そう言うつと視線は一斉にキュルケに集まる。

キュルケは爪を手入れを止めて気だるげに答えた。

「情熱と破壊が火の本領ですわ。」

コルヴェールも「そうとも。」と答えた。

「しかし、

情熱はともかく火が司るものが破壊だけでは寂しいとこのコルヴェールは考えます。

諸君、火は使いようですぞ。使いようによっては色んな楽しい事が出来るのです。

破壊するだけではない。戦いだけが火の見せ場ではない。」

「トリステインの貴族に火の講釈を承る道理がございませんわ。」

キウルケは自信たっぷりに言い放つ。

コルヴェールはキウルケの嫌味にも動じず、ニコニコとしてる。

「でも、その妙なカラクリは何ですか？」

キウルケは机の上の装置を指差す・・・。

「うふふ・・・。よんぞ聞いてくれました♪これは私が発明した装置ですぞ。」

油と火と魔法を使って動力を得る装置です。」

オレはこのシーンが見たかったのだ。まさにエンジンの卵とも言える装置。

見た目は華奢なオモチャだが、ゼロから作り上げた最先端技術だ。理解出来てるのは、オレとコルヴェールだけだろう。

「まずふいごで油を気化させると、次にこの円筒の中に気化した油が放り込まれるのですぞ。」

慎重な顔でコルヴェールは円筒の横に開いた小さな穴に杖の先端を放り込む。

呪文を唱えると断続的な発火音が聞こえ、気化した油に引火。爆発音が聞こえる。

「ほら、見てごらんなさい。」

この金属の円筒の中では気化した油が爆発する力でピストンが上下してる。」

スゲーー。やっぱりこの人は天才だ。プラグと発火装置。そしてキャブレターが作れたら完璧なエンジンだぞ。

オレはこのままの流れではルイズにこの貴重な装置が破壊されると思う、

コルヴェールに要点を質問した。

「ミスタ・コルヴェール。

素晴らしい発明です。自分の住んでたロバアルカイリエでは、この装置を

大型化した「エンジン」と言う機械を馬の代わりに馬車に積み、馬の無い馬車を走らせています。」

是非、改良を続け実用的なエンジンに育ててください。」

「ミスタ・タロウ。

貴方の国ではコレを積んだ馬車が馬を使わずに走っているのですか？」

「その通りです。

ミスタ・コルヴェールは点火装置に魔法を代用していますが、私達の国では、クランクに発火制御装置を組み込み、上死点で発火する様に制御してます。

またふいこの代わりは「キャブレター」と言う気化装置を取り付け人間の手は要らない様に出来ます。

点火にはプラグと言う小さな火花を飛ばす装置をシリンダーの上に設置。

定期的に交換しています。

また排気ガスは気化装置の反対側より、鉄の筒を通じて排気。

エンジンは熱を持つと膨張しますので、
熱を冷ますために空気か水で冷やします。

水で冷やすのはかなりの技術が要りますので、
当初はシリンドーに風を当てるフィンを付けると、
かなり冷却が見込まれますよ。

最後に、エンジンを潤滑させるための燃えない油、
オイルと言うのを別に気化した油と一緒に少しづつ流すと
焼きつきもなくなります。いかがでしょう？ミスタ・コルヴェール。
以上が貴殿の装置を見て、自分が感じた改良点です。見本も無く、
ソレを作り上げた貴殿は天才ですよ。」

オレの説明を聞いてたコルヴェールはしばし固まっていたが、段々と
紅潮し、
喜びの顔で、オレに言った。

「ミスタ・タロウ。ありがとう。本当にありがとう。

自分の頭で考えてた装置が他の国では実用化され、

しかも馬車に積まれてると聞いて私は感動した。

そして、この装置の未熟な点と改良点を指摘してくれて助かりまし
た。

是非、馬の無い馬車を作り上げて見ます。ミスタ・タロウ。ありが
とう。」

「コルヴェールさん、頑張ってください。相談出来る事は何でも聞
いてください。」

生徒はオレとコルヴェールの討論を聞いてて、アツケに取られてた。
馬のいない馬車なんて想像も出来ないのだから仕方ない。

生徒の大半は理解は出来なかったが、凄い装置のルーツになる事は
分かったみたいだ。

コルヴェールの愉快なへび君はこうして破壊を免れたのだ。
良かった良かった♪

コルヴェールとタロウ（後書き）

コルヴェールに愉快なヘビ君の改良点を指摘しました。

原理は2STエンジンです。

さすがに4STはカムとか色々と面倒です。まだムリです。

でも見逃せない話なので乱入しました。

車を作れないかな？

零戦GETTだぜ♪（前書き）

零戦をGETTします。

零戦GETTだぜ♪

コルヴェールとタロウの討論で、コルヴェールの授業は終わった。やはり熱い討論は楽しい。特に技術とか趣味に突っ込んだ討論は最高♪

コルヴェールには、自動車の簡単な設計図を書いて渡した。走る、止まる、曲がる。

この三つが基本。特に止まると曲がるは重要だもんね。

ゼロから作れるコルヴェールだ。これだけヒントがあれば、一年もせずにハルレギニアに車が誕生するかも知れない。

今の時期って原作ではどの辺りだろ??

Wikiで検索して見ると、シエスタのフロ乱入&零戦と宝探検の頃か・・・。

ルイズとは同居していないので、恋愛感情は完璧にゼロ。

やはり男女の愛って同居とか同じクラスに入ると高まるのね。ま、いいけど。

テファ達、孤児の運営するAKB31は過疎地に存在するにも関わらず、

ハルレギニアの子供に大人気だ。

男の子は超合金ゴーレム、そして変身お面。

女の子は着せ替え人形。

出来る限り価格は抑えてあるので、少し裕福な子息なら購入可能だ。

貧しい子供には、東京の下町で流行った型抜きとかクジ引きで当てられる様にした。

これなら最低の金額でも、買えるからね。

ワルドは魔法衛士隊を辞めてしまった。

正式にエンジェルアイランドの護衛兼、アドバイザーとなったのだ。ヤツは風の偏在を使えるから、色々と役立つ。

新しいフュギアを作って見せると狂気してしまう。

もう魔法衛士隊には未練も無いとか・・・。

何とか所帯持てる程度の給与は保障するから、早く所帯持てと言いたい。

お風呂イベントですが、やはりありました。

ですが、一緒にドボンではありませんよ。

シエスタがフロ貸して」と頼んで来ただけです。

メイドのお風呂はサウナみたいなモノらしいので、身体を拭くだけのフロだとか。

オレの作ったフロみたいにドボンは無いので、入りたかったらしい。原作でも、多分フロに入りたかったただけなのだろうね。

所詮田舎のウブな子です。

でも、色々と生活方面では万能なシエスタ。

何とか味方に引き入れたいです。

で、考えたのが、自分専用のメイドとして雇う事。

いえ、実際、かなり忙しくて自分の身の回りの事が全然出来ません。製作に没頭すると、ゴミも埃も高く積もる事もしばし。

オスマンに談判して、シエスタを引き抜きました。

シエスタも仕事が終わったら一番フロに入れると大喜びです。

コッチも助かります。」

もちろんマチルダとテファの了解は得ましたよ。

あの二人を無視したら血を見ます。

テファも普段はポワポワした子なのですが、一旦スイッチが入ると容赦ナシです。

マチルダに至ってはね。イエス・マムですよ。

そんなある日の事・・・。

キュルケが古い地図を持って遊びに来たのです。

「ねえん、ダーリン。宝探しに行きたいの。良かつたら引率してくれない？」だよ。

ま、一応教師だし、課外授業の一環として一部の生徒の引率はアリだろ。

オスマンに聞き、同意を得てから

オレ、キュルケ、ギーシュ、モンモン、シエスタ、タバサの六人で馬車で旅立った。

ルイズは始祖の祈祷書で姫の結婚式の式辞を考えるのに忙しく断念。潰れるイベント・・・だよな？

流れに任せるか。

宝探しは大半はガセネタでしたよ。

居るのはオーク鬼ばかり。

オレが大穴掘って落とし、キュルケとタバサがトドメを挿し、ギーシュが埋める役目。

ラ・ローシエル以来の流れ作業みたいな戦闘です。そうして少しの金貨を得て、流れる事数日。

遂に来ました。自分の目的地の一つ。

タルブ村。

シエスタの故郷でもあります。

竜の羽衣こと、零戦は恭しく村の外れの神社モドキに鎮座していました。

はあ、美しい・・・。

特に戦時中の空気そのままの実戦機。

増加タンクも落していません。

これは錬金で作っておかないと実戦では落としてしまいます。

シエスタに佐々木翁の墓を案内して貰い、墓の記名を読むと、何故読めるの？と聞かれました。

シエスタのお爺さんと自分の国は同じ。

佐々木翁の言った陛下は、天皇陛下様と言う方ですというと、ビツクリしてた。

やはり生前、佐々木武雄は天皇陛下様にコレを返して欲しいと遺言してたとか。

この日のためにガソリンの錬金も練習してたのです。

僅かに残ってたガソリンを元に有鉛ガソリンを樽で四つ錬金。

全部入れて、計器や方向舵、ラダー等の操縦系統、ブレーキの点検をする。

イナーシャースターターが無いので、タバサに前方から風を出してもらいプロペラを回す。

回転が高まったトコで、コンタクト！

栄21型エンジンは数十年ぶりに彷徨を上げた。

ウヒョー最高♪

タキシングして、ブレーキが咬まないかチェック。

滑走前にデコボコは無いか調べて貰い、滑走開始。

エンジンの音、轟々と零戦は飛ぶ、タルブの上」
翼に輝く日の丸と」

この飛行機って色んな文献で、一番操縦が楽だと書いてありますが、本当ですよ。

とにかく見張りがし易い。離着陸が楽。急降下以外は苦手な事が無いのです。

シエスタも後ろに乗せてあげました。

「御爺様の言ってた話は本当だったのですね？」

そう、佐々木武雄は何らかの変異でこの世界に流されたのだろう。生きてたら色々聞けただろうが、今となってはね。

無事着陸し、シエスタの家族に代金として1000エキュー程を支払った。

タダで貰う程、自分は悪辣ではありません。

オレは魔法学園まで飛ぶので、シエスタは二週間程度の休暇を与える。

タバサ達はタバサの使い魔でオレを追いかけるそう。

馬車はシエスタが帰る時のアシにしてみらおう。

しかしこの時代なら戦艦以外は無敵じゃネ？零戦は。

巡航速度でもタバサのシルフィードの全力疾走にも余裕です。

全速出すと、確か560キロは出るもんね。スゲ。

その日の昼過ぎには魔法学園郊外の孤児院横に無事着陸。

コルヴェールが大慌てで見に来たのはお約束です。

説明し、エンジンをかけて見せると大喜びしてます。

そして、このタイヤとブレーキは開発する車に是非コピーして欲しいとお願いました。

こうして零戦は無事、GETT出来たけど・・・。

タルブ村の戦いはあるの??

レコンキスタ潰してしまったのだが・・・。

零戦GETTだぜ♪（後書き）

次回、タルブ上空に戦火は上がるのか？
はたまた平和なのか。
しばし御待ちを。

タルブに咲く愛♪（前書き）

シエスタフラグが立ちました。

やはり釣り効果が出ますね。戦場は。

タルブに咲く愛♪

零戦をGETTしたタロウです。

いや、ルイズには感謝しています。

何せガンダのルーンが無かったら離陸はともかく、着陸するのは不可能でしたからね。

飛行機飛ばす時、一番難しいのが着陸です。

ググッて見てください。事故の大半は絶対に着陸失敗です。

アメリカ海軍の戦時中の損失の大半が着艦失敗ですよ。

だからガンダルーンには助けられています。

コルウェール氏も一度後ろに乗せて上げました。

さすがに鍛えた戦士。

下呂する事は無かったです。

ダメな人は水平飛行だけでも酔いますから。

でも喜んで飛び回ってたら、テファとマチルダに怒られました。

人形の在庫が無くなったとかで・・・。

すみません。数日、完徹してでも作りますから。許して。(; _ ;)

そして、お姫様の結婚式ですが、流れたみたいです。

理由、あの姫^{アホ}、自分で暴露しやがった。

結婚したくねー。

自分はアルビオンの王子が好きいいとね。

人の地獄の苦勞は何だったの??

コンチクショー。

ルイズは喜んでいます。
詔を考えなくても良くなったから。

でもこうなると、今後の予想が出来ません。
アルビオンは平和になったから、七万の突入はナシ。
ウェールズは死なせたくなかったから仕方ないですけどね。
原作でも一番死んだら迷惑な方でした。

次いでヤヴァいのが、ロマリアとガリア。
最後が聖地か・・・。

水の精霊騒ぎは既に収まっているから、問題ナシ。

ガリアのヤンデレとキチガイさんですね。
一番怖い方は。

次いでエルフのビターシャル。
でも居るのか？ビターシャル・・・。

もう脱線しまくりで、原作ルートからかなり外れてると思うのだ。
やはりゼ口魔はサイトが基本なのね。
サイト以外だと、別物の話となるみたいだ。
現在はさながら、オタクの使い魔か。(；|；)

悩むのヤメヤメ。

もう悩んでも違う話になってるのだ。
オレも痩せたし、魔法使いの資格も無くした。
楽しく生きよう。

それが一番だーいっ

ですが、やはり運命の輪廻には適わなかったみたいです。
タルブがガリアの両用艦隊から襲われたとか。
何故かは分かりません。

ですが、予想は出来ます。あのキチガイ王が狂ったのでしょ。
兄弟ケンカで世界を滅ぼすなよ。ホンマに迷惑な人。

だが、シエスタがヤヴァイ。出撃だ！

零戦に増加タンクを装備。

機銃弾は満タンにした。

ついでに予備としてルイズも搭載♪>必殺技装備。
タルブ上空へ出陣ダー！。

「ルイズ。タルブに着くまではリラックスしとけよ。
それと気分悪くなったら、この袋に戻せ。
間違っても機体の中で戻すな。匂うから。」

「分かったわよ。ガリアの艦隊が見えたら
エクスプロージョン
爆発をブツ放せばいいのね。」

「打つ時は指示するから。それまでは呪文を覚えておけ。
タルブが落ちたら次は首都に来るから、絶対に潰すぞ。」

「分かったわよ。任せておいて。」

ルイズに細かく指示し、出番が来るまではシートに座って楽にして
ると指示する。
多分酔っだらうな。

タルブは地獄だった。シエスタは無事か？心配だが、今は目の前の

敵。

ガンダールヴのルーンの効果が、敵の進路とかヤバイ兆候を教えてください。

有難いな。これって天然のレーダーだぞ？

デルフは万が一不時着した時の予備兵器として持って来た。

「ルイズ、適当に飛竜を潰したら敵艦隊上空に出る。打てつと言ったらブツ放せ。

遠慮はイラネーど。」

「分かったわよ。任せなさい。ガリアなんて潰してあげるわ。」

ミヨズのヤンデレはいねーだろうね？

正直、あの姉さん、苦手なタイプですよ。

ウチのマチルダと似た雰囲気あるのか、出会ったら逆らえない気がします。

零戦は蝶の様に舞い、蜂の様に挿す。

その連続で、飛竜軍団の半数は減らせた。

だが、そろそろヤヴァイ。

潰すなら今だね。

「ルイズ、そろそろ潰すぞ。大丈夫か？」

「少し、き、モチ悪いけど。我慢する・・・。」

「が、ガンバレ。勝ったらクックベリーバイを腹一杯奢るぞ。」

「た、食べ物の話は後。戻すかも・・・。」

「ゴメンナサイ。戻す前に潰してちょっ。」

「うん・・・。」

そしてルイズは久しぶりに爆発のルーンを詠唱。

ガリア艦隊の大半は撃破出来た。

あの破壊力は怖いわ。

個人で持てる核爆弾ですよ。

もうくくぢゅどー！ー！>>でした。

王軍が着いたのは、残されたガリア惨敗軍が撤退した頃です。

俺達はルイズが気分悪いので、とっとと着陸。

ルイズは空き地の片隅で、エロエロです。ご苦労様。

シエスタは無事だったみたい。

零戦見つけたら・・・。

抱きつかれ、キスされましたよ。どうしよう・・・。

ヘタレなオレには二股なんてムリなのに。

そしたら、シエスタ。

「別にわたしがタロウ様を勝手に好きになっただけです。問題ありません。」ですと。

マヂで女は怖い。

だけど、現在の生活には彼女の補助は必須なのよ。困った。

マチルダに何て言いましょう。(・:・)
(・:・)

タルブに咲く愛♪（後書き）

タルブを攻めたのがガリアです。

ヤンデレはまだ来てません。

そしてシエスタに押し倒されました。

どうなるのでしょうか？

狂人との会談（前書き）

ジョセフ救済編です。
ついでにタバサも。

狂人との会談

タロウです。

ルイズは姫と会談があるのと、飛行機はもうヤ！！との事で、自分はシエスタを連れて零戦で帰りました。

で、現在、絶賛DO・GE・ZAしてます。

目の前にはテファとマチルダ。

後ろにはシエスタ。

何でもここまで苛められるの？何も自分からはしていません。
いや、ホンマに。

「タロウ、アンタ、わたしに言い訳は無いの？」

「お兄様、お姉さんを裏切るのですか？」

「大丈夫ですよ。タロウ様。わたしが悪魔達から貴方を守ります。
安心して♪」

女三人揃えば姦しいといいますが、恐ろしいの間違いですね。
これならデルフを構えて七万に突っ込んだ方が気楽かも知れません。

でも、どう言い訳しようとチューしたのは事実。

オレって戦いを終えたばかりの戦士だよね。

どうしたらいいの???

簡単にその後を説明します。

マチルダ、シエスタ、そしてテファの三人でオレを共有すると言う事らしいです。

何故テファまで？と思いました。他のヤローは絶対にイヤ。ならオレを皆で共有所有物とする事で決着♪

モノ扱いです。(T|T)

もういたたまれないので、話が付いた瞬間、自分の部屋に帰り爆睡しました。

起きたら横に三人の寝顔が・・・。

はぁ。胃が痛くなりました。

ハーレムが羨ましいとか言う方。嬉しいのは当初だけです。

一人だけなら贖身も何もありません。

それが三人居たら公平に扱わないと大変な事になります。

毎日が地雷だらけの道です。

だから皆、二次元世界のフュギアに逃げるのかな？

彼女達は怒らず、何時もニコニコして癒してくれます。

テファも二次元世界の彼女は優しくったよね・・・。

あまりにも苦しいので、しばらく徹夜続けてガンガン鍊金を続けました。

店に卸すフュギアを数か月分はストック出来たかも・・・。

フュギア作ってる時は、何も考えず没頭出来ましたからね。

はぁぁ・・・癒される・・・。

そんなこんなしてたらルイズも帰還しました。

タルブの戦いは、公式にはトリスティン空軍が勝った事になりました。

ルイズの功績は公には出来ないもんね。

そしてガリアに抗議しましたが、

王は「ワシヤ知らない。軍が暴走したのдар？勝手に処分しろ。」ですと。

いくらキチガイ王とは言え、軍が勝手に暴走できる訳が無いだろ？
タバサは帰国してなかったので、伝手を頼って貰いジョセフの近況を調べて貰いました。

えつと、何でもアルビオンの戦線で自分の使い魔が消えたとか・・。

エ~~~~~！

あの時、ヤンデレ姉さん居たの？

そしてルイズに消されてしまったの？？

色々と頼りになってたヤンデレ姉さんが居なくなり、諫める人も居ないジョセフ。

完全に発狂しているのか？

こうなると、予想が出来ない。

参った。

そうしてたら、久しぶりに来てくれましたよ。ネ申様が。

<参ってる様じゃの？タロウ。>

「ベタ参りです。まさかヤンデレが逝ってたとは。」

<アレが生きてたらジョセフも暴走しなかったらうにの。>

「その通りです。良くも悪くもミヨズ姉さんはジョセフの安全装置でしたから。」

<ちなみにこのままだと、火石の暴走もありうるぞ。>

「ゲツ、あの小さな核爆弾でつか？ヤバイ所ではありませんぜ。」

<この件はワシラは関われないぞ。人間の領域じゃしの。
じゃがアドバイス程度はしてやる。聞きたい事はあるか？>

「沢山あり過ぎです。ですが、ジョセフを抑える方法が先決です。」

<フム。原作は覚えてるよな？>

「モチロンです。原作十五巻でジョセフ改心、戦死でしたから。」

<介入は出来ないが、もう一つだけお前にプレゼントをやるう。風のスクウエアじゃ。

これで偏在が使えると思う。そして偏在をジョセフに派遣し、ヤツにリコードを唱えるのじゃ。

ヤツの狂気は弟、シャルルを暗殺してから始まっておる。

弟の葛藤を教え、何とか暴走を止める。原作より早いが、そうも言うっておれん。>

「ありがとうございます。神様。リコードの呪文だけは教えて下さいますよね？」

<ウム。それも当然じゃ。他の虚無はムリじゃが、リコードのみ、

お前に伝授しよう。

ジヨセフの暴走を止めるのじゃ。

そうしたら地球世界では作れないR18のフュギアを何時までもこの世界で作れるじゃろ♪>

「ライ。駄神様。ソッチがメインかよ?」

そう言うとネ申様は口笛を吹きながらバイバイキーンしやがった。絶対にコッチから逃がす気は無いな?

ヤツは。

ま、嫁が三人も居るし、逃げれるとは思いません。骨を埋めましょう。

オレは風魔法を取得。

強力な偏在を一人作り上げた。

タロウ（仮）の偏在にジヨセフに会い、土のルビーにリコードを掛ける様に頼む。

任務完了後は消えてもらうのだ。

ジヨセフは狂ってた。

使い魔のシェフィールドがアルビオンの戦いで帰って来なかった日から。

元々狂ってたが、シェフィールドが居る間は色々と心も収まってた。

「フム。トリスティンの虚無は完全に目覚めたの。次は火石でも使うか。」

両用艦隊も大分潰した。のう、おれのミューズよ・・・。」

誰も居ない王の執務室でジョセフは居なくなった使い魔に話しかけてた。

そこへ・・・。

「ガリアの王、ジョセフ殿ですか？」

「ムッ、誰だ。」

「トリステインからの使者です。名はタロウと申します。」

「そうか。タロウと言うか。お前はおれに何の用だ？」

クビなら何時でもくれてやっても良いが、もう少し待て。」

「王の首なと要りません。それよりもジョセフ殿はシャルル様の真実を知りたくは無いですか？」

「作り物の話などには興味は無い。おれの心は枯れ果てている。」

「その枯れた心を潤す魔法があるのですが。」

「フム。興味はあるの。ヨイ、おれに見せて見る。枯れた心を潤す魔法を。」

「では、貴方の持つ土のルビーに虚無魔法、リコードを掛けます。リコード。」

オレが神から習ったリコードをジョセフの持つ土のルビーにかけると・・・。

指に光る土色の指輪からジョセフの心に記憶が流れこんできた。

そこには、シャルルがジョセフとの王権争いに敗れ、泣き喚くシーンが。

現実では、ジョセフに兄さん、おめでとうと言った弟が実は、嫉妬に狂い泣き喚いてた。

そしてお互いに歩み寄り、ジョセフはシャルルに謝り、シャルルは欲深い自分に嫌悪し、

お互いの心を癒してた。

やがてリコードの魔法は解けたが。。

「シャルル。俺達は世界で一番愚かな兄弟じゃな・・・。」

そして自分が泣いてる事に初めて気づき。

「何だ、オレは泣いてるじゃないか。あれ程疎ましく思ってた神の力が出口を見つけるとは、

あっけなく、なんとも皮肉なものだ。」

「ジョセフ殿、涙の重さはいかがだったでしょう?。」

「重いな。涙を流す事がココまで重いとは。おれの罪は消えぬが、この国はまだ続く。」

「そうです。ガリアもトリステインもまだまだ生き続ける国です。ジョセフ殿も生きて、シャルル様の居た国を繁栄させる使命があります。」

「ウム。理解したぞ。タロウ殿。

お前のおかげでおれの心の闇は消えた。今後はガリアの王として、

この国を繁栄させよう。

そしてそなたの国、トリステインには公式に謝罪し、賠償も支払おう。

おれの暴走であつた事も認める。良いか？タロウ。」

「ありがとうございます。では一つだけ褒美を頂けませんか？」

「ウム。当然じゃ。ではどう言う褒美を望むのだ？」

「シャルル公爵の遺児、シャルロット様の母上に掛けた魔法の解除。そしてシャルル一族の復権です。」

「ムツ。そうであつたな。シャルルの妻におれはエルフの毒を投与してしまった。

アレはそれ以来狂つたままだ。コレではおれがあのだ世でシャルルに殴り殺される。

分かつた。早急に解除の薬を作らせ投与させよう。シャルル一族の復権は明日にでも公布する。

王、ジョセフとして公式に発しよう。」

「ありがとうございます。それではお時間も遅くなりましたので、私はそろそろ・・・。」

「ムツ。待て。お前に会う場合はどこに居るのだ？」

「いつもはトリステイン魔法学園で教師しています。学校外に人形販売の店を持っています。是非一度来てください。」

「了解した。トリステインに謝罪に行く際でも寄ろう。今日は色々

と助かった。

また会おう。タロウ。」

「ありがとうございます。ジョセフ様。」

こうしてジョセフの暴走は止められた。

もうギリギリだったな。

まさかヤンデレが逝く事でこうなるとは。

そしてタバサには、シャルル一族の復権と母上の解除薬をジョセフが作る事を伝えた。

あっけに取られてたが、数日後、ガリアからの使者により事実と分かるかと泣いてオレに礼を言った。

タバサは一時帰国。

実家で母親との逢瀬を楽しんでいるらしい。

デコ姫とも昔みたいな付き合いが始まったとか。

良かったね・・・。

狂人との会談（後書き）

タバサ&ジョセフ救済です。

遂にハーレムとなりましたが、主人公はヘタレです。
もっぱら女性軍団のオモチャとなっています。

熱闘、往き遅れVSキモ男（前書き）

エレオノールとのバトルです。

熱闘、往き遅れVSキモ男

ガリアとの戦いが終わり、トリステインは再び平和になった。

人間平和になると欲が出るのか、エロが出るのか・・・

エンジェルアイランドがまた評判となったのだ。

原因はジョセフ。

終戦会議でトリステインに来て、帰りにオレに会いに来てくれたのだが。

やはりツボに来たらしい。R18のフュギアが・・・

「むう。けしからん、けしからんぞ。

何でこんな素晴らしい人形をおれは知らなかったのだ。

戦争なぞして遊んでる暇は無い。素晴らしいぞ。コレは・・・」

えーっ、分からない人に説明しまっす。

ジョセフと言う青い髪のおっさんが、

絵にしたら捕まる人形を抱え、ヘラヘラしています。

そんな大人買い出来る程、安い値段では無いのですが。

えっ？軍艦潰すよりは安いって。

そうですか。

構いませんけど・・・。

家臣の皆様も欲しがっていますよ。土産に買ってあげてね。

結局在庫の半分近くをジョセフ一行は買い求めてガリアに帰って行ったのです。

「・・・マチルダ。売れたね。」

「下手な城なら現金で買えるよ。アンタ。」

「城なんざイラネ。今の孤児院で十分だい。ルイズが卒業したら、ココが終の住居よ。」

領地経営なんざ負担しか無いもんね。

それよりは楽しくフュギア作って人生を謳歌しよう♪

この商売も領地経営より儲かるのは事実。

しかし金の使い道が無い。

なので、サブの仕事に投資する事にしたのだ。

そう。原作でシエスタに着せて大騒ぎになったセーラー服。

アレを利用したセーラー服居酒屋だ。

スカロンの店とは違う地域だし、問題ないだろ？

コスプレは定期的に入れ替えするし、店員は学生をバイトに使えばOK！

エンジェルアイランドはワルドに管理を任せ、マチルダが店長となった。

ワルドは「先生の力作、決して安い評価の価格にはさせません。」だと。

幸せそうなので放置しとこ。

新しい店の名前は「きまぐれヴィーナス」。

どっかで聞いた事あるって？

ググりなさい。そしたら分かります。

生活が苦しい魔法学園の生徒が大半ですが、ベテランのお姉様も多数居ます。

エロは売りません。

萌えのみ売る店です。

この店の趣旨は理想を具現化した店なのです。
エンジェルアイランドに買物に来た客が動く天使を見て帰るお店が趣旨。

見て楽しんで飲む。それだけです。ハイ。

たまに暴走するヤツ居ますが、

そう言う輩は叩き潰して迷惑料金加算の上、叩き出します。

エロが欲しいなら街の夜鷹でも買いなさいって。

ワルドも良く飲みに来ます。

「先生。先生の店はどれも素晴らしいです。

アチラは何時でも持ち帰れる自宅の天使。そしてこの店は理想が動く店。」

ぼくはもう先生に一生ついて行きます・・・ヒック。」

ワルド。すまんね。

オレと知り合ったばかりにオカンの妄想もブツ飛ばしてしまつて。
あの世のオカンも嘆いているかも・・・。

ま、あるかどうか分からない聖地求めるよりは平和でいいよね♪

しばらくした頃。

トリスタニアに居るスカロンがウチの店に来た。

どったの？と聞くと、ウチの傘下に入りたいとか。

魅惑の妖精邸が下火になり、困っているそうです。

オレのせい？？

儲けるつもりは無かつたし、フュギアと違い、

コスプレの定期的入れ替え&看板だけなので、了承ですよ。

これで「きまぐれヴィーナス二号店」誕生です。

店員の女の子は素で働いてもらっています。ツンな子はツンなまま。デレはデレ。幼児な子もそのまま。意外と人気あるのがSのお姉様です。

鞭片手に客を相手してるのが評判だとか。
ボンテージ出そうかな・・・。

そんな風楽しく過ごしていたら、ルイズの姉と言う女が来た。
エレオノールとか言う凶暴女だ。
アレはキツイ。

ワルドもヤツを見たら逃げた程だ。
年齢的にはワルドと合うと思ったのだが、ヤツに聞くと、頃されてしまう。

精神が持たない・・・とか。
気持ちは分かるな。

おかげで婚期を逃し、ますます暴走してるそうです。
世間の男に勇者は居ないの？

「ルイズに会いに来たら、こんな汚らわしいお店があるとは。
許せんせんわ。」

ジョッキ片手に真っ赤な顔して飲みながら言うセリフじゃねーぞ。
姉さん。

さすがに店員の女の子に接客させる訳には行かないので、オレが着く事になった。

「エレキギターさんでっか？この店のオーナーのタロウって言います。ヨロシコ。」

「ワタシの名前はエレオノールです。楽器ではありません！」

「そりゃ失礼。結構飲んでますね。ここらは田舎です。帰りは大丈夫ですか？」

「学園にルイズが居るから平気です。それよりもっと酒出しなさい。」

それからはグチの連鎖とグダグダの始まり。

素材は悪い人じゃ無いのに、性格のキツサで婚期逃した人だもんね。あんまり我俣言うので、オレもキレてしまい、地雷踏む言葉を連発しました。

エエ、後悔はしませんよ。

世界の男性の名誉のためにも黙って居られませんでしたからね。

「エレさんよ。アンタ何様？」

「ワタシはエレオノール。何で世の男性はワタシの良さが理解出来ないの？」

「ワハハハハハ。そりゃアンタ。

そんなキツイ姉さんに着いて行ける勇者は居ないって。」

「何かバカにされた気分ね。タロウだったかしら？」

公爵家長女のワタシに良くもそんな口叩けますわね。」

「別に???ココでは皆、バカになる店。店の入り口にも書いてあるでしょ？」

この中は別世界の物語の世界。身分は関係ありません。とね。」

「そ、そうなの。まあいいわ。それよりもエールの追加よ。今夜は飲むわ」

この姉さん、ホンマに貯まってたのね。

まあ、婚約者には連荘で逃げられるわ。婚期は逃しつつあるわと。

しっかしまあ、この方。キツイわ。

原作でも相当のキツキツ姉さんでしたが、ココまでとは。

男が逃げるのは当然です。

自分はヘタレですが、Mではありません。

心を許した女性には何を言われても堪えませんが、赤の他人の女には遠慮はしませんぜ。

ルイズの姉さんでも関係ナシ。

もうガンガン叩きました。

「チョツ、貴方、仮にも公爵家の長女っ！」

「ハイ。ストップ。エレちゃん、アンタは二言目には公爵家出るのね。」

肩書き無くなったらアンタは何？」

「エレオノールよ。当たり前でしょ」

「ふーん。肩書き無くなったらタダの三十路前の行き遅れじゃん。人生負け組。ワハハハ。」

「ぐつつ、アンタに何が分かるのよ。世の男性が見る目無いのが悪いの。」

「いんや、世の男性は見る目があるからアンタから逃げたの。」

誰がこんなキツキツ女と一緒にになれるもんね。笑うぜ。ワハハハハ。」

「なんで、そこまでバカにするの？」

「そりや自分の身を顧みていないアンタが哀れだからよ。誰も言わないならオレが言うの。」

エレたん、一度幼稚園から女をやり直しなさい。」

「び、ぴえ~~~~~!!」

お父様、お母様~~~~。エレがバカだつてええ。」

もう叩くだけ叩きましたわ。泣こつが喚こつが怖くないもん。

潰れたのでルイズにお引取りに来て貰いました。

エレオノールが涙でグショグショになってたので、さすがのルイズも真っ青。

頼むね。ルイズ♪

翌日・・・。

店の仕込みも終わって、製品の納品も終わったので、

オレは孤児院の庭でボケラーとしてました。

そしたら・・・来たのですよ。

あの烈風オバンが。

熱闘、往き遅れVSキモ男（後書き）

次回は烈風オバン襲来です。

キモ男は朝陽を再び見れるのか？

烈風オバンVSキモ男（前書き）

オバンがキレます。

キモ男も始めてチート発揮。

烈風オバンVSキモ男

タロウです。

仕込みなどを終え、ボケーツとしてたら、目の前に初めて見る方。ええ、妙齢のおば様です。

髪の毛はピンクブロード。体系はスレンダーですね。

お子様を生まれた方とは思えない体系です。ハイ。

そして顔はルイズが年を召したらこうなるだろう？と思う方です。

そう、往年のマンティコア隊隊長。烈風のカリンこと、カリヌ様です。

なして、ココに来るの？と思いました。

何せ疲れてまして・・・。

「貴方がタロウ・ヤマダ殿でしょうか？」

「ハイ。確かに。タロウ・ヤマダはオレですが？どちら様でしょうか？」

分かってるけど聞くもんね。

「わたしはラ・ヴァリエール公爵夫人、カリヌ・デジレ・ド・マイヤールと申します。

いつも娘、ルイズがお世話になってるそうで。」

「いえいえ、どう致しまして。で、本日はオレにどう言ったご用件で？」

夜の仕込みもありますので、出来れば休みたいのですが。」

「昨夜、長女のエレオノールがコチラの酒場で遊んだそうで・・・」

「ああ、結構楽しく飲みましたね。彼女も色々と疲れてたみたいですよ。」

「ストレスは発散するべきです。そのための酒場ですから。」

「で、結構女性に取っては言われては溜まらない言葉を言われたとか・・・（怒）」

「そうでしたか？いえ、そう言われても男性の立場からしたら、聞き捨てならない事ばかり言われましたのでね。」

「少しキツイお話した程度ですよ。いや、大人げなくて恥ずかしいです。ハハハ。」

「そうですか・・・。それにしてもあのエレオノールが大泣きしたと聞きましたので、乱暴でもされたと思うたのですが。」

「とんでもございません。
自分も妻ある身。他人の女性に乱暴なんて出来ませんよ。
口論ならOKですけどね。元々はヘタレですから。ハイ。」

「ところで聞く所によりますと、貴方はルイズの・・・」

「一応使い魔ですよ。ですが本業が忙しくて仮使い魔に代役して貰っています。」

「あの黄色い大ネズミですね。」

「ハイ。自分が召喚したのですが、中々ルイズに構って上げられな

いで、

彼に使い魔してもらっています。中々好評みたいですよ。」

「まあ愛らしい外見ですし、それはいいでしょう。ですが……。

昨日、エレオノールに無礼を吐いた罪は許せません。」

「あるええ。この国って口論に負けたら親に泣きつくのですか？
ダメ女プラス、親離れ出来ない娘か。生きてる価値無いっスね。
男も溜まりません。これじゃ。」

あの姉さんが嫁に逝けないのも親の責任ですよ。」

「聞き捨てならない言葉聞いた氣しますが……。 (怒) 」

「言葉通りですよ。」ラ・ヴァリエール夫人。

貴女の子育てが間違ってたのが、彼女の不幸の元凶です。」

「使い魔の分際で良くも……。」

「すいませんが、使い魔は休業しています。」

現在、ルイズの使い魔は愛らしいピカちゃんです。」

「良くもそこまで言いますね？」

「で、道理が通らないなら暴力振るうのですか？

オレは基本的に自分から暴力に訴える事は出来ないヘタレです。
ですが、理不尽な事は国に訴えますよ。公爵夫人に暴力を振るわれたとね。」

一応、この店も国の認可を得てます。

お得意様にはアンリエッタ王女様も居ますよ。」

「……謝罪はしないのですね？」

「何に謝罪するのですか？エレオノール嬢の暴論に晒されて心を痛めた男性こそ謝罪を受けるべきですよ。」

「……言い残す事はそれだけですか……。」

「ほう、何か自分が間違った事を言っただけでも？」

「……もういいですね。」

「だから、何を言いたいの？妙齡のオバハン。」

その時、オレは確かに聞いた。「ブチン！！」何かが切れる音を。次の瞬間、極太のカッタートルネードが飛んで来た。

オレはすかさず土魔法で厚さ十メートルの石壁を作った。が。

アレには通用しねー。

さすが生きたチート。

ヤツはオレを殺す気みたいだ。

なら殺されても当然だろ？

オレも神から貰った土、水、風のすべてを行使してヤツに反撃開始。もちろんガンダとデルフもね。

「デルフ、ヤツの魔法を弱めるから吸い込め。その位は出来るだろ？」

「任せな、相棒。あのままのスペルだとヤバイけど、弱まったスペルなら何とかできるぜ。」

「んじゃ任せる。オレはヤツを殺す気で突っ込むぞ。」

「ガンバレ相棒。ヤツには手抜きは死と同じだぜ。とにかく全力を出せ。それでも負ける可能性高いぞ。」

その通り。もうギリギリの戦いの連鎖だった。

偏在使うならコッチも使うまで。

自分に与えられたチートはこの戦いで初めて使った。

今までは使っても一部だけだったしね。でもこのオバン。化け物。ルイズが脅えるのも当たり前だ。まさにジャイアンだ。

だがヤツは風の専門家。

オレは土で防御、水で癒し、風で相手を撃破した。

ヤツの腕が一本モゲたが、正当防衛よ。知らねって。

店もボロボロだ。しばらくは休業だな。

賠償金請求しないと・・・。

そう考えてたら学園からルイズとエレが来た。

「「お、お母様あああつ」」

「ルイズに姉さんよ。

始めに断っておくが、

この戦いはアンタ等のオカンが因縁を賭けて戦ったんだからな。

ヤツはオレを殺す気で来た。

だからオレも反撃した。殺す気でね。

そうしないとオレも死ぬところだったから。

何か言いたい事あるなら聞くぞ。」

オレはそう言うと、オバンは無視してスタスタと去った。

コレでヴァリエール一家と疎遠になるかも知れないが、事実は言っ

た。

腕はモゲたけど、まだ息はしてたから助かるだろう。
トドメ挿せば良かったけど、そこまでする気は無かったからな。
しかしあのババア。凄いい化け物だ。

オレもチート貰っていなかったら確実に死んでたぞ。
サイトも良く生きてたよ。アレを喰らって。

数日後。

ヤツの家から謝罪の言葉と見舞金が来た。

意識取り戻したオバンが、自分とは正々堂々と真正面から戦った。
それで負けたのは自分。

しかも因縁つけたのは事実。

まだ動けないから、家族に謝罪して来て欲しいと頼まれたとか・
。

ルイズ、エレオノール、ラ・ヴァリエール公爵。

そしてカトレアも・・。

烈風オバンVSキモ男（後書き）

次回はどうなるでしょ？

あのオトンが黙って謝罪するか？

カトレアは初登場です。

公爵一家の謝罪（前書き）

公爵一家の謝罪です。

公爵一家の謝罪

オレがヴァリエール一家の訪問を受けたのは、壊された孤児院、店の再建現場だった。

少なくとも再開までは二週間はかかると思う。

店舗は作れても品物がメチャクチャ。

また徹夜の連続よ。

マチルダもギーシュも手伝ってくれたので、大分助かってはいるが、きまぐれヴィーナスは何とか破壊されていなかった。

しかし孤児院が破壊されたのは痛いよ。

学園に事情を説明して、孤児を預かってもらった。

俺達は元の学園の部屋……。一応、店が忙しくなっていたので、教師はたまに錬金を見せる見本程度で、殆ど休業してたのです。

そんな死ぬ程忙しい時にルイズ一家はオレのトコに来たの。もうオレも完璧にキレてたのが、ルイズの事も知らん！と突っぱねてた。

さすがにあの理不尽ババアには言う言葉が無い。

文句を言えば暴力。気になる相手にもオシオキ。

どこのヤクザ？

公爵も良くもあんな理不尽ババアと一緒にになったもんよ。

ルイズが原作でひん曲がった性格に育ってるのも当たり前だ。

ンナ歪んだ見本を見て育てば。

「何をしに来たのですか？

オレはアンタ等のオカんに壊された孤児院と店の再起に忙しいの。」

いきなりキレた言い方に公爵もキレるかと思ったが・・・

「妻が申し訳ない事をした。当座の見舞金として一万エキユー持参した。」

これで許せとは言わぬ。謝罪の一部として受け取って欲しい。」

あの公爵がいきなりの罵声にもキレず、謝罪したぞ。どしたの？

そしたら、アンリエッタからかなり怒鳴られたらしい。

彼女も常連だったから、この店が無くなるのは困るとか。

まあ、今回の件はコチラには非はまったく無いからね。

エレ姉ちゃんにしても、罵声に罵声で返しただけの話。

そしてオバンには暴力には暴力。

相手が死んでたら絶対にウヤムヤにする気だったとオレは思ってる。

「分かりました。謝罪の一部として受け取ります。」

今回の事件は貴方達の母親、妻に一方的非があります。

それは理解して頂けますね？

理解していないのなら謝罪は受け付けません。お帰り願いますよ。」

オレの一方的言い方にもキレない一家には不気味さを感じたが、

それでもオレはヘタれない。

負けてらんないもん。

「了解した。確かに妻からも一方的に因縁をつけ、一方的に魔法を吹っかけ、

そして負けたと聞いている。妻も反省している。

現在、身体が動かないので、謝罪に来れなかったが、妻も詫びていた。

どうか謝罪を受けて欲しい。」

「分かりました。でしたら、謝罪は受けましょう。ただ今後二度と同じ事はしないでください。

今回は殺さずに済みましたが、あの方の実力では、

コチラが死んでても不思議ではありません。

本当に助かったのは運だけなのです。

もう少し自重して欲しいと言ってください。次は無いですよ。」

「ウム。それも了解した。妻には必ず伝えよう。

そして今回の損害総額が判明したら教えて欲しい。

全額支払う予定だ。本当に申し訳なかった。タロウ・ヤマダ殿。」

「分かりました。すべて受け入れましょう。人間に損害が無かったのが幸いでしたが、

万一、孤児がケガでもしたら、オレは絶対に許さなかった事は理解してください。

あの子達はオレの子供なんです。」

「当然だな。ワシも妻ではなく子供がケガとかなったら、理不尽でも戦ってた。

ただ、今回は妻の非が大きすぎる。ワシも庇いきれなかった。

さすがに青くなったよ。

本当に。」

公爵はオレにそう言う頭を下げ馬車に戻って行った。

ルイズ、エレオノール、カトレアの三人も頭を下げ馬車に戻り帰って行った。

しかし本当にあのジャイアンババアには頭に來たぞ。

良くも殺さずに済ませたモンだ。
こっちが死んでても当たり前だった。
少し反省すればいいのだが。

カリカリしてると、後ろから妻候補三人がオレを後ろから抱きしめてくれた。
スマンです。

助かりました。

「カリカリしないの。子供にやケガも無かった。建物だけだったからね。」

「イヤ、品物が・・・。」

「そりやまた作ってね♪アンタ♪」

(泣)

「旦那様、シエスタが今宵は美味しいヨシエナベを作りますから楽しみにしてください。」

「お兄様、大変でしたね。でも子供は無事でした。どうか気を取り直してください。」

「三人とも、ありがとう。助かったよ。その言葉で。」

ヨッシャ、頑張るべ。

オレは建物を再建し、品物の生産に入った。

ギーシュ、モンモンの二人には苦勞かけるが、ボーナスを弾むから頑張って♪

その後、ルイズもオレに遠慮する様になってしまった。
仕方ないけどね。

自分のオカンを倒せる使い魔なんて怖くて仕方ないと思う。
自分からは別段危害は加える気も無いし、ピカも相変わらずルイズにピッタリと着いてる。

タバサはオカンも正常になり、タンマリと甘える事が出来たのか、
学園に機嫌よく帰ってきた。

元々無表情なのだが、褒が緩んでるのだ。

以前のタバサが氷みたいな表情だったのが、土に咲く花みたいな感じだ。

キュルケはオレの店でバイトしている・・・。

コスが気にいったのか？金はあるハズだからね。彼女は。

オスマンはウチの店の常連です。ハイ。

ただセクハラはNGなので、セクハラしたら一万エキューの罰金ね、
と言うと、真っ青になって手を引っ込めた。

コルヴェール氏は自動車の開発に必死だ。
一年以内には走りそうな予感する。

そして、オレは・・・。

テファ、マチルダ、シエスタと婚姻する事になった。

逃げ場は無いし、皆優しい子ばかりだ。

ま、頑張るべ。

公爵一家の謝罪（後書き）

公爵には謝罪させました。

何せ孤児にまで被害が及ぶ寸前でしたからね。

カリーンとキモ男2（前書き）

カリーンと和解します。

カリーヌとキモ男2

公爵一家謝罪事件後。

オレは婚姻を発表した。

さすがに三人を貰うのはどうか？

と思ったが、三人の妻は譲りません。

ですので、締めて彼女達の「所有物」となりました。

頑張って働かないと。

ルイズの使い魔ですが、公的に辞めた事にしました。

代わりのピカをルイズの公的使い魔として認知して貰います。

ルイズは悪くないのだけど、

またあのオバンと争うのもイヤですし、彼女も脅えています。

万一の場合は彼女を助けますが、

それ以外は学園の生徒としてのみ認知させました。

オスマンにも認めさせましたよ。

エエ。

もうヘタレではいられません。

家族が居るのです。孤児&三人の妻と言う大家族が。

彼等を守るのがタロウ・ヤマダの今後の人生です。

オタクは辞めないけどね♪

ワルドは祝福してくれました。

ヤツの感性に触れる女性が居ないのもあるのでしょう。

聞いた話ではタバサにアタックして一撃でフラれたとか。
それを聞いた時、ヤツに

「彼女はさる王族の姫、手は出すな！」

と釘を刺しましたよ。

ツルペタのイイ女は居ますって。絶対に。

さて、

破壊された孤児院とエンジェルアイランド&AKB31は以前よりも頑丈に作りました。

カッタートルネードでも破壊されない自信があります。

特に商品陳列棚は、地震が起きても落下しない。

床は柔らかいクッション構造です。

もう品物を壊されたく無いもんね。(T-T)

きまぐれヴィーナスは以前のままですが、バイトの要員が大分増えました。

基本、女性は接客せずに店内を歩き回るのが仕事。

接客はボーイのみです。

手癖の悪いヤツが多いための対策です。

ボーイも魔法学園の貧しい生徒に働いてもらってます。

で、関わらないと決めてたのですが、あのオバン。

またも来ました。

何をしに来るの？

今度は加減しませんぜ……。

「タロウ・ヤマダ様。

カリヌ・デジレ・ド・マイヤールです。

先日は大変なご迷惑をかけてしまった事をお詫びに参りました。

そして、貴方に敗れた自分を誇りに思っております。」

何考えてるの？もう関わりたく無いのだけど……。

「そうですが。謝罪については公爵様から正式に受け取っております。

また自分はルイズの使い魔は公式にピカに変わってもらいました。

家族も居ますのでね。もう戦いはしたくないのです。

貴女相手では手加減が不可能です。

もしまた戦うと言うなら遺書を書いてください。」

「いいえ、カリヌはもう貴方に戦いを挑む無謀はしません。

私もマンティコア隊の隊長をしてた過去もあります。

無謀はただのムチャ。命をドブに捨てるのと同じです。

絶対に貴方に戦いを挑む事は永劫にありません。ですが、

私、烈風のカリン最後の戦いとして、誇りに思う事はお許しください。」

何なの？この人。口調が全然変ってるじゃ無いの？？

「そ、そうですか。それならコチラも助かります。

自分も持てる全能力を尽くして、ようやく勝てたのが貴女でしたからね。

正直二度目はどちらかが墓の住人となります。」

「そうですね。私も自分の左腕が千切れたのを見て、
良くも生きてたと感動しました。

あのカッタートルネードは私の全盛期以上の破壊力。

自分の魔法を喰らった相手も同じ恐怖だったろうと怖気がしました。
カリンは前回の戦いで永遠に消えます。

今後は母、カリーヌとして娘達の養育に全力を尽くします。」

「そうですね。」

それなら自分も戦った価値はありますね。

娘さんは二人とも根は良い女性なのです。

ルイズもエレオノールさんも。

ただ、勝気すぎるのが、彼女達を不幸にしてるのです。

男性は妻に優しさを求める弱い生き物。

ああもツンツンしてたら大半の男性が逃げるのが当たり前です。

そして気になる男性が来ても、

貴女が戦いを挑むとか言われれば、絶対にうまく行きません。

断言します。

ですので、彼女はいずこかの貴族に行儀見習いに出すべきです。

勝気を治すなら、貴族の娘と言うプライドをまず忘れ、

一人の女性としての優しさを身に付けるべきですよ。

カリーヌ夫人。」

それからしばらくカリーヌと歓談し、

エレオノールの行儀見習いにウチの店で働かせて欲しいと頼まれた
のだ。

一応、酒場なんですがね。ココ・・・。

そしたら、アンタが居る店なら信用出来る。ヤツの性根を叩き直し
て欲しい。

働きが悪いなら給与もイラネ。

だからエレを鍛えろ。頼む。プリーズ……。ですと。

「分かりました。

では、エレオノール嬢をウチの店で勤務させます。

ただし、ココに専念する事が最低条件です。

魔法研究所は退職して貰います。

そして嫁の貰い手が見つかるまでは責任を持ちます。

この条件で宜しいならお預かりしますよ。カリィヌさん。」

「それで結構です。

働く条件として、ヴァリエール公爵の娘と言う資格は公的に止めておきます。

ココで働く娘はただのエレオノールです。

タロウ様、娘を宜しくお願いします。」

「分かりました。ではお預かりします。

公爵も承知ですよね？当然。」

「ホホホ。当然ですわ。娘の事は私の管轄です。

特に何時まで経っても片付かぬ娘ですもの。

打てる手があるなら、何でも打ちますわ。」

こうしてエレオノールは魔法研究所を退職。

オレのきまぐれヴィーナスの店員として働く事になった。

あのツンツン女に勤まるか不安だが、引き受けた以上は叩きなおさないよね。

教育係としてマチルダに頼んだ。

さすが元フーケ。

あの程度のメイジには貫禄で勝てます。

我が妻ですね♪

ちなみに彼女は住み込み店員です。

公爵一家からの支援は一切停止。

完璧なエレオノールと言う街娘です。現状は。

食い扶持は大丈夫ですけど、贅沢は出来ません。

ワハハハハ♪

カリーンとキモ男2（後書き）

エレオノールが勘当当然で働きます。
ヤツに勤まるか見ものですね。

灰被り姫、エレオノール物語（前書き）

エレオノールの苦難の日々です。

灰被り姫、エレオノール物語

私は誇り高き、ラ・ヴァリエール公爵家の長女。
エレオノール・アルベルティヌ・ル・ブラン・
ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエールです。

久しぶりに自分の本名を言うと息切れしますね。

いつもはエレオノールで通用しますので。

さて、私は今回、家から叩き出されてしまいました。
原因はルイズの使い魔です。

彼と口論した事をお母様に言いつけ、そして死闘されたのです。

お母様とルイズの使い魔が。

結果はお母様が半死状態になつての敗北。

信じられません。

あのお母様に勝てる人間が居た事には。

ですが、事実が事実。

お母様は左腕が千切れる重症でしたが、何とか現世に留まりました。
問題なのはその後です。

私も反省していました。

私がお母様に不埒な平民にバカにされたと泣いて訴えた事で、お母様は敗北、瀕死の重傷。

何度でも言えます。信じられない事なのです。

お母様は伝説のメイジ、烈風のカリン、その人なのです。

そのお母様を倒せる人間が居る事がいかに恐怖な事か・・・。

そして回復されたお母様から、

私、エレオノールは命令されました。

魔法研究所は即刻退職。

その後、ヴァリエール家からは事実上の勘当。

メイジの誇り、杖も取り上げられました。

この下賤な居酒屋で働け。

逃げたら命は無いと思え。

期限は無期限。

・・・この世の終わりの始まりでした。

私は既に、名門。

ラ・ヴァリエール公爵家の娘では無い、

唯のエレオノールとなったのです。
杖も持てない平民です。

そして私には新たなる三人の年下の姉が誕生してたのです。

「エレオノール、何をテレテレしてるの？
さっさと窓を拭き、床の掃除をしなさい。」

マチルダと言う、この店のオーナーです。

「元貴族のエレオノールさん。貴女の躰を申し受けました。
手抜きは出来ませんので、タラタラとせず、皿を洗いましょう。
ちなみに割ったら給与から差し引きます。」

学園のメイドをしてたシエスタと言う方です。

「エレオノールさん、お庭が散らかってますよ。箒を持ち、掃き清
めてください。
手抜きしたらお兄様に怒られますわよ。」

何を食べてたらアレだけの双山が育つのか疑問なティファニア嬢で
す。

「オイ、エレさんよ。アンタにや損害賠償金の一部も入って居るん
だ。

当分は楽できると思うなよ。逃げたければ逃げてもいいけど、
アンタのオカンが追いかけて来るからね。」

逃げられる訳が無いでしょ？

このハルケギニアであのお母様に逆らう事の出来る唯一の人物から。

タロウ・ヤマダ。

このお店の実質的オーナーであり、恐怖のメイジ。元はルイズの使い魔だったとか・・・。

こうして私の新たなる屈辱の日々は始まったのです。

昨日までは栄光の公爵家長女。

今は街娘のエレオノール。

朝は早くから叩き起こされ、店の片付け、皿洗い、掃除。

それが終わったら、朝食、そして買い物。

昼はひと時の休息。

それが終わると店の掃除、店員の制服の洗濯。

夜は遅くまで厨房での皿洗い・・・。

美しく滑らかだった私の手は今やガサガサ・・・。

どうしてこうなったの??

そして今日も聞こえるあの怒声。

「エレオノール、何をしてるんだ？早く片付けなさい。」

「エレオノールさん、早くしないと、貴女のご飯捨てますよ。」

「エレオノールさん。お兄様が怒っていますわよ。私も庇えません。」

毎日、エレオノールとかエレオノールさんとか言われ、罵声の日々。たまにルイズが店に来て、私の手にそっと10エキユー程度の金貨を握らせ、

「エレオノールお姉様。お母様の怒りが解ける日まで、公式には貴女に会えません。

ですが私は、ルイズはいつまでも貴女の妹です。

どうか早まらず、この店で頑張ってください。

このお金で美味しいモノ食べてください。ルイズ。」

そう書いた紙が金貨を包んでたのです。

ルイズ。

こんな愚かな姉を姉と呼んでくれるんですね・・・。
分かってます。

貴女の姉、エレオノールはこの程度の苦労には負けません。
ええ、絶対に・・・。

負けない・・・と思います。・・・多分・・・。

何時か私をこの苦しみから救い出してくれる王子様が現れる日まで、
エレオノールは耐えましょう。

こうして後の「灰被り姫、エレオノール物語」の主人公、
エレオノールはきまぐれヴィーナスでの毎日を過ごすのだった。

灰被り姫、エレオノール物語（後書き）

エレオノールが苛められ後に灰被り姫、エレオノールと言う物語が作られる話です。

簡単には地獄は終わりませんけどね。

シンデレラの百倍は苦難の日を味わって貰います♪

エレオノール2（前書き）

エレオノールが主役です。

エレオノール2

私はエレオノール。

元は貴族……だったと思います。

私の日常は三人の年下の姉の罵声で始まります。

「エレ、早く起きなさい。洗濯物が溜まってますよ。」

「エレさん、貴族の方はいいご身分ですね♪ノンビリと起きれて。」

「エレオノールさん、そろそろお兄様がキレてしまいますよ♪」

もう慣れた毎日の日常の罵声です。

反抗？

絶対に出来ません。

お母様よりも恐ろしいタロウ様が居るのです。

現在のハルケギニア最強のメイジと言われるお母様を倒せる人です。
私は何時、この魔境から抜け出せるのでしょうか？？

タロウです♪

大分エレオノールも仕上がって来ました。

以前の暴力的ツンツンは完璧に影を潜め、オドオドする小娘になっています。

やりすぎとは思いましたが、

アレには中途半端ではダメと思い、ウチの嫁三人にワルになって頂きました。

最初は嫌がっていましたが、後にはノリノリ♪

今や地球の童話、シンデレラ姫の姉みたいに毎日エレオノールを苛

めています。

立場の差って怖いですねえ。」

で、ここまで苛めてどうするの？と考えますよね。

それは、しばらく内緒。」

エレオノールです。

今日は舞踏会があるとか・・・。

以前の私なら主役でしたが、私は今やタダの平民。

服もボロボロのだけです。

手はアカギレでボロボロ。

髪の毛も艶やかだった金髪がボロボロ。心はもつと壊れたでしょう。

自業自得とは言え、愚かなのは、かつての私です。

母を死なせかけてしまい、家族にも多大な迷惑をかけました。

死んでお詫びと思いましたが、自殺したら実家に数倍の迷惑料金を請求すると言われ、

死ぬ事も出来ません。

毎日働き、皿洗い、洗濯、掃除、その他雑用と、本当に大変でした。でも完全に慣れたみたいです。

今では、余程のヘマしない限り怒鳴られる事はありません。

人間の適応能力は大したモンですね。

貴族だった私が平民の仕事も覚えられたのですから。

はあ、それにしても舞踏会。

主役はワルド様だそうです。

彼も出世されて、今やトリスティン有数の貴族とか。

タロウ様の支援で、凄惨な出世をされたそうです。

彼も花嫁を求めているとか・・・。

かつての私なら齒牙にもかけなかったのでしょうが、今は羨ましい。彼の舞踏会に出て見たいと心底思います。

でも、私の手元には僅かなエキュー金貨のみ。

それにこの手や髪では・・・。

サメザメと泣いていたら、また三人の姉様から怒られてしまいました。

「エレ、お前如きがワルド様の舞踏会に出たいですって？大笑いさせないで。」

「エレさん、貴女には似合わない場所ですよ。」

「お兄様に弁償も終わっていないのに。いい根性してますね。」

私は血相を変えて謝罪しました。申し訳ありません。

私如きが考えて良い事ではありません。お許しくださいと土下座しました。

こうしないと今宵の夕餉も捨てられてしまうのです。

仕事は過酷ですが、このきまぐれヴィーナスの賄いは絶品なのです。

私が過酷な環境でも心が壊れなかったのは、

この賄いのおかげと言っても過言ではありません。

食べ物も人も救うのです。

そして舞踏会の当日。

三人の姉様は着飾って舞踏会に行かれました。

私は一人、寂しい居酒屋の掃除です。

「行きたかったです・・・。舞踏会・・・。」

涙を零しながら私は掃除をしていました。

どうせ着る服もありません。
するとそこへ・・・。

「エレオノールや、お前は反省できたのか？」

突然、見知らぬ老人が現れたのです。背中には羽。そして頭には輪っかが。

「貴方は??」

「フム、ワシはブリミルの友の一人の神じゃ。もしお前が反省して
たなら、
舞踏会への出席も何とか出来ようぞ。」

ブリミル様の友達の神様？

以前なら鼻にもかけず笑い捨ててたでしょう。
でも今の私には笑えません。

もし可能性があるなら、助けてくださいと願うのみです。

「神様、どうかお願いします。」

私、エレオノールはかつての私とは違います。
どうか、私をワルド様の舞踏会に・・・。」

「ウム、良いだろう。」

ただ、お前にかける神の力は日付の終わりで消える魔力じゃ。
日付が変わるまでには必ずココに帰ってくるのじゃ。

約束出来るか？エレオノール。」

「神様、ありがとうございます。」

エレオノールは必ず日付が変わるまで、ココに帰ります。

どうか魔力をかけてください。お願いします。」

「合い分かった。お前の髪や手の荒れを癒し、この世で一番綺麗なお前にしてやろう。では目を瞑れ。カーーツ!!」

するとどうした事でしよう。

私の荒れた手も髪も昔以上の艶やかさを取り戻していました。洋服もかつての私が着てたモノの十倍は綺麗です。そして家の前には華麗な馬車が・・。

「ウム。良い仕事が出来た。

ではエレオノール。行くが良い。あの馬車で舞踏会に出るのじゃ。

ただしエレオノールと名乗ると不味いと思うので、シンデレラと名乗れ。」

「分かりました。神様。ではシンデレラは只今から出かけさせていただきます。」

「楽しんで参れよ」

「ハイ」

エレオノールは喜んで舞踏会に出かけた。

しかし変るモンね？あのツンツンお嬢様が、ココまで変るとは。もうお分かりと思いますが、

今回の騒ぎはエレオノールをワルドに押し付ける計画だったのです。

さすがに以前のままではワルドも嫌がると思い、

童話のシンデレラをエレオノールで再現したのです。

三人の嫁は一応ワルドに憧れてると言う設定です。

さて仕上げはどうなるか

エレオノール2（後書き）

次回でエレオノール編は完結します。
ワルドが喜ぶエレオノールとなるか？
御待ちください。

エレオノール完結編（前書き）

エレオノール完結編です。

エレオノール完結編

舞踏会です。

エレオノール、もとい、シンデレラです。

私は先程まで夢にまで見てたワルド様の舞踏会に出ています。

誰も薄汚れてたエレオノールとは思わないでしょう。

神様、本当にありがとうございます。

舞踏会では久しぶりに様々な男性から誘われました。

ですが、出来たらワルド様に誘われたい。

私はオドオドとしながら、舞踏会の片隅に立っていました。

するとそこへ、凜々しい髭を生やされたワルド様が・・・。

「美しいお嬢様、もし宜しかったら、このワルドと一曲踊って頂けませんか？」

と、誘われたのです。

夢みたいですが、現実の話です。

ああ、嬉しい。

これが一夜の夢で終わらなければ・・・。

楽しい時間はすぐに終わるモノなんですね。

神様と約束した刻限、日付が変わる時間が来てしまいました。

急いで帰らないと、魔法が解けてしまう。

そうしたら、またみすばらしいエレオノールになってしまう・・・。

私は慌てて、階段を駆け下り、馬車に戻ります。

ワルド様には、急用が出来て急いで帰ります。

また会えれば・・・とご挨拶のみして馬車に乗り、家の近くで魔法が解け、

私は何時ものエレオノールに戻りました。

見ると片方の靴だけは美しい靴のまま。

もう片方は落としてみたいです。

自宅にある元のみすばらしい靴に履き替え、美しい靴は昨夜の思い出として、

大切に保管する事にしました。

掃除してると三人のお姉様がお帰りです。

「あら？エレ。まだ起きてたの？感心な事。」

「エレさん、ワルド様はとても凛々しい方でしたね。見たかったですか？」

「エレさん、早く寝ないと顔の皺が増えますよ。」

何時もの罵声が心地よく響きます。

もう慣れたいつもの生活。

だから昨夜の夢がとても素晴らしく思えるのです。

私は反論も出来ず、ただ皆様におやすみなさいと言うのみです。

数日後、我が家にワルド様の使いが見えました。

何でも先日 of 舞踏会でお気に召したお嬢様が居たとの事。

羨ましい話です。

そして話を聞きますと、舞踏会から急いで帰られたため、片方の靴を落とされた方とか・・・。

まさかあの時の靴？？

三人のお姉様がその靴を試されています。

ブカブカな方、入らない方、皆様の足には合わないみたいです。

アレは魔法で作られた私だけの靴。

そして私にも試せと言われました。

三人のお姉様が、エレに合うモンですか！と言われ、恐縮してしまいました。

ですが、使者に止められ私も試す事が出来ました。
そして・・・。

「おお、まさに貴女の足にぴったりの靴。まさしく貴女だったので
すね。

シンデレラ様は・・・。」

「私如きが言うのも憚れますが、先日の夜、神と名乗る方に魔法で
施しを受け、

舞踏会に出席させて頂きました。

まさか、ワルド様と踊れるとは思えず。

楽しいひと時でしたとワルド様にお伝えしてください。」

するとそこへ・・・。

「エレオノールさん、貴女は本当に美しく気高くなられてたのです
ね。

このワルド、貴女に正式に婚姻を申し込みます。」

なんとワルド様が控えておられたのです。

そして躊躇もせず私に婚姻を・・・。

嬉しいです。

私が婚姻を男性から申し込まれるなんて始めて。

今までは、家庭の縁での婚約ばかりでした。

ですが、ワルド様は家庭も関係ナシにエレオノール個人に申し込ま
れたのです。

私が、エレオノールがですよ。

嬉しい。何時か私はハラハラと涙を流していました。
嬉しい時の涙なんて生まれて初めてです。

「ワルド様、本当に私で宜しいのですか？
ヴァリエール家の娘でも無い、ただの私、エレオノールで。」

「エレオノールさん。私は貴女の心の輝きに引かれたのです。
家とか身分は一切関係ありません。
どうか私の妻となってください。」

「分かりました。でも、私の身はタロウ様の判断を頂かないと・・・」
するとそこへタロウ様が現れました。

「うん、事情は分かったよ。では、ワルドとの婚姻祝いとして、エレオノール個人の負債はすべてワルドに譲渡する。ワルド。おめでとう。
そしてエレオノールさん。ご苦労様でした。
今後もこの家で教えられた事を忘れずに、ワルドを支えて欲しいです。」

何と、私の負債をワルド様にすべて譲渡してくれたのです。
ワルド様に懸命に御使えないと・・・。
そうしてたら、お母様まで来られました。

「エレオノール。良く頑張りましたね。
この婚姻はすべて貴女の努力の結果。
我が家は一切関知していません。
女性の幸せは幸福な結婚ですよ。エレオノール。」

では、ヴァリエール家からの祝いです。

貴女の勘当をすべて解き、貴女をラ・ヴァリエール家から嫁に出す事にします。

エレオノール。おめでとう。」

お母様から祝福の言葉と勘当が解かれるとの事。

そしてヴァリエール公爵家からワルド様に嫁げると・・・。
嬉しいです。

このエレオノール。

生まれて初めて人生の幸福を実感出来ました。

「ワルド様、エレオノールを貰って頂けますか？」

「もちろんだよ。生涯キミと共に歩んで行こう。」

こうして私の辛い毎日は突然の終わりとなりました。

三人のお姉様は、私におめでとう。頑張るのよ、と祝福の言葉を頂けました。

私は嫁ぎますが、また遊びに来てもいいのですよね。

この家は本当の実家にも思えますから・・・。

エレオノールおめでとう。

ワルドおめでとう。

ヴァリエール公爵おめでとう。

カーリヌおめでとう。

ヴァリエール一家の皆様、おめでとう♪

世界の行き遅れの女性の皆へおめでとう。

エレオノール、嫁に行けておめでとう♪

こうしてエレオノールの辛い日々は終わり、

後にエレオノール（シンデレラ物語）と言う童話となりました。

私はワルド様の隣で、毎日を楽しんでおります。

ワルド様は多少変な趣味がありますが、私もきまぐれヴィーナスで育った人間。

ドンと来いです。

貴方の趣味はすべて受け入れます。

フフフフ。

ついにエレオノール補完計画が完成したぞ。

ワルドの嫁にもなれた。

そしてこの店で鍛えた結果、ワルドの趣味もすべて受け入れ、ツンは完璧に霧散。

ワルドも満足してる・・・。

オレはこの結果をカリーヌ夫人に報告すると、
彼女から娘の窮地を救って頂き、感謝していると真顔で言われた。
ワルドとエレオノールも幸せだし言う事はナシ。
趣味もOKなら理想の妻だろう。
良かったね。
ワルド。

エレオノール完結編（後書き）

ワルド好みのエレオノールに調教できました♪
次回から本編に帰ります。

少しだけエヴァ最終回風に加えました。殺人貴様、
ご提案ありがとうございます。

タロウの毎日（前書き）

趣味を広めつつあるタロウです。
更新遅れてすいませんでした。

タロウの毎日

タロウです。

ワルドとエレオノールは補完しました。

おかげで彼も自分の趣味を理解してくれるいい伴侶に恵まれて幸せそうです。

世の男性、もし自分のすべてを受け入れてくれる

女性に出会えたらすべてを捨てても逃がさない事です。

エレオノールは当初の状態では、恐らく誰とも結婚出来なかったと思います。

牝の出来ていない犬でしたからね。

カリィヌから全面的に任せられなかったらエレオノールは放置でしたよ。

すべて任せられたから、彼女の改造も出来ました。

ワルドも犯罪を犯さずに済みそうです。

さて、原作ルートをWikiで検索すると・・・。

もう完全に脱線してまーす♪

はつきり言つてゼロの使い魔みたいな別な世界です。

オレとか神様が介入した時点で違う話になるのは当然ですが、これでは予想が出来ません。

流れに任せますか・・・。

店は相変わらず好調です。

エンジェルアイランドはワルドに完璧に任せ、

ヤツは今やトリステインでも最高の金持ちの一人です。

金儲けよりもフィギュアに囲まれる日々が嬉しいらしいみたいです。
が。

最近嫁のエレオノールも店を手伝ってくれています。

商品補充がオレの仕事です。ハイ。

A K B 3 1 はハルケギニアの子供の憧れの地となりました。

女性も大勢押しかけ、ギーシュ、モンモンは今や無くてはならない人物。

モンモンも学費はもちろん、自分の実家に仕送りする余裕もあるとか。

親孝行な子ですね。

ギーシュは毎日の鍊金でラインからもう少しでスクウェアに上がりそうとか。

ガンバレ。もう少ししたらモンモンも落せるぞ。多分・・・。

きまぐれヴィーナスはハルケギニア中に支店網が広がりそうです。

マネジメントはマチルダに任せています。

ガリアにも支店作りしました。

向こうではガリアの王らしき人がお得意さんに居るとか・・・。

あの青髭。仕事してるのか？

ルイズは自分と別れてからはピカと仲良く暮らしています。

子供な彼女は人間の使い魔は扱い切れない種族だったのでしょ。

今は幸せに学生メイジしています。

系統に目覚めたため、コモンはすべてマスター。

以前みたいに人騒がせな爆発事件は完全に収まりました。

自分は三人の嫁を何とかコントロールし、地雷を踏まずに生きています。

いや、冗談では無く、毎日地雷地帯を歩くのと同じですよ。

三人も嫁が居ると・・・。

扱いが少しでもえこひいきと思われたが最後。

夜から朝まで延々と泣かれ喚かれ、数日は口も開いてくれません。

ハーレムは一步間違うと地獄です。

ですが、楽しいキャッキャウフフの世界もあるので相殺出来ます。

でもこれ以上増えるのは勘弁して欲しいです。

フラグは一本だけでも人生は勝ち組ですが、三本だと胃が持ちません。

もし幾多の勇者みたいに十人とかの伴侶を持てば。

若くして腎虚となるのは確実です。

硬い話はこの程度にして、経営も大分安定し、周囲のガツチリと固まりました。

そろそろ自分だけの趣味も始めていいと思います。

え？趣味ってオタがあるだろうって？

ええ、オタも趣味なんですが、

今や生活の糧として、趣味とはかけ離れつつあります。

そう、男の趣味。戦闘機ですよ。

まずは手元にある零戦。

色々欠陥もあり、大戦末期にはアメリカに七面鳥落しとバカにされました。

これは設計が悪いのではなく、日本海軍がムチャな要求をしたため、後の馬力アップや武装強化、防弾も出来なくなっただけです。所変ってココは異界。

魔法なんてチートな事がまかり通る世界です。

佐々木武雄の遺産たる零戦を一日でも長く持たせるために、機体の強化。パワーアップ、武装強化、防弾は必須です。

機体の強化はムチャな穴だらけの骨格部品の穴埋めと強化。これで相当ガツチリすると思います。

バランスは当然狂いますので、後でテールコーンにバラストを積み調整します。

外板は薄いジュラルミンから厚めのジュラルミンにします。

純正では波打ってた外観は皺の無い美しい機体となりました。

パワーアップについては、燃料のオクタン化アップ。

旧海軍では足りないオクタン化のため、

水噴射にグリコール液を混ぜて馬力対応していました。

そしてシリンダー内部のコーティング。

ピストンの固定化を強化。

リングの強化です。 > 圧縮もかなり上がりました。

これでかなりの馬力が上がると思います。

武装は弾丸の塔最数アップ。

支援や僚機の居ないこの世界では、弾丸が切れたら遊覧飛行機です。

ただの的となります。

ですので、弾の搭載数アップは必須です。

20mmで200発、7.7mmで1000発。

これが限界です。ハイ。

馬力が上がらなかつたら、これも不可能でした。

そして防弾。背後に飛竜のブレス一撃までは耐えられる鉄板を貼り

付けました。

二撃も食ったら飛行機が終わります。

そして着陸装置の強化です。

ブレーキはディスクブレーキですよ。

純正はドラムでしたから、良く噛み付いたそうです。

ディスクは熱にも強く調整も楽です。

ドラムの方はコルヴェール氏の車に提供しました。

馬力は多分1500馬力程度にはなったと思います。

最高速度はあまり変わりませんが、急降下性能が別物です。

800km程度でも空中分解はしないでしょ。

馬力は重量と相殺されましたが、おかげで機動も楽になりました。

いや〜。飛行機って楽しいですよ。

嫁さんもたまに乗せてあげると大喜びします。

複製が出来たらいいのですが、出来てもパイロットがいません。

車と違い、飛行機は墜落したら終わりですから。零戦の強化はこの程度にして、次は車です。

コルヴェール氏に色々と情報を提供してたら、かなり初期型のT型フォードみたいな車を作れました。やはりコルヴェールは天才ですよ。

坂は登れない、最高速度も30km程度ですが、それでもゼロから作った車です。

素晴らしい快挙です。

まずは市民権を得るためにも量産して貰わないと。

彼は魔法学園を辞めてもらい、自分が雇ってしまいました。子供のお守りには勿体無い人物です。

数年したら大金持ちは確実ですよ。コルヴェールさん。

色々してたら、またあの方が来ました。

そう、災厄の種、ルイズオカン、カリィヌです。

アレが来る度にロクな目には逢わないので、避けていたのですが、また寄り着きやがった。

「タロウ様、お久しぶりです。」

「ああ、ども♪カリィヌさん。今日はどう言うご用件で？」

「そんなに嫌がらないでください。」

「そう言われてもね……。ロクな思いしていないから当然ですよ。で、何か用ですか？」

「ええ、実は……。」

要約すると、次女のカトレアが中々病気が治らない。

アンタは色々変った特技があるから、もしかしたら何とか出来るかも知れない。

また藁でも掴めたなら万歳だから、一度カトレアに会って欲しい。ダメでも以前みたいに因縁は絶対につけない。

お願い、プリーズ♪

と言う事らしいです。

カトレアか……。

確が原作でも不治の病にかかって長生き出来ないと言われた子だよね。

エレみたいに叩き潰して何とかするのは訳が違うから、さすがに即答は出来ない。

だが、見るだけならOKとしました。

エレもルイズも救って、次女だけバイバイキーンではね。

在庫も安定してるので、

コルヴェール式自動車の試運転も兼ねてヴァリエール領を尋ねる事になりました。

ケンカは売るなよな。アホ両親。

タロウの毎日（後書き）

いよいよ難関の一つ、カトレア救済に入ります。
あの天然姉ちゃんがどうなるのか？
少し御待ちください。

精霊とタロウ（前書き）

更新遅れてすいません。
今回はカトレア救済です。

精霊とタロウ

のーびり逝こうよー俺達はーアセツテ見たって、同じ事ー♪
車はガソリンで走るのです・・・。

このCM知ってる人は絶対に老齡に近い人でーす。

タロウです。

今日はカリーヌ夫人とドライブしています。最新型コルヴェール式自動車で、
バタバタと走っています。

いや、絶対に馬車よりは速く快適ですよ。コレは。

ガソリンは錬金で作れるため、給油の心配は自分なら問題ナシ。

2STの煩いエンジンですが、これも改良を重ねれば進化するですよ。

何事も始まりが大切なのです。

「タロウ様、このじどうしゃと言う乗り物、馬車より煩いのですが、
乗り心地は快適ですね。」

「そうです。何より馬とは違い、疲れが出ませんので、燃料さえ切らさなければ、
何時までも走れます。元魔法学園教師、コルヴェール氏の作った乗り物ですよ。」

「そうなんですか。それにしても貴方は多才ですね。

人形を作り国の子供や大人も魅了し、飲み屋でも多才。そして、この様な乗り物も動かせてしまう。

何よりも私よりも強いメイジ。素晴らしいです。」

「いえ、アレは自分の限界を超えたからこそ勝てただけの話。自分は基本、ヘタレで通しますよ。

戦いは何も残しませんからね。

この前だって孤児院は壊れる、店は破壊されると大損害でした。」

「その点は本当に申し訳ない事をしたと思っています。」

「ま、もう終わった事です。そろそろヴァリエール領では？」

「ハイ。着いたみたいですな・・・。」

俺達二人を乗せた車はバタバタと音を立てながら屋敷に到着。

屋敷にはラ・ヴァリエール公爵を始め、屋敷の住人がすべて待ち構えていました。

「う、馬の居ない馬車が着きました。」

「ウム、多分タロウ殿の馬車だろう。妻も一緒だと思う。」

タロウとカーリーヌが車から降りると公爵が駆け寄り、

タロウに娘の件では大変お世話になったと、

珍しく礼を云った。アノ公爵が礼を言うのだ。

余程感謝しているのだろう。多分・・・。

そしてカーリーヌとタロウは公爵に先導され、屋敷の食堂に案内され、

会談を始めた。

「ヴァリエール公爵、今回は次女のカトレア殿を診て欲しいと夫人から頼まれ、
この地に参りました。」

「ウム、聞いておる。我が娘は何故か色んな不幸を抱えておる。
長女のエレオノールは知つての通り、癩癩持ちで中々嫁に行けず困
つておつた。

結果はオヌシに任せ、ワルド夫人に納まれた。イヤ、本当に感謝し
ておる。

以前の娘だと、絶対にワルド殿は断っていたからな。」

「そうです。かなりの強硬手段を用い、
彼女の精神を崩壊寸前まで追い込み、精神を再構築しました。
許しが無かつたら出来なかつた事です。

今は二人とも幸せに暮らしていますからいいでは無いかと・・・。」

「ウム。それで良い。三女のルイズもオヌシの導きで系統に目覚め、
オヌシから与えられた使い魔と幸せに暮らしておる。」

「元々は自分が彼女の使い魔でしたが、この地を守るべき家族も出
来ましたので、
引退し、ピカに彼女を守って貰っております。彼は見かけは可愛ら
しいのですが、
いざと言う時は高電圧の電気で彼女を守る
心強い使い魔です。ご安心ください。」

「ウム。聞いておる。学校の近くでオーク鬼に襲われた時、
使い魔の電撃でオーク鬼を一撃で黒こげにしたとか。」

「頼りになつてるでしょ？」

「ウム。所で今日はカトレアの治癒の可能性を確かめに来たと聞いているが、不埒な考えで来たのでは？」

「失礼ですね。公爵。」

タロウは不愉快を感じたので、不愉快オーラをモロ出しにした。妻を半殺しに出来るメイジとして認識してる公爵はモロに脅えてしまった。

「すまぬ。ワシの失言であつた。許してくれ。」

公爵は土下座寸前までの謝罪をしてしまった。

余程怖かったのだろう。カリィヌが片手をモがれ、半死になってた姿を思い出して・・・。

ちなみにカリィヌの手は元通りとは行かなかったが、手は繋がっている。

動きは鈍くなつてしまつたが、義手よりはマシらしい。

「ではカトレア殿の部屋に案内してください。出来るかどうかは診ないと分かりませんから。」

「貴方はココに居て反省しててくださいね。また地雷踏まれては適いませんから。」

「わ、分かつたカリィヌ。許してくれ・・・。」

「後でタップリとO・HAN・A・SHI・しましょ。」

「カ・カリーヌ……！！（涙）」

泣き顔の公爵の愉快な顔を残し、俺はカリーヌの先導でカトレアの部屋に向かう。

「タロウ殿、私の夫が失礼致しました。」

「いいえ、どういたしまして。コチラもワザと殺気を放ちましたから。」

「彼も怖がっていましたわ。許してくださいね。」

「ええ、モチロンです。ではカトレアさんと会わせて頂きます。」

オレは基本、カトレアとどうこうなりたいとは全く思っていない。ヴァリエール家にて一番まともな人間、それがカトレアとは分かっている。

かなりの動物好きとか直感で他人の心根が理解出来るとかは幾多のSSでも語られている。

それも病弱で外の世界を知らないがために発達した技能だろうと推測してる。

だが助けられるなら何とかしてあげたいよね。

女性は世界の礎です。

男には出来ない子供を産めると言う伝統があります。

彼女みたいに母親としての資質が高い女性には未来のためにも生きて欲しいと思います。

病気さえ何とか出来れば、それも適いますからね。

さて、カトレア嬢の部屋です。

ウワサでは聞いてましたが、小さなムツ。ロウ王国です。ハイ。
クマ、ライオン、トラまで居るのです。

良くもこの凶暴な生き物がケンカもせずに仲良く暮らせるモノと感心しました。

自分なら一秒も居たくない部屋です。

「カトレア、この方が貴女を診てくださる、タロウ・ヤマダ様です。」

「タロウ・ヤマダです。カトレアさんで宜しいでしょうか？始めまして。」

「カトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・フォ
ンテーヌです。」

タロウ・ヤマダ様、始めまして。」

「今回は貴女の病の治癒の可能性を診て頂く事になりました。
どんな細かい事でも包み隠さず話してください。
そこに治癒の可能性が潜んでると思いますから。」

「分かりました。では思いつく限りの自分の症状をお話します。」

そう言うとカトレアは自分の身体の異常を包み隠さずに話し出した。
慢性的に身体が重い。少し咳き込むと異常に痰が出たり咳が止まら
なくなる。

その他諸々。

水魔法で身体の水の流れ（つまり血の流れ）を診たら、一部で流れ
も悪くなってる。

血もドロドロした所謂濁った血になってる。

血液ガンの疑いもあるが、それだけでは無さそう。

「うーむ……。普通ではありえない病状ですね。カトレアさん。貴女は平民だったら確実に亡くなってたと思います。

親御さんが必死に貴女を生かそうと頑張った結果が今の貴女です。それ位、貴女の病状は様々な病気を併発しています。」

「そうですか……。」

「でも気に病まない事ですよ。とにかく病は気から始まる事も普通です。」

「気次第で治る病もあるのです。まずは一つずつ解決して行きましょう。」

「オレはカリィヌを別室に呼び、現状をすべて話した。」

「特に血の病気が先決。今までどう言う薬を投与してたか聞き、解決の道を探った。」

「水の秘薬も相当投与したと聞くと、この世界では最高レベルの医薬品を投与してた事になる。」

「……。水の精霊と言えば、ヤツには貸しがあったな……。」

「オレはニヤリと悪人笑いすると……。」

「カリィヌさん、二三日時間を頂けますか？」

「それは勿論構いませんが。」

「少し手に入れたい手段があります。うまく行けば……。」

「分かりました。では、お願いします。」

オレはカーリーヌとカトレアに挨拶すると、車でバタバタとラグトリアン湖に出かけた。

ヤツの事だ、寝てると思う。

湖に着くと、水の精霊に向かって罵声を浴びせた。

「水の精霊よ、オレ様が遊びに来てやったのに寝てるつもりか？お前の母さんデベソ。」

車に轢かれてペツタンコ、空気を入れたら元通り♪」

すると・・・。

「ムムムムム。意味は分からぬが、何やら我をバカにされた様な気になったぞ。」

ム？お前は我に指輪を返してくれた単なる者では無いか？」

「水の精霊様、呼び出し方法が分からなかったので罵声を浴びせてしまいました。」

お許してください。タロウ・ヤマダと言います。」

「ウム。覚えているぞ。ソナタが我に指輪を返納してくれてから三度月が交差した。」

「ありがとうございます。で、今回は貴女にお願いがあつて参りました。」

「良かるう。ソナタの願いはまだ聞いて居なかったからな。」

「ヂツは・・・」

それからオレは水の精霊に一人治して欲しい人間が居ると言った。そして治すには秘薬でもムリ。

だから直接精霊に彼女の身体の悪い部分を取り除いて欲しいと頼んだ。

「良からう。私の分身をソナタに預ける。

分身は、治癒が終わったらソナタの管理する池にでも放せ。

そうしたら我は何時でもそなたの願いが叶えられる。わざわざこの地に来る必要も無い。」

「へ？ココに返さなくても良いのです？」

「ウム。我はソナタが気にいった。そなたの傍に居ると色々と面白い事もありそうだ。」

「そ・そうですか・・・では、この瓶に入って頂けますか？」

錬金したペットボトル大の瓶を示すと、精霊は分身をスルリと瓶に入れた。

「コレで我は何時でも行使できる。ただし他人には我を行使させてはならぬ。

我を行使できるのは、タロウ・ヤマダのみ。良いな？タロウ・ヤマダ。」

「ハイ。ここで水の精霊様に確約します。」

「ウム。では行くが良い。我が友、タロウ・ヤマダ。」

オレはそれから湖を出て、ヴァリエール領にトンボ帰り。

公爵夫妻の前で精霊を出したら、

ビックラされてしまった。そしてカトレアの身体に精霊がダイブし、
血の流れから身体にあった病の巣を
根こそぎ取り除いてしまった。

ショックで数分カトレアも気絶したが、
起きたらいきなりカーリーヌに抱きつき、そしてピョンピョンと跳ね
回ってた。

「お母様、お父様、そしてタロウ様。身体が別物みたいです。」

「水の精霊様……。ありがとうございます。」

「良い、単なるモノよ。我は友のタロウ・ヤマダの願いを聞いたの
み。」

礼はタロウ・ヤマダに言うが良い。」

こうして難関だったカトレア救済も何とかなった。

帰宅したら孤児院の庭に大きめの池を作り、精霊を入れたら綺麗な
水となってしまった。

余談だが、井戸の水が水の秘薬に近い成分となり、

孤児院の子供は風邪ひとつひかなくなってしまった。

また、きまぐれヴィーナスの水も異常に美味しいと評判になってし
まったのだ。

精霊とタロウ（後書き）

カトレア救済でした。

孤児院の水もチート化しました。

悪夢（前書き）

何故かカトレアまで付いて来た主人公の悪夢です。

悪夢

タロウです。

今、非常に困っています。

理由ですか？

目の前でニコニコと笑って座っているカトレアさんに聞いて欲しいです。

自分の後ろでは三人の嫁が般若になって立っています。
どうしたらいいのでしょうか・・・。

「カトレアさん・・・。」

「ハイ。何でしょうか？私のイーヴァルディ様♪」

「えっと、自分は確かに貴女を治癒しましたが、それ以外の話は無かったハズですが。」

「ええ、承知していますわ。私を助けてくれたナイト様♪」

どうしたらいいのですか？

既に三人も嫁が居るのにカトレアを何とか出来る訳無いでしょうが。
カトレアが持参した手紙に拠ると、ラ・フォンティーヌ領も付けるから、

カトレアを嫁にしろ。

既に三人も嫁が居るのだから一人位は捻じ込め。

持参金が足りないならヴァリエール領も付けるぞ、ゴルウアアア。
ですと。

困った。

もうこれ以上は身体が持ちません。

三人の嫁のローテーションでヘトヘトなのです。現状でも

それに加えてもう一人・・・。

その羨ましいと思うキミ。代わってくれよ。

絶対に一ヶ月で腎虚になると確約したるぞ。

するとそこへ、一人の悪魔が囁きました。

「タロウよ。身体が心配なら無用の心配じゃ。

我がタロウの身体の不調をすべて取り除いてあげよう。心配せずに
子作りに励め。」

この駄目精霊が。KYよ。

後ろの般若三人が怒りの頂点にあるのだ。

もうどうしたらいいの？

オレは突然いい事を思いついたのだ♪

又キアシ、サシアシ、忍びアシでドアまで辿り着けた。
そう脱走です。

ドアに手をかけ、開けようとした時・・・。

肩をガシツと力強く捕まれてしまいました。

「タロウ様、どこに行かれるのですか？」

「アンタ、逃げる気？」

「お兄様、私を捨てる気ですか？」

もう逃げ場がありません。

オレは何もしていないのだ~~~~!!

それからとにかく土下座して、カトレアとは何も約束していない。
何故こうなったか聞きたい位と言い出したら、今度はカトレアが泣き出した。

泣きたいのはオレなのに。

そうしたら今度は嫁三人が女を泣かせて言い訳するのか？ゴルアアアですと・・・。

もうどうにでもして・・・。

結局、嫁三人とカトレアの協議で、オレを四人で共同所有。

オレの人権って・・・。(T-T)

カトレアの領地は仕方なしにオレが経営する事になった。

枯れた土地では無いが、特産物も無い普通の土地だとか。

そこでラ・フォンティーヌ領にコルヴェール式自動車の工場を設置する事にした。

平民の雇用も出来るし、税収は上がる。

言う事は無いですな。

孤児院もアチラに移す事にしました。

広い土地があるなら活用するべきです。

それにしてもカトレアまで付いて来るとは・・・。

どうしたらいいのよ。

チビッコのメンバーが居ないからロリだけは避けられたけど。

オラはオタだけどロリでは無いからね。絶対に。

コンチクショー。(T-T)

悪夢（後書き）

カトレアまで付いて来ました。

カトレアの領地にコルヴェール自動車本社設置です。

異端審問（前書き）

ロマリアから因縁を付けられました。

異端審問

タロウです。

現在、コルヴェール氏とカトレアを連れて、ラ・フォンテーヌ領に来てます。

長閑ですが、とても綺麗な土地ですね。

さすがヴァリエール公爵が先が無い娘のためと与えた土地です。

今や元氣バリバリな娘となっておりますが……。 (T-T)

今回はコルヴェール式自動車の量産工場建築と孤児院建築のため、ラ・フォンテーヌ領にて測量をしています。

コルヴェール氏もとにかく数百台は量産し、次の開発費を捻出したいと言ってますからね。

まずは最初の量産ですよ。

フォードだってロールスロイスだって、メルセデスだって、最初はオモチャみたいな車が始発点だったのです。

それが今や世界のブランド。

トヨタにしても、最初は模倣から始めました。

何事も起点こそが大切です。

量産に当たって、車の原材料の鉄鋼石が大切ですが、ラ・フォンテーヌ領の山奥には、

原石が山と眠っていました。輸送の手間も省けて超ラッキー♪

工場と言いましても殆どが部品の製造工場です。

最終組み立てはコルヴェール氏が監督しながら慎重に組み立てます。量産とは言いましても、購買層は貴族のみです。

現状では。

いずれは乗り合いバスなども作りたいのですが、今は個人の車が限界。

馬力が足りません。

おかげで今までの貯金の大半は吐き出してしまいました。

ま、投資なんてこんなモノでしょ。
いずれは帰るお金です。

カトレアと嫁三人との共同生活ですが、おおむねうまく行っております。

自分には休む暇も無いのですが。主に夜の生活で。
疲れると水の精霊がムリヤリ癒してしまい、元気にさせられるのです。

そして労働の毎日。

たまには戦争でも無いかと心底考えてしまいます。
逃げ場が無いのがこんなに辛いとは。

そんな事、思ってたある日、

ロマリアと言う腐れ坊主の国からオレに異端審問容疑がかかったとか？

ハ？？異端審問？？

何でもいかがわしい人形で世の男性を惑わせた容疑とか。

まあ確かにいかがわしくはあるけど、

会員制でしか販売していないから、市場には流れていないと思ってたのだが。

ワルドに調べてもらうと、他国の貴族が転売してたそうだとか。

その貴族の会員資格は即刻取り消し、罰金を徴収する事にした。

ロマリアがガタガタ言うので、ロマリアに出かける事になりました。

「トリステインの商人、タロウ・ヤマダと言います。どう言うご用件でしょうか？」

「ウム、お前にブリミル教に反する異端審問の疑いがある。

何でもお前はいかがわしい人形を作っていると言うウワサがあるが、

事実か？」

「まあ、概は事実ですよ。ですが、それで誰かに迷惑でもかけました？」

「認めるのだな？では厳罰に処す。」

「ハ？自分は誰かに迷惑をかけましたか？と聞いているのです。居るのでしたらその方の名前を教えてください。」

自分は人形は作ったけど、誰かに迷惑をかけた覚えは一厘もありません。

顧客の名簿も外部には一切漏らしていませんし、モデルは架空の人物ですよ。

そのドコが異端なんですか？偉大なブリミル教の皆様？」

「ええい、黙れ黙れ。お前の作る人形自体が異端なのだ。大人しく縄に付け。」

「バカバカしい。誰が黙って縄に付きますか。」

ついでに聞きますが、各地の王族には連絡しました？

自分はガリア、アルビオン、トリステイン、

ゲルマニアの王族の方とも懇意にしております。」

「ウムムムム。それがどうした。」

「彼等を怒らせていいならどうぞ。ただしワタシも黙って捕縛はされませんよ。」

自分も烈風のカリンと引き分けたメイジです。

ロマリアの教会程度なら廃墟にするのも簡単ですが。」

いい加減ブチキレそうだったので、自分の戦歴を延々と暴露したた。

大体ロマリアなんてロクな連中では無い。

原作でも抹殺リストNO1にしてもいいと思ってたからな。

ムチャな事はしないけど、向こうがケンカを売るなら買うしかないよ。

連中の魂胆は脅して教会に寄付しろの乞食商売に決まっている。

苦労して働いて稼いだ金をクソ坊主のメシに食われるのは一番イヤです。

お金を使うのと捨てるのでは意味が違います。

コルヴェール自動車に投資するお金は有意義なお金。

対してロマリアに出す金はドブ金です。

オレもハンパでは無い位キレてしまったので、

久しぶりに本気モードでオーラを出してしまった。

後悔はしていないがね。

そしたらヘタレ坊主、泣き出してしまったよ。

オレも頃すつもりは無かったが腕の一本程度は耄り取ってしまおうとおもったが。

何でもどこぞのアホ貴族がオレの人形は素晴らしいが高価だ。

だからヤツは金を持つてるに違いないと騒ぎ、坊主がそれなら異端審問で懷疑をかけ、

寄付金と称して金を耄ろうと考えたとか。

何か三文ヤクザ芝居みたいな安直な考え。

オレはコレでキレてしまった。

ケンカ売るなら買いますよ。

例えロマリアでもね。

ガリアのジョセフも以前とは違い部下とオレの人形で色んな遊びを
してるとか。

そろそろ同人雑誌でも・・・。

そうだ。ブリミル潰すならフュギアよりも同人雑誌だ。

幸いにもネットは繋がっているので、ネタの入手には困らない。

問題は紙だけだが、チートで何とかするわい。

それよりもあのキチガイ宗教は子供達には伝えて欲しく無い。
ヤツラは潰す。

そのためにも紙を大量に作り、同人雑誌と童話だ。

まずは子供から攻めるか・・・。

手始めに「シンデレラ（エレオノール）物語」だな。

ネタとしても最高だろう。童話が軌道に乗ったら次はアンソロコミ
ックだ。

コッチはR20ね♪

ヨッシャ、ブリミル教を潰す。

こうしてタロウのハルケギニア征服物語は始まった。

見てろ~~~~~！！ロマリアのクソ坊主うう。

異端審問（後書き）

タロウがキレました。

次回から新章、タロウのオタクでハルケギニア征服大作戦の開始です。

まずはお子様からね♪（前書き）

ロマリア氏ね氏ね運動展開中です。

まずはお子様からね♪

タロウです。

ロマリアから帰国してからオレはすぐにワルド、マチルダ、シエスタ、ティファニア、

カトレア、そしてワルドの妻、エレオノールの七人で会議を開いた。言うまでも無い。

ブリミル教を潰すぜ大作戦の提案でーす♪

まずはお子様から攻めましょう。

この世界にはブリミル神話の話しか無い。

そこにブリミル教の話ばかり聞かされた子供はブリミル第一主義となる。

異界の童話は当然伝わっていないが、アレは素晴らしい話ばかりだ。アレをこの世界風にアレンジして、童話の絵本を作れば絶対に子供に受ける。

試しにエレオノールをイビツたシンデレラ物語を絵本にして見て、孤児院の子供読ませた。

例外なく子供はエレオノール可愛そう。マチルダやティファやシエスタは酷いと言いつ出した。

コレにはさすがに慌てて、アレはエレオノールさんを立ち直らせるための作戦なのよ。

お子様の皆様、理解して♪とゴマをする有様。

コレでは妻が不憫なので、エレオノールの名前や妻の名前は一切変更。

原作通りのシンデレラとして作り直して見たら、大うけ。

絵本の技術は前世からのパクリだが問題は無いだろ。

売り出すのは「シンデレラ」「白雪姫」「赤頭巾ちゃん」の三作から始める事にした。

この作戦には、メンバー全員の協力もあり、数日で試作品完成。

読ませて見ると、女の子の大半は大喜び。

男の子にはイマイチか・。

で、考えたのが金太郎です。

あのデザインは異界でもウケルと思ったのだ。

唄も添えて読み聞かせた所、男の子にも大受け。

よって、この四作をトリスティン王国経由で

ハルケギニアのきまぐれヴィーナス傘下の店から売り出す事にしたのだ。

工場はラ・フォンテーヌに設置。

雇用も促進出来て土地の民も大喜びです。

結果、一日で完売。

余るつもりで余裕を持って売り出したのだが、一日持たなかったとか。

各地からもう無いのか？と店を壊す勢いで騒いでいるそつだ。

コレなら売れると思い、十倍規模で印刷。

それでも数日で完売だった・。

余程飢えてたのですね。ハルケギニアの民は。

「売れたね。みんな。」

「もう紙が無いのです。」

そつ、かなりの量の紙を作って挑んだのですが、足りなくなりました。

そこでギーシュやモンモンをしばらく紙増産要員に回し、絵本の増産に励む事にしました。

こうして絵本を売り続けた所、ロマリアのクソ坊主の教義を子供は

誰も聞かなくなり、

坊主は無能の烙印を押されロマリアに叩き返される事態が続出。
ロマリアが販売元がオレだと知るとまたも異端審問とか騒ぎ出したので、

「知るか！ケンカなら買うぞー！ごるああああ。」

と返事したら、文句言わなくなったとか。
ヘタレが。

キツイ言い方してるけど、坊主なんて托鉢して暮らせればいいのです。

所詮、墓守と死人が出た時しか役立たない生き物です。

日本でも法人税免除なんて甘い事せずにガンガン糞れと言いたい。

坊主なんて、修行時代以外は遊んで暮らしているもん。

ウソだと思っなら銀座とか見てれば分かる。

高級スナックのお得意さんは政治家、土建屋、坊主がお得意さんだぜ。

坊主は質素に暮らせ。ですぞ。

それがイヤなら働け。

ハアハア。

いかに興奮した・・・。

坊主殺すなら、刃物よりは兵糧攻めが利くと言うのは本当ですね。
良クラ・フォンテーヌの工場にロマリアの刺客が来るそうです。
放火とか放火とか嫌がらせとか、異端審問だとか・・・。

もうウチの領の間人は誰もブリミル教は信じていません。

ラ・ヴァリエール領もブリミルは信じていません。

カトレアも治せず、エレオノールも嫁にも行けなかったから。

そして、何時の間にかヴァリエール家の教組に祭り上げられていたらしいです。自分。

絵本の販売は順調です。

ハルケギニアの子供は何時の間にかイーヴァルディの勇者の話より、金太郎とか白雪姫、モモタロウがヒーローやヒロインとなっていました。

「……」

「タパサ、いや、シャルロットさん、無言で立たないで。」

「……キンタロウの本が読みたい……」

「ハイハイ。分かりましたよ。コレですね？」

「……ありがとう……」

タバサもお気に入りがキンタロウに変わってしまったようです。次は大人を虜にしましょ♪

ロマリアよ。

お前の国はペンペン草も生えなくしたるぜええ。

ワッハハハハハハハハハハ♪

タロウはロマリアにプツン来たようです。

まずはお子様からね♪（後書き）

タロウはプッスン来てまーす♪

タロウの暗躍（前書き）

タロウが燃えております。

タロウの暗躍

タロウです。

このハルケギニアに召喚されてから初めて燃え上がっております♪

いえ、正直、戦争とかには興味無いのです。

ですが、自分の作品に異端審問とか言われたらいい気分しませんよね。

そりゃR18なのは承知していますが、他人に迷惑かけなければいいじゃネ？

硬いのは男性のアレだけでいいのです。

さてロマリアはいい感じで、日干しになりかかっておりますが、滅び去る瞬間までは手抜きできません。

何せ原作では一番手強い相手でしたから。

アニエスの故郷、タンゲルテールを殲滅したのもロマリアの手ですからね。

そう言えばアニエスって出ましたっけ？この話で……。

表向きはバトルに関わっていないから縁は無いですよね。

メンヌヴィルはアルビオン戦で逝ってしもたらしいし。

コルヴェ先生は絶対に殺させません。彼は我が領に無くてはならない人です。

さって第二段です。

次はR15程度で、紳士淑女のための小説を発行ですよ♪

ジャンルは幼児モノ、BL、ハーレクインロマンスの三弾です。

ワルドに幼児モノを読ませたら鼻血出して悶絶してました。

ツボに来たらしいですな」

BLは妻全員に感想聞くと、続きはどうなる？と胸倉を捕まれてしまいました。

ハーレクインロマンスも同様。

もちろんR15ですから露骨な描写はありません。

ですが、それ以前はかなり詳しく、経験の無い子供には鼻血悶絶は間違いナシです。

さ、ロマリア壊滅の始まりです」

「ムホホホホホ」オレは今最高に乗っているぞ〜〜〜!!」

「アンタ、頑張つて」

「タロウ様、早く続きを。」

「お兄様、待ちきれません。」

「先生、ボクで出来る事なら何でもします。いまならロマリアに攻め込む事も厭いません。
ですので、続きを早く。」

「タロウ様、ハーレクインロマンスは素晴らしいです。どうか続きを・・・」

何か皆、続きが読みたいらしいですね。

掴みは十分手ごたえアリと見ました。

ですが、発売は最低三巻セットでと言うのが自分の自論です。

余裕が出来たらフライデイみたいな絵の週刊誌も作りたいですね。

何にしてもロマリア潰すのが先決。
ブリミル教なんてクソ教義は潰すのだああ。

召喚された当時は、こんな世界にするつもりはまったくありませんでした。

ただ、自分は平穩にヲタして生きていたかっただけなのです。
ですが、世界はそれを許しませんでした。

もういいや、どうにでもなれ！と気づいたら嫁が四人。

弟子二人、同士が一人。縁者多数ともうこの土地から逃げる事は不可能です。

不可能なら、死ぬ瞬間まで楽しんで生きないかね」

さて、新小説は三巻揃った段階で一斉にハルケギニア全土で発売しましたよ。

モチロン、ロマリアには売りません。

欲しい人は他国で買ってね」残ってたらの話ですけど。
売れ行きは絶好調です。

R15に抑えたおかげで、先進的な市民団体からのクレームも異端審問もありません。

来たら潰しますけど、何か？

「・・・・・・・・・・」

「シャルロットさん、怖いから鼻血出しながら後ろに無言で立たないでください。」

「このBLとか言う小説の続きが読みたい。早く出して。」

タバサの手には、BL&ハーレクインシリーズの三巻セットが抱きしめられてた。

「もう少しお待ちください。随時続刊を出しますから。」

「・・・分かった。楽しみに待つてる・・・」

タバサもとい、シャルロットはスタスタと足音も軽く立ち去って行った。

何か背後に来る時は気配も足音も出さないのに・・・。
アレって趣味??

そうしてたらギーシュが・・・。

「先生、ボ、ボクはもう耐えられません。早く次を出してください。」

どうやらギーシュは少女小説にハマったらしい。

おい、モンモンはいいのか?と聞いたら・・・。

「もういいのです。彼女は新しい世界に目覚めました。ボクも新しい世界を目指すのです。」

「同士、ギーシュ君よ。キミもか。」

ワルドがギーシュの背後から湧き出て、ギーシュの肩をガシッと掴んだ。

「ワルド、エレとの仲はいいのだろ?」

「モチロンです、先生。ですが、彼女も新しい世界と現世を楽しんでいるのです。」

先生の頭脳にはどれだけの新しい世界があるのですか？

ボクは先生と知り合えて本当に良かった。家族も出来、仕事も絶好調。

そして趣味も増え、言う事ありません。ですから、先生。

次の新刊を早く書いてください。待ちきれません！！」

「待て待て。お前等は小説の楽しみ方を知らぬ。小説とは読んで終わりでは無いのだ。

読んだら、脳内で色々と話の行方を楽しみ、自分でも妄想の輪を広める。推理する。

考えるのだ。新刊が出るまでにはどうしてもブランクがある。

だからその間を無意義に過ごさず、自分なりの推理を書き残すのだ。それが未来の新刊への繋ぎにもなるし、場合によっては、新しいジャンルの誕生にも繋がる。

そしてその話を他人に読ませる事も出来るのだ。読むだけでは無いのが小説の奥の深さよ。

ワールド、ギーシュ。キミ達なら出来る。二次推理小説を書くのだ。」

「「せ、先生。自分達が間違っていました。今から早速、小説の推理を深めて参ります。」」

なんかヤツラは見事にハモってたな。

パソコンが普及してたら、間違いなく二次SSを書いてるだろう。さすがにゼロ魔はこの世界では書けないけどな。

モンモンはBLにドツプリとハマったらしい。

ギーシュはそれを見て悲観してたが、新しい世界に目覚めたみたいだ。

ギーシュ、生きてたらしい事もあるさ。

ワルドとエレは良好みたいだ。

彼等は趣味と生活の使い分けがキッチリと出来てるらしい。

さすが大人だな。

特にエレオノールは後が無かったから、趣味で生活を失う愚行はしないらしい。

その頃のロマリア。

「どうして我等の有難い教義を誰も聞きに来ないのだ？

そしてハルケギニア全土のロマリア教会が閉鎖に追い込まれたのは何故だ？」

「タロウ・ヤマダの出巻た新しい小説を皆が読んでるためです。既に子供から老人まで熱中してるとか・・・。」

「我が有難いブリミル経典よりもタロウの小説がイイのか？」

「はあ、ブリミル経典は既に脳にこびりつく程、ハルケギニアに浸透しておりますが、

さすがに古さが否めません。

タロウの小説は色んなジャンルがあるらしいのです。

ロマリアには売り出しておりませんが。」

「ムムムムム、それがどうした。

このままでは我等の明日のパン代も無いのだぞ。何とかしろ。」

「そう言われましても、タロウの領地、ラ・フォンティーヌ領の警備は厳しく、

ロマリア関係の人間は一人も生きて帰った者はいません。手のものも底を尽きました。」

「困ったですねえ。」

ロマリアに明日のメシ代は入るのか？
このまま餓死するのか？

続きを待て。

タロウの暗躍（後書き）

ロマリアが干上がっています。

史上最低のキモ男(閑話です。)(前書き)

感想から思いついた閑話です。

史上最低のキモ男（閑話です。）

タロウです。

現在、また困っています。

何故、キュルケとモンモンがココに居るのですか？

正直、もう原作なんかシラネ！のオイラですが、まとめて二人もとは。

そりゃ好みには入りますよ。モンモンもキュルケも。

ですが、限界なんです。

ホンマに。

作者もオイラも最低なのは理解しています。 >感想ありがとうございます ♪

もうヤケとは思いました。

でもまとめて二人なんて、あんまりです。

「タロウ様、いいではありませんか？既に四人の妻も居るのです。あと二人くらい頑張ってください」 >モンモンです。

「ダーリン、わたしね、勘当されてしまったの。

もうツエルプストーでは無いただのキュルケなの。

学園も退学する事になってしまったの。だから貰って」 >キュルケです。

「まだ増えるのかい？まあいいけどさ。精々稼いで頑張っておくれ。

「タロウ様、私は多分三番目でいいのです。ですから頑張ってください

さい。」

「お兄様、私を忘れないでください。」

「タロウ様、大丈夫ですよ。水の精霊様も居ます。励んでください
ね。」

ウワ~~~~~!! どうしたらいいの？

妻も諦めて応援しとるし、貰うっきゃ無いの？

「ギーシュ、お前、モンモンはもう諦めたのか？」

「先生、自分には先生の作品を極めると言う重大な使命があります。
今は現世の女性より未来の嫁です。モンモランシーの事は先生にお
任せします。」

ギーシュは現在オレの作品の二次SS作りに没頭している。

原作を読み、それを自分の脳内でアレンジして、新たなキャラを生
み出そうとしてる。

いい作品に育ったら、本にしてやるからな。ガンバレ。ギーシュ。

「モンモランシー嬢、家の事はいいのか？」

「ええ、タロウ様。だってこの家には水の精霊様もいらっしま
す。」

私が嫁いでも何ら問題ありません。アレでしたら実家はギーシュ様
に差し上げても結構ですわ。

私はこの家の妻として収まりたいのです。素晴らしい環境ですもの

へ」

何かモンモン、実家を見限つたらしい。

ギーシュは四男だから、婿ではなく養子として引き取らせる予定とか。

そしてギーシュド・モンモランシとなる事も決定とか？

ガンバレよ。ギーシュ。

それにしても六人か。

既に日替わり嫁だぞ。

どこのギャグだ？

オレは休みナシで、嫁は週一。

向こうは元氣バリバリなのに、オレは疲労の局地。

長生きは出来ないだろうな・・・。

そしたら空気読めない精霊が出てきやがる。

「タロウよ。心配は無用。お前は生まれ持った寿命が尽きる日まで我がお前の

身体の疲労も病苦もすべて取り除いてやろう。」

「『『『『『水の精霊様、タロウ様をヨロシク』『』『』『』」

嫁六人でハモリやがった。ちくしょ～～～～！

責任取りやいいのдар？

六人とも幸せにしたるわい。

頑張つて小説書いて、フュギア作つてロマリア潰してやるわい。
稼ぐぞ～～～～！！！！

こうしてタロウは最低男の異名を後世の人間から貰ってしまった。

史上最低のキモ男（閑話です。）（後書き）

六人の嫁持ちとなったタロウの苦難の日々の始まりです。
BR様の感想、助かりました。

おかげで踏ん切りが着き、タロウを最低男に出来ました♪

ブリミル教の最後（前書き）

ついにブリミル教が解散します。

ブリミル教の最後

タロウです。

最低男です。

見境なしとかも言われてますが、ナニか？

昨日の嫁は誰だったか？最近はやアファヤなのです。

疲労の局地に達して倒れてしまえば楽なのですが、

水の精霊が倒れる寸前になると、回復させやがるのです。

気持ちはゲンナリしてるのに。

モンモンも家に馴染んだのか、他の嫁と仲良くしています。

キュルケも学園で見せてたアクの強さを潜め、皆と仲良くしています。

キュルケがウチでバイトしてたのって、学園の学費を仕送りして貰えなくなったからとか？

何でもゲルマニアの大貴族に嫁がされそうになり、絶対にイヤ！と言いつつため、

実家からも縁を切られたとか。

それも正式に。

ま、ウチの売れっ子でもありましたし、学費とか心配せんでもいいから、学園に帰れと言い、

学園にはウチから通っております。

原作でもサイトの尻を叩いてたいい子でしたからね。

キュルケもモンモンも。

もう嫁は増やさないぞ！と心に誓っているのですが、

嫁連中は次は誰か？と賭けをしてやがります。

そこまで節操は無いと思うのですが。

それに自分、口説いたのって・・・。

いないぞ。

皆、押しかけ女房ばかりだああああ。

ま、いい子ばかりだからいいけどさ。

唯一、自分から誘ったのってマチルダだけ。

D T 続けて三十年、速いの薄いの短いのっ♪> 某筋肉男の歌風に。

もういい、最低だろうが、嫁が百人になろうが、オレはこの地で生きる！！キリッ！

そついきり立ってたら、嫁六人が傍に来て「当たり前です。絶対に逃がしません。」だよ。

トホホホ・・・。（・・・・・）

その頃のロマリア・・。

「腹減りましたね。教皇様。」

「言うな・・。そう言えば前にパンを食べたのって何時だった？」

「もう数日は食べていないかと・・。」

「周囲に人の気配がしないのだが・。」

「皆、ロマリアから脱出しました。既に残っているのは我々だけで

す。

後はカラスとかネズミ程度でしょう。」

「どうしたらいいのだろうな？」

「もうブリミル教を捨てましょう。このままでは、餓死するのみです。

無駄死にです。それよりは、タロウ・ヤマダ殿に下って、ブリミル教を捨てると宣言しましょう。

元々は彼を怒らせたのが今回の原因です。」

「そうだったな……。手遅れかも知れぬが、死ぬよりはマシじゃろう。

生きてる教会関係者よ。既にブリミル教は終わりだ。

ロマリアの持つ権限はすべて手放し、タロウ・ヤマダ殿に謝罪に行くぞ。」

「「「オオオオオオオッ。」「」「」

ブリミル教はこうして解散してしまいました。

既に聖地とかエルフなんて斜め上に消えてしまってたのです。

人間、腹が減るとロクな事にはなりません。

ロマリアはその後B L関係を好む輩が増えて、腐女子の聖地となるのは後の時代の事。

ブリミル教の最後（後書き）

兵糧攻めに遂にロマリアが屈しました。
BLの聖地になるのは既定ですよね♪

プリミル教の救済（前書き）

潰しただけで放置は惨いですよね。
ですので今回は彼等を救済します
♪

ブリミル教の救済

タロウです。

勝利しました♪

ついにブリミル教を潰したのです。

いや~~~~♪快感ですね。

六千年続いたンコ宗教を潰せたのですから。

それも暴力も戦争手段も用いずにです。

まさにペンは暴力にも勝るですよ。

さて、潰したはいいけど、どうするべ??これから。
要は一つの宗教に凝り固まってたから腐敗した訳です。

ココは日本式の八百万ヤオロスの神様形式にするべきですね。

宗教は自由。

そして宗派も自由。

だけど非課税とかはナシ。

坊さんもしっかりと税金を納めるのが国民としての義務。
特に坊さんの申告は毎年キッチリとする事。

これが出るならブリミルでも何でもヨシ!です。

そして坊主は軍事力や暴力行為は一切禁止。

日本のオウムみたいなのは、即刻、殲滅ですよ。
大体変な宗派は大抵、アノ国絡みでしたからね。
どことは言いませんが、ブラ下がっている国の事です。

脱線しましたが、今、目の前にロマリアの連中が自分に土下座して
るのです。

それにしても痩せましたねえ？どうしたのかしらん♪

「タロウ・ヤマダ様、ロマリアの教皇、聖エイジス32世、ヴィッ
トーリオ・セレヴァレです。」

タロウ様に異端審問の疑いをおかけした事を深く反省し、二度とこ
の様な事は致しません。
どうかお許しを頂けませんか？」

「ハ？自分は別にロマリアさんにケンカとか戦争は仕掛けていませ
んよ♪

ただ、自分の趣味を全開にただけです♪許すとか許さないとか意
味分かりません♪」

「お怒りはごもつともです。」

もう私達もブリミル教を解散させました。市井の市民となり、労働
に汗を流す覚悟です。

これまでの無礼を許して頂き、何とかこの世界で生きさせてくださ
い。」

もう本当にアレが土下座してるのですよ。

自分、マゾの趣味はありませんが、快感ですね。

さつて、自分も土下座までして謝る人間に追い討ちかける程、悪人ではありません。

自分は彼等が生きていける方法を模索して見ました。そう言えばジュリオとか言うイケメンもこの場に居るよな。痩せてガリガリだけど・・・。

「分かりました。自分も貴方達がココまで謝罪してるのに、何時までもグダグダ言うつもりはありません。

ですが、このままでは貴方達は餓死するしか道も無いでしょう。今までロクに勤労した事も無い訳ですから。

そこで一つだけ、貴方達に提案をします。

まず、これまでの栄光を忘れ、働く意欲がありますか？」

「「「モチロンです。もう不労収入はコリコリです。」「」」

「良い返事ですね」でしたらいい提案があります。

幸いにも貴方達は世に言うイケメン、ハンサム揃い입니다。で、自分ですね。BL小説と言うのを書いてるのですよ」

「聞いております。男性同士の恋愛模様を描く本だとか。」

「なら話は早いですね。貴方達は私の経営する資本下に入る気あります？」

「どう言う事でしょう？」

「各地にある居酒屋とは一線を画した飲み屋や喫茶店の従業員として雇用したいのです。」

「働けるのでしたら、どんな苦勞でも・・・。」

「ではお話します。その前に……。シエスタ、彼等に美味しいご飯を出してあげて。」

「畏まりました。旦那様♪」

「お腹が空いた状態ではマトモな判断も出来ないでしょう。まずはご飯を食べて頭をリフレッシュさせてください。」

「あ、ありがとうございます……。」「>一同。

追い出すならともかく雇用するなら、キッチンとした頭で聞いて欲しいもんね。

まずは腹ペコ坊主連中にメシを食わせ、それから話をした。

要はBL小説を地で逝ける酒場や喫茶店の従業員として雇用するのだ。

顧客は全員女性。

中にはカマーな人も居るだろうが。

基本的に、店に泊り込み、衣食住は保障。

頑張ればその店のオーナーに登用も可！

後の無い彼等の事、断る訳もなく、全員雇用となった。

指導はウチのマチルダや妻々ズがメイン。

オレの小説をドップリと読んでいるから、彼女達の理想のBLに育てさせた。

そしたら本当にアレになってしまったのだ。
ほら、ムシヨの方達みたいだね・・・。

妻ゝズの皆様、大喜びですよ。

まずはトリステインで試験的に店を出し、少しずつ拡大して行く事にした。

店の名前？

「クロ執事」ですよ。

漢字で書くと不味いのでカナでね。

基本はメイド喫茶と同じ。

「お帰りなさいませ、お嬢様。」です。ハイ。

例え、お年を召された昔のお姉様でもお嬢様です。

これは徹底させました。

店の評判は好評です♪

次はアルビオンにも出店しようっと♪

主人公はB L酒場を作り出した。

プリミル教の救済（後書き）

執事酒場誕生しました。
イケメンの有効活用です。

タロウ、矯正する。(前書き)

ツンデレ二人を矯正します♪

タロウ、矯正する。

タロウです。

日本の初夏は暑いらしいですね♪と、作者は申しています。
さてイケメン氏ね！の皆様。

ロマリアのイケメンズは見事に有効活用出来ました。
妻ゝズの指導も良かったのか、女性全員お金♪
愛するモノは同僚のお尻となったのです。

NO1はジュリオですね。

原作でもイケメンでしたが、コチラでもブッチ切りです。
もう少し余裕出来たらアイドルユニットでも作るか？

ま、ヤローの活用はこの程度でヨシとします。

オラは女性偏重の人間です♪

さて、久しぶりに学園に出かけました。

たまには魔法教師のデモンストレーションをして欲しいとの事。
小説も事業も軌道に乗ったので、たまにはいいでしょ♪

学園の生徒もウチの店でバイトしてる子も沢山いるので、
殆どが顔見知りです。

でも今回は違いました。

そう、新入生が入ってたのです。

いやゝ若い子はいいいね。

ピチピチと言う言葉がピッタリします。

そう言えば妻ゝズのティファニアも今年から学園に入る事になりました。

まだ若いんだから、見聞は広め、友達を作るべきですからね。
キュルケもモンモンも居るので、色々と助言してくれるでしょ。

そしたらさ、居るのですよ。

ウチの妻ゝズのティファニアにイチャモン付けるKYな貴族が。

何か彼女のご立派な二つの山に立腹されたいのですが、それをゴチャゴチャと言うアホが居たのです。

大概の事は放置しておくつもりでしたが、そしたらどこかのお姫様らしいヤツが異端審問に掛けるとか騒ぎだしたのです。

「失礼、このティファニアの兄でもあるタロウ・ヤマダと言いますが、

今、貴女はティファに異端審問に掛けるとか言いました？」

「ええ、モチロンですわ。私はクルデンホルフ大公国の娘、ベアトリス・イヴオンヌ・フォン・クルデンホルフと申します。この汚らしい二つの胸を異端に掛けるのは当然ですわ。」

「ほほう。たかが子供に異端審問の権利があるのですか？」

「子供ではありません。私はクルデンホルフ大公国の姫です。たかが魔法学園の生徒や教師如きに私に意見するとは、いい度胸ですわ。」

このガキヤ〜〜！ツンデレしか脳の無い分際で、ティファに異端だと？

自分の気に入らないヤツはこうして潰して来たのだろう。

ブチッと潰してもいいのだが、今は教師。

冷静に指導せねば。

「えーと、異端審問と言うのはもしかしてロマリア関係でしょうか？」

「オホホホ。モチロンですわ。私の国ではブリミル教司祭も居ます。」

異端審問の書類もありますわ。」

コイツ、本国のロマリアが潰れたのも知らない田舎モノだ。
放置しとくと危険と判断。

ヴィットーリオを呼び出し、ヤツの書類の吟味をさせる事にした。

「失礼、ベアトリスさんですか？

貴女の持つ書類をロマリアのヴィットーリオ元教皇が吟味したい
そうです。」

「ヴィットーリオ様がですか？・・・えーっと・・・。」

急に歯切れが悪くなりやがった。

やっぱし勝手に実家から持ち出したのだな。コイツ。

「タロウ様、お呼びでしょうか？」

「ああ、ヴィットーリオ。

この令嬢が持つ異端審問関係の書類を吟味して欲しいのだ。
偽者が、もしくは勝手に持ち出したモノかをね。」

既にヤツは真ッ青。

教皇を呼び捨てにしているオレに脅えてる様子だ。
だが許さないぞ。ティファを異端に掛けようとしたのだからね。

「この書類は既に過去のモノです。ましてやブリミル教は解散させ
ました。

もうードニエの価値もありません。」

「そうか。ご苦勞だった。店に帰ってヨシ。後で出張費を加算して

おく。」

「ありがたき幸せです。タロウ様。」

元教皇が立ち去ると、オレはベアトリスを睨み、話はじめた。

「ベアトリスさん、お聞きの通りです。

ロマリアやブリミル教は既に過去の遺物です。

そしてその書類には一ド二エの価値もありません。

その書類を盾に私の家族に異端審問を掛けようとした根拠は何ですか？

場合によっては貴女の国を滅ぼすのも厭いませんよ。」

ベアトリスは真っ青から蒼白となってしまった。

適当に同級生の気に要らない女を痛めつけて

学年での地位を上げようとしてただけなのだ。

それが自分の祖国を滅ぼす??

冗談では無いと思ったが、

教皇すら呼び捨てにしているこの人物が只者とは思えない。

どうしたらいいの??

「も、申し訳ありません。私の思い違いでした。

どうかお許しを・・・。」

半泣き状態だが、まだ許す訳にはいかないね。

オレ自身、異端には頭に来た思いもあるのだ。

今後、二度と異端審問の言葉がこの世界に出ない様に徹底的に潰すべきだと判断したのだ。

「いいえ、貴女は私の家族を自分の思慮の足りなさで異端審問に掛

けようと思いました。

もし、貴女が逆の立場なら、相手を許せますか？たかが謝罪した程度で。

ロマリアもある手違いから、今は私の配下ですよ。」

貴女自身には興味ありませんが、貴女の祖国には徹底的に苦情を申し上げます。

宜しいですよね。」

既にヤツの顔は土気色。

だか知った事じゃねーぞ。

ティファだって逆の立場になりかけたのだ。

取り巻きがヤツを引きずって連れて行くと、オレはマチルダを呼び出し、

クルデンホルフ大公国の王にチクチクと苦情を申し立てた。

結果、ヤツは自主退学し、国に強制送還。

ヤツの国からは、多量の金貨と宝石、

そして国を上げての謝罪文書が王の名入りで届けられた。

そして二度とブリミル教の名で異端審問は出さないと

ハルケギニア中にヴィットーリオの名で通達させた。

ティファニアには悪いと思ったが、

こう言う前例は徹底的に潰すべきと思ってたのだ。

原作ではティファが許してウヤムヤにしてたが、この世界じゃオレが居る。

別に戦争をする訳では無いが、潰すべき悪例は徹底的に潰すべきと思うのだ。

例え貴族のお嬢様の戯れでもね。

その後ベアトリスはどこかの国の貴族の嫁に行かされたとか？

ま、生きてればいい事もあるでしょ♪

s i d e ルイズ

な、何なの？アレ。

確かクルデンホルフ大公国ってトリステインの同盟国よね？
でもタロウってどうなってるの？

ちい姉様はお嫁に行く、エレお姉様はワルド様のお嫁さんになる。
お母様にも平気で勝てる恐ろしいメイジ。

元はワタシの使い魔だったけど、今では正式に解除し、ピカがワタシの使い魔。

彼の指導で、系統も分かり、今では普通のメイジとなれた。

それは感謝してる。

でも、何なの？アレ。

確かロマリアのブリミル教の教皇だったわよ。ヴィットーリオ様って。

彼を呼び捨てに出来る人間なんてハルケギニア中を探しても誰も居なかったのよ。

それが・・・。

一度お母様に相談するべきね。

ルイズの中ではオレは今でも使い魔なのだろう。

ヤツの目を見てたら分かる。

まだ見下す癖は治らないみたいだ。

今度カリーヌさんに矯正して貰うか・・・。

カトレアから言っても逆効果だろうしね。

この世界に来て一年経つが、まだ自分が住むには色々辛い世界だ。
もう少し模索してみようっと♪

タロウ、矯正する。(後書き)

次回はルイズ矯正編です。

ルイズ矯正スタート♪（前書き）

今回からルイズの矯正編です。

ルイズ矯正スタート ♪

タロウでっす ♪

今、ヴァリエール領に遊びに行く途中です。

隣にはカトレア、ワルド、エレオノール、そしてマチルダです。

もちろんコルヴェール式自動車の最新型。

何と！！リムジンですよ ♪

本当なら後ろで踏ん反り返りたいのですが、運転出来るのがオラ一人。

後ろでは嫁二人とエレが宴会しております。

ワルド？隣で後ろを羨ましそうに見てます。。

そのウチにワルドにも運転を仕込まないとね。

「タロウ様、この自動車は素晴らしいですね。

乗り心地は最高ですし、広いし速い。凄いですわ ♪」

「そりゃ良かったですね。オラは運転手ですから・・・。」

「頑張ってください ♪」

町を除けば対向車も全然居ない長閑なトリスティンです ♪

居眠りしないように、ワルドを適度にイヂめてルイズの実家に向かいます。

いえ、彼女が少し心配なんですよ。

未だに貴族だ何だと威張る兆候が強く、このままではベアトリスの二の舞です。

身内ですからね。彼女は既に。

何とかしてあげたいと思います。

他人ならベアトリスみたいに叩き潰して放置するのですが、身内では出来ません。

話变りますが、既にロマリアはガリアに編入されています。ジヨセフにロマリアを何とかしてくれ！と頼んだのですよ。教皇は既に庶民ですしね。

しかしどうしたモンでしょう・・・。

ヴァリエール家に着くと、カリィ又さんと公爵が待っていてくれました。

「お久しぶりです。ヴァリエール公爵、カリィ又さん。」

「カリィ又さんなんて他人行儀はよしてくださいね。媚殿♪」

「そうですよ。貴方♪」

「わ、ワカリマシタ。お母様、お父様♪」

「む、息子よ~~~~~!!」

なんかヴァリエール公爵のツボに来たらしいね。
男の子が余程欲しかったらしいです。

茶番はこの程度にしておいて・・・。

「お父様、お母様、本日来た理由ですが・・・。」

「ウム、分かっておる。三女、ルイズの事だろう。」

お前がロマリアを本で滅ぼした事は良く理解しておる。

まさか本で滅ぼされるとは思わなかったが、事実は認めないとな。
我々も魔法のみに頼らず、庶民や国とも手を繋ぎ、国を盛りかえさねばならぬ。」

「その通りです。自分で潰しておいて言うのもアレですが、
国を攻めるのには暴力も魔法も要らないですよ。」

庶民の求める娯楽や仕事を考えて実行するだけでいいのです。
それを分からず、耳や目を塞いでたら、時代に取り残されてしま
います。」

先日も我が妻、ティファニアを異端審問に掛けようとしたクルデン
ホルフ大公国の姫を潰しました。」

アレもルイズと似た境遇の娘でしたが、縁も無い人間。徹底的に潰
しました。」

ルイズもいつか自分以外の人間に潰される可能性もあります。」

自分の目の届く範囲なら助けられますが、もしどうしても無い事
態になったら、助けられません。」

何とか今の内に彼女の精神の歪みを矯正するべきです。」

「タロウ殿、わたしの教育が間違ってたためエレオノールの事でも
迷惑をおかけしました。」

本当に心苦しいのですが、ルイズも何とか救って頂けないでしょう
か？」

「身内ですからね。今からなら何とか出来ると思います。
そこで・・・。」

「分かっていますわ。ネ？貴方♪」

「ウム。ルイズの矯正に関する事で、タロウ殿には一切の口は挟まぬ。

ルイズを徹底的に矯正してくれるなら、死なない限り文句は言わぬ。

」

「了解です。では、自分の矯正に一切口を出さないとお約束して頂けるなら、彼女の歪みを徹底的に取り除きます。」

「「お願いします。タロウ殿。」」

何とか公爵本人からも言質取れたから、徹底的に潰して矯正しますか♪

でも巻き添えも一人は必要だな・・・。

オッ♪

そう言えば・・・。

ルイズ矯正スタート♪（後書き）

どうするべ？と悩んだルイズの矯正編ですが、何とか公爵からも言質取れました。

次回からはある人物と一緒にルイズに地獄見てもらいます。
お楽しみに♪

ルイズとデブの矯正スタート♪（前書き）

ルイズとデブコリヌをロマリアの未開の土地に拉致しました♪

ルイズとデブの矯正スタート♪

タロウです。

ヴァリエール公爵のご免状を預かり、ルイズの身を拘束しました。文句言ってるみたいですが、サイレントかけてるので分かりませ〜ん♪

そして、もう一人。

哀れな子羊クン。マリコル又君です。

彼も実家ド・グランドプレを訪ね、矯正するからガキを預かると言い、拘束しました。

行き先はロマリアの開拓地です。

杖はモチロン取り上げてあります。

モガモガ煩いけど、到着までは文句は言わせません。

二人とも悪い点で貴族を受け継いでますからね。

マリコル又君なんざ、女にもてたい。でも楽したいと日本時代の自分みたいなニート思想満点です。

自分も異界に来て理解しましたが、女は守ってくれる男には黙ってても着いて来るのです。

DTを三十年も続けたオラがコチラに来て、チートがあつたとは言え、六人も妻を持てるなんざ、神様でも予想出来なかつたでしょう。

要は甲斐性なんです。男は。

ルイズにしても然り。

女性がツンツンしてモテルのは、二次SSだけです。

実際にルイズとかアスカみたいな女が居たら、金持ちの女でも無い限り、男から殴られますよ。

二人の両親には死なさない限りはナニしても文句ありませんとご免状を預かりました。

デブ君はついでです。

ルイズ一人では、もし何かあった場合、押し付けられるでしょ？アレがイヤなのです。彼は逃げ道になってもらいます。

今回はかなりドSな調教となりますので、身内は誰も連れて来ません。

ジュリオ君のみ連れて来ました。

主に彼等の話し相手としてね。

ロマリアの外れの開拓地に着いた我々は、ルイズとデブのサイレントを解く。

すると騒ぐ騒ぐ・・・。

「な、何で杖を取り上げて縛り上げて、こんな田舎に貴族のワタシを連れて来るのよ～～！！」

「そうだぞ～～！！ボクをこんな田舎に連れて来てどうする気だ？お父様、お母様に言いつけるぞ～～！！」

ルイズはともかく、デブよ。

いい年して親に言いつけるとは・・・。恥ずかしく無いの？

「黙れ～～～！！！！」

かなり気合を入れて二人を黙らせる。所詮ガキだしね。

「お前等二人の身柄はお前等の両親の許可も得ている。

まず、デブ。お前は貴族の癖に楽しよう、そして女にはモテたいと公言してるそうだな？」

「そ、それがどうした。ボクは女にモテモテになりたいんだ。」

「そのデブ体系でか？笑わせるな。精々町の売春婦に金で相手して貰うのが限界よ」

「だって、痩せれないんだ・・・」

「鍛えれば自然と痩せる。オレだってこの国に来た頃はお前と同じ体系だったぞ。

それが今はスマート&嫁六人。女にモテたいなら、鍛える。男の魅力を持て。」

「グググッ・・・」

「次にルイズ。お前は魔法を覚えたはいいが、最近増長してるそうだな？

はつきり言っておくが、この先魔法で身を立てるのは厳しい時代となるぞ。

魔法は便利な道具と同じにしかなくなる。

戦争も同じだ。情報と知識、そして平民が世界を制する。」

「な、何でそんな事が分かるのよ。」

「お前、オレがこのロマリアを滅ぼしたの知らないのか？

ナ？ジュリオ君」

「タロウ様のお仕事は完璧でした。

我々ロマリアのブリミル教会は、彼の作戦で見事に殲滅されました。一発の魔法も弾も受けずにです。まさに無血戦争でした。」

「スマンかったね。ケンカを売られなかったら、オレもキミ達を滅ぼすつもりは無かったのだ。」

だが売られたケンカは徹底的に戦わないとダメ。
でも血は流したくなかったのよ。」

「ごもつともです。ロマリアは破れましたが、死人も血も流れませんでした。」

ああ言う戦争もあつたのかと、感心してしまいました。」

「ウム。そう言う訳。ルイズ。魔法は万能では無いのだ。所詮道具なのよ。」

お前は未だに貴族とか魔法とか騒いでるが、数年したら笑いものになるぞ。

確実に。」

「あ、アンタも魔法使うじゃ無い。」

「もちろん使うよ。道具としてね」でもオレが今、一番金を稼いでるのは、ココ」

頭よ。脳みそなのよ。ルイズ。お前は今からどう生きるつもりだ？」

「立派なメイジになって・・・。」

「メイジになつても、その先はあるか？悪いがお前の爆発魔法は戦争以外には役立たずだぞ。」

その戦争も今からは無くなる。山賊にでもなる気か？」

「そんな事する訳ないじゃない。」

「でも、今のままじゃそうなるぞ。」

「う、うううう・・・。」

「さて、二人とも。話は変わるが、お前等の身柄はお前等の家からも正式に預かっている。

死ななければどうしても良いとね」

もちろん死ぬ様な事はないが、場合によっては・・・ありうるぞ。」

二人とも真っ青になった。杖は取り上げられ、ココは異国の土地。金も無いから逃げ場も無い。

「お前等二人には、このロマリアの未開の土地を耕して貰う。

道具はあるから、朝から夜まで毎日働く事。

逃げたら一日逆さづりにするからな。

万一逃げ切っても、その場合は実家から勘当される事になってる。

ウソだと思うならこの書類を見て見る。」

二人にド・グランドプレ家とヴァリエール家から預かった書類を見せる。

死ななければどの様に扱ってもヨシ。脱走して逃げて帰った場合は勘当します。

そうハッキリと書いてあるのだ。ワハハハハハハ」

「心配しなくてもメシはキッチンと食わせる。ただし、労働に応じてね。

手抜きで働いてたら、パン一切れとかもあるぞ。」

「ウソだ~~~~！そんな量じゃボクは死んでしまっうう。」

「黙れ、デブコリヌ。お前、たかが数日食わないだけで人間死ぬと思うか？」

余談ですが、実際に餓死するまでにはかなりの断食が必要です。

最低でも水でも飲んでたら二週間は持ちますよ。

十日程度でしたが、痩せようと断食した事あります。

リバウンドしてしまいました。（Ｔ―Ｔ）

「そ、そんなああ・・・。」

「心配するな。多少食わなくてもお前にはそのデブ腹がある。その脂肪で多少は生きられる。」

食べたいなら手抜きせずに懸命に働け。」

「わ、ワカリマシタ・・・。」

「ルイズもだ。お前の母上のカーリヌさんからも、死ななければヨシと言われている。」

お前の貴族とメイジ偏重の精神を徹底的に破壊するのが今回の目的だ。

デブも同じくね。特にお前はそのままでは一生、女性にモテない。商売女以外には相手にされない。それを避けるためにもお前も鍛える。

さ、時間も無い。桑を持て、畑を耕せ。ちなみに一人で畑一面耕すとパン一枚ね。」

「「ウソ~~~~~!!」」

「ウソなもんか。日が落ちるまでに最低でも畑一枚耕さないと今宵は何も食べられないぞ。」

「「イヤ~~~~~!!!!」」

見事にハモるな。この二人。

二人の畑はもちろん別々のラインで区切つてある。

土地はガタガタの石ころだらけの硬い地面。

耕すのに相当苦勞するだろうね〜
♪

ルイズとデブの矯正スタート♪（後書き）

ルイズとデブはどうなるのでしょうか？

地獄の黙示録（前書き）

ルイズが地獄に陥っています。

地獄の黙示録

タロウです。

現在、目の前でルイズ&デブが二人で必死に畑を耕しております。そりゃもう目の色を変えてね♪

杖はナシ、金はナシ。

オイラから与えられる食事のみが、ヤツラの糧なのです。逃げても西も東も分らない土地。

言う事聞くしかありません♪

オニと思う方、正解ですよ。

自分はヤツラにオニと思われるためにしているのです。ルイズはともかくデブは本当についてです。

ヤツはルイズを自分に押し付けられないタメの逃げ道です。もうこれ以上、増えるのは勘弁して欲しいですからね。

妻ゝズの皆様は、次は誰か？と賭けをしてるみたいですが、自分が持ちません。

体はともかく精神的にね。

自宅に帰ると寝室の入り口に「本日の妻、誰々」とネームプレートが張られているのですよ。

そうしないと、誰が今宵の妻なのかオラには分からないのです。

閑話は置いておきます。

「オイ、デブ。メシは要らないのか？その調子では、今日は抜きだな！」

「タロウ様、お願いです。食べさせてください・・・。」

「知らねって。食べたければ働け。手に豆を作れ。まだ腹に脂肪が

沢山あるだろ？

それがあれば数日食わなくても大丈夫♪」

「そ、そんなああ。」

「ルイズ、お前もだぞ。休むのはいいが、メシは食わせないぞ。」

「止めてよ～～！昨日もパン一枚。マリコルヌならともかく、ワタシはデブじゃ無いのよ。」

このままでは死んでしまうわ。」

「大丈夫！水の精霊様も連れて来たから死にそうになったら回復させられるって。」

安心して黄泉と現世を往復しなさい♪」

「お、オニ～～～～～～！！」

そう。何故か水の精霊も今回の旅に着いて来たのだ。

おかげで安心してヤツラを苛める事が出来る。

今回の目的はヤツラの矯正だから、かなりキツイ事をしなければならぬのだ。

ルイズのオカンのカーリーヌもこのままルイズが増長したまま成人したら、

第二のエレオノールとなるのは確実。この世界にはサイトも居ないから、将来は真っ暗よ。

そのためにも、ルイズを顔に似合った可愛い性格に矯正しないとね。顔はいいんだ。

ただ、問題あり過ぎの性格がヤツの最大の欠点。

某有名女優の超ツンデレが、芸能界から完全に干されてるだろ？

アレがツンデレの実態よ。

男は何時の時代でも可愛い性格の女性が好きなの。一部のマニアだけよ。

ツンデレがいいのは。

ロマリアの僻地に来て一週間。

ルイズはやつれ、ブタはいい具合に干しブタになりつつある。

ルイズはそれでも反抗的だから、たまにはムチでブン殴っている。ちなみに使い魔のピカはカトレアに預けた。

今は邪魔だしね。

ブタはかなり性格は矯正できたと思うが、油断はしない。

二ヶ月程度は、この地で矯正キャンプするつもりです。

「オイ、ルイズ。少しは反省したか？」

「フン。誰が。」

このバカ、遂に脱走を企てやがった。

ジュリオが捕まえて連れて来たけどね。

ズボン着せて、逆さづりにしてるのに、いい根性してるよ。コイツ尻、ひん剥いてムチでバシバシと叩くと泣き喚ぐが、数時間すると憎まれ口を叩く。

ブタのダイエツトとルイズの矯正のドチラが先に達成出来るか非常に不安だ。

「水の精霊様、コイツが死にそうになりましたら、回復だけさせてください。」

「分かっておる。タロウよ。単なるモノの管理は我に任せよ。」

「ルイズ、水の精霊様も居る事だし、安心して黄泉と現世を彷徨い

な！

幽霊さんとも沢山、お友達になれるね。ガンバレよ」

「チョッ、本当にこのままなの？」

「おおよ、垂れ流しても放置だからな。ンコも自分で食べる。」

「そ、そんなああ。」

「自業自得よ。脱走したら厳罰に処すると言ってただろ？冗談と思つてたのか？」

「だって、こんな生活じゃ死んでしまうわ。逃げなくなるの当たり前でしょ！」

「で、逃げてどうする気？ちなみに勘当になるのは確かですよ」

「だ、だってええ・・・。」

「カリィ又さんが、オレから逃げて帰りました。助けて」と言つて許す程甘い人か？」

「お父様が居るわ。」

「ちなみにヴァリエール公爵も許可しとるぜ。この書類はトリスティン王国はおろか、ハルケギニア全土で通用する正式な書類よ。そつで無かつたら、こんなムチャするもんか。」

「どうしたらいいの・・・。（泣）」

「数日、ココにブラ下がれ。死にそうになっても安心しろ。精霊様が助けてくれるから。」

「イヤ~~~~~!!」

イヤも何も自分で撒いた種だろうが。このガキヤ~~~~!!

それから本当に数日、ルイズは逆さつりのままだった。

デブもルイズの惨状を見て、絶対に脱走しません。

一生懸命働きます。。。とブツブツ言い出した。

余程怖かったのだろう。

「ルイズ、反省したか？」

「ハイ、タロウサマ。ルイズハオロカナメスデシタ。」

大分参ってるな。心も修復はしてるが、精神崩壊手前か。。。そろそろ下ろしてやるとしよう。

「ルイズ、今から下ろすが、今後二度と脱走しないと誓えるか？」

「タロウサマ、トウゼンデス。ルイズハイコニナリマス。」

「ウム。わかった。今から下ろしてやる。そしてフロに入って清潔にしる。」

今日はメシも食わせるからな。」

「アリガトウゴザイマス。タロウサマ。」

ルイズを下ろすと、フロに入れ、汚い服を全部焼却処分。
髪の毛も匂う事。フロの湯も数回は取り替えた。

明日までは休息させ、明後日から畑仕事再開です♪

デブはそんなルイズを横目に懸命に畑を耕してた。
トラウマになるだろうね。アレ見たら。

地獄の黙示録（後書き）

次回でこの話題は完結させます。
ルイズがどう矯正されるか楽しみにしてください。

ルイズとデブの矯正完了♪（前書き）

デブとルイズ編、完了です。

ルイズとデブの矯正完了♪

タロウです。

先日脱走未遂で捕まったルイズは数日の逆さづりが懲りたのか、完璧に大人しくなりました。

しかし、ここまでしないと懲りないとは・・・。

マリコル又なんざ、数日の拷問で完璧に忠誠を誓ったのに、ヤツと来たら。

水の精霊様が居てくれて助かりましたよ。

居なかったら、ルイズは壊れていたと思います。

数度の生死の往復と、精神崩壊を繰り返し、何とか従順になった二人です。

さて、どうなるか??

「ルイズ、お前の今後の目標は何だ？」

「ハイ。タロウ先生。魔法に頼らず、庶民と力を合わせ国を盛り上げる事です。」

「満点とは行かないがいい答えだね。マリコル又、お前は？」

「ハイ。タロウ様。食べる事に固執せず、節制に心がけ、父母を支える事です。」

「まあまあだな。以前よりはマシだが。今後もガンバレ。二人とも。」

「「ハイ、タロウ先生。」」

畑の開拓は大分進んだ。二人の手の崩壊と共にね。

未開地を耕すのだけが目的だから、自分達が去ったらロマリアの民に解放するけど。

拘束して二週間位経過したが、まだ完全では無い。

デブはチヨイデブまで体重も落ちた。

ルイズは、見た目は従順になった。

これからが仕上げだな。

例え見た目が仕上がっても、精神の再構築が肝心だもん。

そこで、少し裏ワザを使う事にした。

子豚クンをイケメンにし、ルイズに押し付けるのだ。

ルイズも少し改造する。

そう、チップパイをチヨイパイにするのだ。

「水の精霊様、少しお願いがあるのですが・・・。」

「皆まで言うな。我は常にタロウと繋がってる。タロウの考えは我の考え。」

「ヤツラの改造は任せよ。お前の思う通りにしてやる。」

「お願いします。精霊様。」

「ウム。そう言えば我もそろそろ名前と言う固有名詞が欲しくなったのだ。」

「タロウよ。悪いと思うなら我に名前を与えよ。」

「御意です。精霊様、素晴らしい名前を考えます。しばし御待ちください。」

「ウム。楽しみにしておく。ヤツラは寝静まった頃に改造しておくぞ。」

「お願いします。」

マリコルヌをイケメンにしたとしても、ルイズがツルペタではヤツが嫌うだろう。

だから、残念なツルペタをせめて普通のチツパイ程度にしておくのだ。

少しは顔とのバランスも取れるだろう。

エレオノールもワルドと結婚し、胸が発達したのだ。

そしたら性格も根っ子から円くなった。

やはり女性の胸は脳と繋がってるよ。

それにしても精霊様の名前か・・・。

安易なのはダメだな。ん~~~~??

♪ マリンだな ♪

「精霊様、名前を考えました。」

「おお、どう言う名前じゃ?」

「マリンと言います。いかがでしょうか?」

「ワタシの世界のある女性から思いつきました。容姿は私の脳裏にある通りです。」

「見えますか? マリン様?」

「ウム、中々良い容姿じゃの。ヨシ。我は今後単なるモノに会う際はこの容姿でのみ出現しよう。」

「そうですね。それと名前は真名となりますので、安易に単なるモノには教えてはなりません。」

「分かっておる。我が信賴するモノのみに我は名乗ろう。それはお前のみだ。タロウ。」

「ありがとうございます。マリン様。」

「ウム。我も真名を貰って嬉しいぞ。タロウよ。」

そう、マリンと言えば某パチの大ヒット機種のアレです。精霊様もお姿に変身されています。リアルで見ると萌えますな！！

おバかな事考えてたら、精霊様、もとい、マリン様に殴られました。直接脳を揺らすから気持ち悪くなるんですよ。あの方の制裁は。

「タロウ、ヤツラの改造は終わったぞ。」

「へ??? もう終わったのですか?」

「ウム。我には容易い事よ。明日ヤツラの顔を見て見る。」

「楽しみにしておきます♪」

翌朝、マリコルヌの顔を見た時にオラは噴出してしまった。ヤツの顔、マリンちゃんの相棒。そう、プレミアでしか御目にかかれない、

「サム君」そっくりになってたのだ。

「な、中々ですな。マリン様。」

「ウム、我の思う通りにヤツを改造したぞ。」

「これでヤツもモテモテになるでしょう。」

「フム。地獄を見た代償と思えばヨイか。」

マリコルヌに鏡を渡し、ヤツに自分の顔を見させる。
自分でもビククリしているわ。

「タ、タロウ様。この顔はいつたい??」

「マリコルヌよ。お前がこのたびの鍛錬に耐えた褒美だと水の精霊様が仰つてな。

お前をモテモテ君に改造してくれたのだ。どうだ?」

「素晴らしいです。まさか自分がイケメンになれる日が来るなんて・
・。」

感動で目が逝ってしまったてるマリコルヌだった。

「ルイズよ。お前もどうだ?」

「タロウ様。この双璧は・・。」

「精霊様からお前への贈り物だ。お前が魔法よりも欲しがってたモノだぞ。」

「本当にコレが私の・・・。」

「ウム。確かめて見る。」

ルイズは自分の胸を両手で恐る恐る触ってる。
そして実物と分かると・・・。

「す、凄い。掴める。私の胸を自分で掴める。今まではツルツルだったのに・・・。」

多分、虚無に目覚めた時よりも嬉しいのだろう。
ルイズも目がウルウルになってた。

「ルイズ、女性の魅力とは何だと思う？」

「美貌と胸でしょう？」

「違う！確かに外観は大切だが、それだけでは無い。
外観は精神にリンクしておる。

精神が優れた人間は外観も素晴らしくなるのだ。

お前の欠点は外観は良かったが精神が未熟だった事。

それを補うため、今回は地獄巡りをさせたのだ。

どうだった？もう一度経験したいか？」

「い、イイエ。もう十分です。」

そりゃそうだな。

地獄と現世の往復体験なんて、誰も経験したく無いだろう。

オレも本当はしたく無かった。

だがヤツ等の精神を構築するには、完璧に一度破壊する必要がある

ただ。

そのためには、色々と辛辣な事をした。悪かったとは思うが反省はしないぞ。

「ルイズ。女性の一番の魅力は優しさなのだ。

お前の姉のカトレアもエレオノールも優しさ溢れる女性だろ？

お前も彼女達に続け。

優しい女性になるのだ。

キツイ女は嫌われるだけだ。」

「分かりましたわ。タロウ様。色々辛い思いしましたもの。もう二度と昔のルイズには戻りません。」

「ウン、それでヨシ。マリコルヌ。お前はその容姿を手に入れたが、また以前のブタに戻るか？

そうしたら、オレはお前を消さねばなくなるぞ。」

「とんでもございません。せつかく水の精霊様が構築してくれた外観。

大切に鍛錬して維持します。」

「分かってたら良い。ブタに戻ったらオレが殺すからな。」

「ハ、ハイ。覚えておきます。」

こうしてヤツ等二人の地獄の毎日ボーナスGETで終わった。ルイズはカトレアには及ばないが十分なバストを。マリコルヌはイケメンの容姿を。それぞれGET出来て満足している。

「ジュリオ、お前はこの地に留まり、平民と一緒にこの畑を維持して欲しい。」

「利益はすべてお前に任せる。」

「御意です。タロウ様。」

「ルイズ、マリコルヌ。良く頑張ったな。そろそろ国に帰るぞ。」

「「ハイ、タロウ様。」」

ロマリアの地獄はこうして終わったのだ。
次回はトリスティンの家族とのご対面。
まさにビフォアアフターだな！

ルイズとデブの矯正完了♪（後書き）

次回は家族との感動の対面です♪

感動♪ピフォアフター（前書き）

某リフォーム番組風に作りました。
タロウが匠となりました。

感動♪ピフォアアフター

久しぶりの祖国、トリスティンのヴァリエール領。

今、タロウ、ルイズ、マリコルヌ。そして水の精霊はリムジンに乗って帰って来たのです。

ルイズとマリコルヌは地獄の日々を思い、国の美しさに感動してたのです。

「ルイズ、マリコルヌ。久しぶりの祖国はどうだ？」

「何もかもが美しく見えます。そして平凡な幸せがいかに尊いか実感しましたわ。」

「ボクもです。いかに素晴らしい世界を無駄に生きてたかを実感しました。」

「お前等二人は、あの地獄を生き抜いたのだ。大概の地獄はアレよりも楽だぞ。」

あ、それからな。最後に一言。以前の性格や体系に戻ったら、また強制連行だからな。」

二人はオレからの地獄のパスポートがまだ有効なのを聞き、ビクツとして。。

「ワカツティマス。タロウサマ。」

見事にハモるな。

余程の事が無い限り、アレをする気は無いが、楔は打っておかないと。

グダグタと喋っていると、ヴァリエール公爵家に到着した。マリコルヌの実家の両親もヴァリエール家で待機してる。

「ルイズ、マリコルヌ。オレがドアを開けるまでは車で待機してる。」

「「サー、イエツサー！！」」

オレは車から降りて、ルイズの両親、マリコルヌの両親に挨拶をした。

「ラ・ヴァリエール公爵、カリーヌ夫人、そしてド・グランドプレ家の皆様。

大切な御子息をお預かりしていましたが、お返する時が来ました。彼等はロマリアで、大変な試練の時を過ごし、心身共に鍛え上げて参りました。

恐らく、以前の彼等とは比較にならないと思います。新しい彼等を見てください。」

オレはそう言うと、リムジンのドアを開け、ルイズとマリコルヌを車から降ろした。

すると・・・

何と言う事でしょう。

彼等の面影は以前とまったく違い、光り輝いているのです。

ルイズは十分に育った胸を。

マリコルヌは引き締まった身体に整った顔。

そして二人とも以前とは違う、凜とした目をしてるのです。
双方の家の両親は我が子を見て、感動していました。

「いかがでしょ？ 双方のご両親様。見違えた我が子は？」

「本当にルイズか？」

「マリコルヌか？」

両家とも、あまりにも変った我が子にパニック。

ルイズはキツイ目が消え、カトレア並に優しい目となってる。

マリコルヌは、ギーシュ以上のハンサム＆見事な肉体となってたのだ。

ありがとう。マリン様♪

「お父様、お母様、ルイズは変りました。タロウ様の特訓で、心も身体も別物です。

今までのルイズとは違いますわ。」

「御父さん、お母さん、マリコルヌはタロウ様に徹底的に鍛えて頂きました。

以前のマリコルヌとは違います。今後は家を盛り上げる事に我が身を捧げます。」

二人の言葉に双方の家の家族は感動してた。

マリコルヌは以前は食っちゃ寝るのダメ坊主だったのが、今は凜としたハンサムボーイ。

ルイズは我侂が消え、他人を見下す癖も消え、悩みの種だったツルペタも解消。

そりや感動くらいはして欲しいですよ。

まさにビフォアアフターだな。

所さん、いかがですか？と聞きたくなった。

「婿殿、本当にありがとう。ルイズが本当になったのが私は嬉しくてならない。」

子供だったルイズがいきなり大人になった気分だ。」

「タロウ様、本当にありがとうございました。」

マリコルヌの甘えが消え、自力で嫁も探せる容姿になるとは。いくら感謝してもしきれません。」

「双方の家の皆様。彼等は自力で今の容姿や精神を入手したのです。自分は彼等を導いただけです。彼等を褒めてあげてください。」

「ルイズ、良く頑張った。私は嬉しいぞ。」

「マリコルヌ。本当に頑張りましたね。」

双方の家族は彼等を抱きしめ、褒め称え、労った。

オレはカリーヌさんに近寄り、

「母上、任務達成しました。いかがでしょ？」と聞くと・・・

「タロウ殿、G」でした。本当にルイズは変りましたね。」

「その分、彼女には地獄でしたが、それに見合った成果は与えたつもりです。」

「利益を得るためには当然の投資ですわ。」

「ご理解して頂き感謝します。」

新ルイズの出来には満足して頂いたみたいだ。

こうしてオレはルイズとマリコルヌの改造を達成出来た。

マリコルヌは本当についてだったが、ヤツはコレで嫁も自力で見つけられるだろう。

原作のデブみたいに変態に走る事も無いと思う・・・。多分。ルイズもサイトみたいな男を見つけれられると思うぞ。多分。

感動♪ビフォアアフター（後書き）

ルイズ改造編は今回で終わります。

ガリアにて。
(前書き)

ジョセフとの会談がメインです。

ガリアにて。

タロウです。

ルイズ&マリコルヌのビフォアフターは大成功でした。

学園に彼等を引率して行ったら女子生徒や男子生徒の目の色が変わりましたよ。

今まで嫌われ者のキモ男クン、NO1だったマリコルヌが今や女子生徒の憧れになり、
ルイズもツンが消え、カトレア並の優しい女性になり、立派な双山も手に入れたのです。

妻ゝズからルイズにも手を出したのか？と聞かれたので、水の精霊様のご加護です♪と言うと納得。

ありがとう♪マリン様。

これで最大の懸念だったルイズの性格矯正も完了です。

さて、原作をもう一度Wikkiで検索。

何か不安は残っていないか？？

ありました。

エルフです。

ビターシャルです。

蛮人です。

今まで全然顔も見えていないので、完璧に忘れていました。

ティファもエルフ耳では無くなりましたしね。

ガリアのジョセフに聞いて見ようと思います。

彼も最近は大人数になり、恐王から萌え王となったらいいです。

「ジョセフ殿、久しぶりです。」

「おお、我が友、タロウよ。そろそろ新作の小説は出るのか？」

「もう少しお待ちください。現在、新しいダンディの方のための小説を・・・」

「皆まで言うな。楽しみじゃの～～～」

ジョセフは完全にヲタの道にハマりつつありますね」

ま、平和でいいと思うのです。

原作のジョセフは悲惨な最期でしたが、彼がマトモだったら一番ハルケギニアで強い国に

なっただと思うのです。

無能なんてとんでも無い人ですよ。

何よりも頭の回転が早く、人の洞察力はバツグンです。

こう言う人間を無能とか言う時点でハルケギニアの貴族の大半は落第です。

現在のガリアは急ピッチで道路の舗装が進んでいます。

コルヴェール自動車を走らせるためなんです。

ジョセフにリムジンを見せた所、100万エキューのキャッシュで買ったのですよ。

見た瞬間にね。

そして、道路がコレでは車の傷みが激しいよ！と告げると、国として道路の建造を始めたのです。

道幅20mの広い道です。

緊急時には零戦でも着陸出来る道路。
やはり無能ではありません。

閑話は置いておいて・・・。

「ジョセフ殿、少し聞きたい事がありまして、本日は参りました。」

「何でも聞くが良い。オレはもう秘密は持たぬ。」

「ありがとうございます。では・・・。」

ジョセフにエルフとの交遊を聞くと、今もたまにモノを売りに来る
そうだ。

さすがに危険なモノは売る事は無いが、それでも色々珍しいモノ
があるとか。

ハルケギニアの他の国との交遊は無いと言う。

そこで一度エルフに自分を紹介して欲しいと頼んだ。

やはり交遊をしておかないと、将来が読めなくなるからだ。

「ウム。紹介は可能だと思うが、お前はどうするつもりだ？」

ヤツラは基本的に敵には容赦しない種族だぞ。」

「彼等に危害を加えるつもりは毛頭ありません。

ただ、彼等との交易をしたいだけなのです。」

「フム。タロウならエルフも喜ぶだろう。何せ我等の知らぬ常識を
持ち合わせた人間だからな。

お前の知識は凄い。

オレはロマリアの攻略を見て思ったぞ。

国を滅ぼすには兵は要らぬ。魔法も暴力も要らぬ。要るのは知識と経済だとな。

アレは見事だった。

一人の兵も出さず、ロマリアは滅びた。そしてブリミル教もタダの宗教となった。

アレはオレも痛快だったな。今も思い出すと大笑いしたくなる。」

「ありがとうございます。自分も独りの兵士も殺さずに平和になれたのは、

良い仕事だったと思ってます。

彼等も今は平和に暮らしてますしね。」

「ウム。そうだな。

ロマリアの教皇も今はお前の店で働いてる聞く。

あの彼等が働くとは、本当に凄い事だ。ハルケギニアからロマリアの坊主も消えた。

オレもお前を見習い、経済の強化と民衆の財政力を上げる事にするぞ。」

「ジョセフ殿を無能と言ってた連中に見せたいですね。今のジョセフ殿を。」

「言うな。過去は帰らぬ。オレも色々と無体な事をした。悔やんでもどうにもならぬがな。」

「そうですね。過ぎた時間は帰りません。過去は過去。未来に向けて道を開きましょう。」

「そうだな・・・。」

オレはジョセフに土産の新刊萌え小説をセットで渡し、ガリアを辞した。

エルフはガリアに来たら、オレの住む町に寄越すそうだと。彼等と平和に交易出来るといいな・・・。

ガリアにて。
(後書き)

次回からエルフとの交易が始まります。
国??既に許可は要らない事になってるのです。タロウは。

エルフとの貿易part1（前書き）

ビターシャルとの交易交渉です。

エルフとの貿易 part 1

タロウです。

目の前にはビターシヤルと名乗る耳の長い人が居ます。

そう、エルフです。

遂に本物のエルフと対面です。

「蛮人よ。お前がタロウ・ヤマダか？」

「いきなりアレですね？ま、そうですけど。貴方のお名前は何ですか？まさか蛮人と言う名前じゃ無いでしょ。」

「オレはビターシヤルと言うエルフだ。ガリアの王が一度お前に会えと言うので、

わざわざ蛮人の国に来たのだ。」

「そりやどうも、ビターシヤルさん、始めまして。」

蛮人のタロウ・ヤマダです。」

「そして単なるモノよ。我が水の精霊じゃ。」

オッホホホホ、さすが水の精霊様。ツボを心得ていらっしゃいます。いかなエルフでも精霊から見たら人間同様の単なるモノです。

「な、何故、水の精霊様がココに居るのです？蛮人と一緒に。」

「単なるモノよ。お前は我が友、タロウを侮辱してるのか？」

「と、とんでもございません。」

さしものエルフも精霊様には頭が上がないもんな。
エルフが長生きするといつても、精々数百年。

精霊様は何千年生きてるのか本人も把握できません。

「蛮人、モトイ、タロウ・ヤマダ殿。失礼した。
許してくれ。」

「いいえ、仲良く出来るなら有難い事ですからね。ビターシャルさん」

それからオレはビターシャルと商売の話に入った。

ヤツラは色んなマジックアイテムも扱っているが、そんなのはどうでもいい。

一番欲しいのは場違いな工芸品だ。

「エルフの生息地には、色んな場違いな工芸品があると聞いております。

もし良かったらそれを仕入れたいのです。壊れてても構いません。」

「ウム、それならば可能だと思う。しかし輸送する手段が無いぞ？」

「それならば何とかしますよ。コレでもメイジです。」

「フッフ。それならば良い。して、お前等から我等に提供する品は何だ？」

「食品、完成した場違いな工芸品、そして本です。」

「フム。食品は分かるが、完成した場違いな工芸品とは？」

「自動車と言います。馬を使わずに走る馬車です。」

「ほほう。馬の無い馬車か。そうすると馬の代わりは？」

「エンジンと言う機械が動きます。草の代わりにガソリンと言う燃料が必要ですが、エルフの方なら錬金は簡単でしょ？それを補充して頂ければ、燃料の続く限り走れます。」

「フム。そうか……。それと本とは何だ？」

「この世界では無い内容の本です。手始めにコレを見てください。」

オレはかなりドギツイR18の萌え本をビターシャルに読ませた。

Δ

「続きは？次はどうなるのだ！！」

「お気に召しましたか？」

「素晴らしい。こんな本は見た事も無い。ヨシ、オレの権限でお前との取引を認める。」

本と自動車と食品だな？何時でもエルフの国、ネフテスに持って行くが良い。

だから続きを・・・

ビターシャルは本が気に入ったらしい。
やはり一番の品物は本だな。

さって、どうやって場違いな工芸品を運ぼう・・・。

そうだ♪

オレにはルイズがいた。

ヤツの虚無のワールドドアを使えばいいべ♪

ルイズにや迷惑だろうが、使い道のある道具は使つべきよ。

こうしてタロウは場違いな工芸品を入手する手段を得た。

エルフとの貿易part1（後書き）

虚無の魔法も便利な道具扱いです。

エルフとの貿易part2（前書き）

大騒ぎになる交渉です。

エルフとの貿易 part 2

タロウです。

現在ルイズとマリコルヌを伴い、エルフの国へと向かっております。ワルドもついでに・・・。

「タロウ殿、いよいよエルフの国ですね。まさかこの様な形で聖地に向かう事になるとは。」

「そう言えばお前の母上は聖地について研究途中で亡くなったのだよな？」

「そうです。王立魔法研究所と言う所に勤務していました。」

「エレオノールが以前勤めてた所だな？」

「ハイ。彼女にも色々聞きましたが、母の勤務禄などはすべて末梢されてたと言う話です。」

「何か後ろ暗い事でもあったんだろう。」

「そうですね・・・。」

数日の旅を続け、俺たち一行は無事、エルフの国、シャイターンに着いた。

既にビターシャルから連絡が入ってたので、エルフの頭領達が出迎えてくれた。

「待ってたぞ。蛮人達よ。」

そしたら護衛の水の精霊様が出現よ」

「単なるモノよ。私の盟友、タロウ・ヤマダを蛮人と言うのか？
この地の精霊よ、我に従え！」

そしたら偉い騒ぎですよ。

風の精霊に地の精霊、火の精霊が一斉に集まったのです。

「この単なるモノ達に精霊の力を二度と振るわせるな。他の精霊よ。
このタロウ・ヤマダは私の盟友なり。」

エルフ連中は凄いパニックです」

魔法がまったく発動出来なくなる。

水は枯れる、他にも色々と支障が出てるでしょ」

「私の盟友に対する無礼ははこれでは済まぬぞ。単なるモノよ。」

エルフの皆様、顔面が土色で~~~~す」

「精霊の皆様、我々エルフの態度が悪かった事をタロウ・ヤマダ様に謝罪します。

どうかお許し願えないでしょうか？」

「知らぬ。許すかどうかはタロウに聞け。私はタロウの盟友なり。」

「「「私もタロウ・ヤマダの盟友なり。」」」

あるえええ？？水の精霊様以外の精霊様もハモっています。
面識無いのに・・・。

（タロウ、後で彼等に真名を授けてやれ。彼等も真名を欲しておる。）

マリン様からの指示となれば聞かねばなりませんね。

騒ぎが収まったら夜にでも献上しますと伝えたら、彼等大喜び。

その勢いでエルフを責めるから、エルフの皆様、土下座までしてますよ。」

回りの仲間も目が白黒してます。

「タロウ様、貴方は凄い人だったんですね？」

「タロウ様、今までの無礼。本当にお許しください。」

「一生付いて行きます。」

上からマリコルヌ、ルイズ、ワルドです。

そうしてたら、エルフの議会関係の長老全員が集まり、自分に土下座して謝罪。

二度と人間に蛮人と呼ばないから、何とか許して貰えないか？とお願いして来た。

ビターシャルも来て、自分の説明が悪くて不快感を与えた。

何とか許してください！！と謝ったので、そろそろお開きにしよう
と。」

「分かりました。謝罪を受け入れます。人間も話せば分かる対等な生き物です。

二度と蛮人などと言わないなら、今回に限り許しましょう。」

「おお、ありがたき幸せ。」

「ただし・・・次は無いですかね。」

「モ・モチロンです。タロウ・ヤマダ様・・・。」

「精霊の皆様、彼等も謝罪しました。そろそろ許してあげてください。」

「・・・分かった、では単なるモノに対する戒めを解こう。我等が盟友、タロウ・ヤマダ。」

ようやく精霊の縛りも解け、地脈の狂いから水の断線、その他魔法も使える様になり、
ようやく騒ぎも収まった。

エルフの連中は俺たちを最高の貴賓室に案内。
翌日は交易についての会議となった。
ま、いい取引は確実に出来るでしょ。」

エルフとの貿易part2（後書き）

水の精霊以外にも交遊が出来てしまいました。
人外認定ですかね？

精霊達との集い（前書き）

力才入な夜の騒ぎです。

精霊達との集い

タロウです。

昼間の大騒ぎで、すっかりエルフの皆様から人外認定されてしまいました♪

テヘ♪

さて、丁寧に挨拶され、豪華な食事やお酒を提供して頂き、我々も気分良くなりました。

が、火、土、風の精霊様との約束もあるので、皆にしばらく外に出る。

精霊様との逢瀬だから絶対について来るな。来たら命は無いと言うと全員首をコクコクとさせ、

大人しく部屋に籠ってくれました。

護衛のエルフの方にも、精霊様と会うので絶対に付いて来るな！と言うと、昼間の恐怖か・・・

行つてらっしゃいませ。と言われた。

オレは集落から少し離れた場所までフライで移動すると、各精霊様を水の精霊様にお呼びしてもらった。

「タロウ・ヤマダです。水、火、土、風の精霊様、日中は大変お世話になりました。」

「・・・良い、我が盟友となるタロウ・ヤマダよ。」「・・・」

「ありがとうございます。皆様。さて、私は水の精霊様にはアクア様と言う真名をお渡ししました。」

皆様も真名を所望とか？」

「「「ウム、我等もアクアと同じ様な真名を所望しておる。早く与えて欲しい。」」」

余程羨ましかったのですね。

目の色が変わっております。

では、真剣に考えないと・・・。

「少しだけお時間をください。安易には考えたく無いのです。皆様の永劫の名前ですから・・・。」

「「「ウム、楽しみにしておく。」」」

オレは考えた。・・・・・・・・・・・・・・・・。。。

コレだな♪

「では発表します。」

「「「ドキドキドキ」」」

「まずは火の精霊様から・・・。」

「オッ、我じゃ♪」「我等も早くううう。」

「フレイム様です。意味は炎です。」

「おお、気に入ったぞ！！我の真名はフレイムじゃ！」

「御気に召して嬉しく思います。フレイム様。」

「ウム、感謝するぞ。我が盟友タロウ・ヤマダよ。」

「そう言えばお前は火の魔法は使えておらぬな？ 我の属性を与えよう。お前はこれから火の魔法はすべて使える身となる。」

「うわー！ キルケが聞いたら泣いて口惜しがるかも？」

「コレでオレは火もスクウェアだ！！」

「ありがとうございます。フレイム様。では、次は、風の精霊様です。」

「おおお、我じゃ」 「我は最後か？」

「お待ちください。土の精霊様。出来る限り良い真名を考えますので、御待ちください。」

「ウム、良い。待とう。我の真名じゃ。」

「ありがとうございます。では、風の精霊様の真名です。」

「おお、楽しみだぞ」

「サーバーウィンド様です。意味は烈風と読みます。」

「おおお。我にピッタリじゃ。気に入ったぞ。タロウ・ヤマダ。」

「お気に召して嬉しく思います。」

「ウム、感謝するぞ。我が盟友よ。」

「お待たせして申し訳ありませんでした。土の精霊様。」

「ウム、我じゃな。楽しみにしてたぞ。」

「土の精霊様の真名は、ランド様です。意味は土地と呼びます。」

「おお、気に入ったぞ。我はランドなり。感謝するぞ。我が盟友、タロウ・ヤマダ。」

「お気に召して頂き、感謝します。これですべての精霊様の真名をお渡し出来ました。」

「」「」「ウム、感謝する。我が盟友、タロウ・ヤマダ。」「」「」

「まだ我が居るぞ！！（怒）」

「」「」「おお。虚無の精霊殿か？」「」「」

「虚無の精霊様ですと！申し訳ありませんでした。」

「良い。タロウ・ヤマダ。我にも真名を与えてくれるのだろうか？」

「モチロンです。虚無の精霊様。少しでも御待ちください。」

「ウム、待とう。」

何てこった！まさか虚無の精霊様まで来るとは？
原作でも出なかった精霊様だど？どうしょ？でも・・・虚無ならアレ

しか無いな？

「お待たせしました。虚無の精霊様。貴方の真名は・・・ゼロです。虚無にはゼロが一番と思います。」

「ウム、我はゼロなり。気に入ったぞ。盟友、タロウ・ヤマダ。礼としてお前に虚無属性をすべて使える様にしよう。」

げっ！虚無まで貰ってしまった。ま、他人に漏らさなければ良いか？

「ありがたき幸せです。ゼロ様。」

「良い。我はこの世界でも滅多に現れぬ精霊なり。現世に出たのも六千年ぶりだ。」

「と、言いますと、ブリミルと関係が？」

「アヤツは好かぬ。アヤツは我を従属させようとした。よって我はアヤツの使い魔にリーヴスシルのルーンを与え、ヤツを排除した。」

何てこった。ブリミル最後の真相が虚無の精霊の仕業だったとは。」

「そうでしたか・・・。」

「ウム、お前がブリミル教を滅ぼしたのには六千年ぶりの快感だったぞ。

それも民に犠牲を出さずにだ。お前こそ、我の属性をすべて与えるに足る人物だ。

虚無魔法はすべてお前のモノとなる。」

「おお。アレを見てくれたんだ」

「アレを見てくれたのですね。ゼロ様。」

「ウム。まさに虚無使いに相応しい戦いだった。タロウ・ヤマダ。お前こそが虚無の使い手なり。」

「ありがたき幸せです。ゼロ様。そう言えば大陸隆起はどうしましょう。」

「アレならば心配は要らぬ。既に風石はお前の領地の山にすべて移転した。存分に利用するが良いぞ。タロウ。」

風の精霊様が既に手を打たれてた。アリガテー♪

「感謝いたします。サーバーウィンド様。」

何か凄い事になってしまった。

四系統に加え、虚無まで使えるとは。

ま、便利な道具として非常時に使うか？

「「「「それで良い。魔法は道具で良いのじゃ。」「」「」」

「ウワ。聞こえてたのですね？精霊の皆様。」

「「「「「そうじゃ、我等はお前の盟友なり。困ったら何時でも頼るが良い。」「」「」」」

「ありがとうございます。では、そろそろ夜も遅くなりましたので、解散させて戴きます。」

「「「「有意義な夜であった。盟友、タロウよ。」「」「」」

「おやすみなさい。アクア様、サーバーウィンド様、ランド様、フレイム様、ゼロ様。」

「「「「また会おうぞ、タロウよ。」「」「」」

何か凄い事になったな？

まさか虚無の精霊様まで出現するとは。

そしてブリミルの死の真相まで聞けるとは思わなかった。

やっぱり虚無属性が滅多に出現しなかったのは、嫌われてたからだろう。

こうしてカオスな夜は終わった。

宿に帰るとグツタリと寝たのは言うまでも無い。

精霊達との集い（後書き）

リーヴスラシルのルーンの勝手な解釈です。

自分のSSでは虚無の精霊から嫌われてたから虚無は現れなかったと考えました。

大陸隆起は既に解決してました。

ゼロをゼロに。(前書き)

虚無使いを消しました。

ゼロをゼロに。

タロウです。

昨夜はカオスでした。

まさか虚無の精霊様まで来るとは。

おかげで自分もゼロです。ハイ。

四系統に加え、虚無ですよ。

どんだけチートなの？

ま、戦争には使われたく無いので、誰にも言いませんがね。
オッ、いい事思いついた。

「ルイズ、提案がある。」

「何でしょう？タロウ様。」

「お前、虚無でロクに魔法を使えないのと、

虚無諦めて、普通の系統魔法使いになるのでは、どちらがいい？」

「意味が分かりませんが。」

「つまり、お前から虚無の属性を取り除き、お前の母上と同じ風の魔法使いに出来るのだ。

今ならな。

幸いにも多くの精霊様と親交を得た。

ある精霊様の提案で、お前を普通のメイジにしたら？

と言われたのだ。今のままでは、コモンしか使えないだろ？大っぴらには。」

「・・・確かに。虚無では戦争以外には使い道がありません。学園で

も未だにゼロのルイズと呼ばれてます。」

「で、だ。お前の身体から虚無の属性を取り除き、風使いと出来る。どうする？ルイズ。」

「お願いします。」

「使い物にならない虚無よりは、風使いがいいです。」

「キマリだね。」

オレはゼロ様をお願いし、彼女から虚無系統を抜いて貰い、代わりにサーバーウィンド様に風の系統を入れてもらった。

彼女には何かが入ったとしか感じられなかっただろうが。

「ルイズ、お前の身体に、今、風の精霊様の加護が入った。お前は今から風のメイジとなる。まずはコモンのウィンドを唱えて見よ。」

「ほ、本当ですか？では・・・ウィンド。」

ルイズが杖を揮い、魔法を詠唱すると、杖から風が巻き起こった。竜巻とは言わないが、かなり強烈なのが。

「お前、全開にしたな？加減しろよ。以前教えた水鉄砲の要領だ。」

「す、すいません。でも本当に使えた。嬉しいです。」

「ウン、お前の母上にしっかりと指示して貰え。」

風の魔法なら彼女がハルケギニア最強だからね。」

「ハイ。帰国したら母にお願いします。」

ヨッシャ。これでルイズから虚無は消せた。

テファはオレの嫁だし、ジョセフは魔法に興味無くしてる。

ヴィットーリオは食べるのに精一杯で、虚無も忘れてる。

ゼロ様に頼んで彼等からも虚無の系統を抜いて貰おう。

「ゼロ様、ありがとうございます。これで彼女も惑わされる事は無くなったと思います。」

「ウム、良い。ハルケギニアの人間には虚無は過ぎた魔法だ。

我も出来る限り、伝承させるべきでは無いと思ってる。」

「その通りです。自分も虚無は他人には漏らさないつもりです。」

「それが良い。所で、タロウ。他の使い手の事も考えてるな？」

「その通りです。出来ましたら彼等からも虚無を無くして欲しいのです。」

「そうか……。では今宵にでも抜いておこう。」

「お願いします。」

ヨッシャ。これで大丈夫。

やはり虚無だけは恐い。

特にジョセフみたいに狂ってしまったら、世界が破滅だ。出来たら永劫に封印するべきだよな。

「ゼロ様、自分の虚無ですが。」

「心配するな。お前一代で消える様にしてある。お前の子孫には絶対に伝承させぬ。」

「ありがたい事です。不安でしたので。」

「少なくとも我の意識が続く限りはお前以外には虚無は伝えぬ。」

「ありがてゝ」これでオラの子供に虚無使いは出ないと確約して貰えた。

やはり虚無は核爆弾だもんな。怖いよ。

オレはルイズとゼロ様との会合を終えると、エルフとの交渉に入った。

基本的にガラクタ扱いなので、自分で運ぶなら全部あげる。その代わり定期的に小説と完成した場違いな工芸品を輸出。それでヨシとなった。

オレは聖地と呼ばれる場所に連れて行ってもらったが、ビククラだぜ。

何と、「戦艦武蔵」があったのだ。

大和ばかりにスポットが当たっているが、無頼の強靱を誇った最強戦艦武蔵。

シブヤン海に沈んだが、今でも沈没点を特定出来ない幻の戦艦。それが、ハルケギニアにあるとは？

オレはエルフに、今後、聖地に現れた場違いな工芸品はすべて渡せと言った。

彼等にして見たらガラクタでしか無いので、OKとの事。

オレはワールドドアを開け、すべての武器等を自分の居住地、ラ・フォンティーヌに転移。

向こうではコルヴェールが狂気してる事だろう。

俺たちもワールドドアでエルフの国から一気に帰国したのは言うまでも無い。

さって、戦艦武蔵か・・・。

アレ使うならアレしか無いな？

ゼロをゼロに。 (後書き)

聖地から転移した戦艦武蔵の運命はどうなるのか？

大半の方は答えは分かっていると思いますが、想像通りです。
次回をお楽しみに♪

空中戦艦武蔵。(前書き)

想像通り武蔵を飛ばしました。

空中戦艦武蔵。

タロウです。

自分は今……猛烈に……。

感動しています。

まさか、リアルに宇宙戦艦モドキを実現出来るとは思いませんでした。

「タロウ殿、この炎蛇のコルヴェール、この巨体が宙を飛ぶとはそれを浮かせられる風石があるとは……。感動しました。」

「自分もです。コルヴェールさん。この巨艦は自分の世界の海の王者でした。」

まさかこのハルケギニアにあるとは……」

そう、前回、聖地で発見した戦艦武蔵を風石にて空中戦艦にしてしまったのです。

爆発して無かったせいか、程度は悪くなく、虚無の復元魔法で、復元させてしまいました。

（虚無にあったと言うムリ設定魔法です。）

他にも原子力潜水艦とかがありましたが、ヤバイので解体してしまいましたよ。

それよりも戦艦です。。

この巨体、そしてハッタリの利くゴージャスなボディと巨砲。

まさに芸術です。

「先生、凄い巨体ですね。これ、城よりも大きいのでは？」

「全長が270メートル以上、重さ60000トン以上、46サント三連装主砲を三門装備。

その他対空砲多数装備。まさに海、いや今は空の王者ですな。」

「素晴らしいです。でも、戦争も無いのに何故？」

「ハツタリですよ。軍隊の本当の役目は戦争をする事ではありませんせん。」

万一の時に備え、装備を整え、海外の国に攻めるとケガするぞ！と脅すのが商売なんです。

実際の戦争をするとお互いがタダでは済みません。恫喝こそが軍隊の本当の仕事なのです。」

「タロウ殿、このコルヴェールも同感です。抜いてはならない軍備こそが、軍人の仕事。」

このムサシも抜かない刀なんですな。」

「その通りです。常時、この軍艦が遊弋してたら、この国に攻め込むバカは絶対に居ないでしょう。」

トリステイン上空にムサシ在りこそが、この戦艦の最大の仕事です。バカな使い方出来る位の風石があるからこそ出来る遊びですけどね。」

そう。

大陸隆起するハズだった風石を纏めてド・オルニエールの山に転移してくれた精霊様のおかげです。

この戦艦を浮かせられて、遊弋させられるなんて、普通なら不可能。今や我が領はハルケギニア一の風石産地です。

アルビオンとの交易も毎日可能となりました。以前は港町だった、ラ・ロシエールも今は田舎となり、ド・オルニエールが新しい港町となったのです。

母上からは、ラ・ヴァリエール領も任せると言われ、今やヴァリエール領の領主代行です。

父上は王都に赴任し、王都で王の代行をしております。

アンリエッタがウエールズに嫁いてしまったためです。

そしてこのムサシ就航が、トリステインの飛躍にも繋がりました。

何せ、この世界最強、最大の戦艦が空を飛び睨みを利かせているのです。

艦長はグラモン元帥。機械の操作はコルヴェールが仕込んだギーシユ・ド・グラモン。

彼もこの戦艦の乗員になれる事に異様に感動した一人です。

「ギーシユ親子よ。お前達の使命はこのトリステインの空を遊弋し、不埒な事を考える気を無くす事だ。

コチラから攻撃する事は絶対にしてはならぬぞ。ムサシなら敵の攻撃など虫に挿されるよりも軽い。

ただし二撃目からは反撃してヨシだ。」

ヴァリエール王代行からのムサシ就役に対する説明だ。

オレは外からムサシの飛行を眺める事にしたのだ。

「エネルギー充填百パーセント、ムサシ、浮揚！」

その日以来、ハルケギニアの守護神としてムサシはトリステインの大空の王者として国民、

並びにハルケギニア全土に知れ渡る事になった。

空中戦艦ムサシ。
アレが在る限り、ハルケギニアは攻めてはならぬが他国空軍の合言
葉となった。

空中戦艦武蔵。（後書き）

復活魔法は才り設定の虚無です。

そして・・・
(前書き)

最終話です。

そして・・・

タロウです。

ムサシ就航以後、トリスティンの経済は好調です。

理由、そりゃ他国からのチョツカイが消え、舐められなくなったからですよ。

国にとって舐められないと言うのは重大な事です。

アンリエッタが嫁に行ったのは国に取っては幸いでした。

彼女ではいずれ国が滅びてたと思います。

そしてヴァリエール王家となり、前王妃のマリアンヌ妃は正式に王家から引退。

国を放り出したのですから当然でしょう。

王家もヴァリエール公爵が正式に王に就任し、マザリーニが副王。

軍事、政治、王家すべてがガツチリと固まりました。

そしてカリーヌは正式に王妃就任。

ヴァリエール一家は王家となったのです。

ギーシュは正式に軍に任官。

ムサシの操舵主任士官となっています。

自分ですか？

一応、ヴァリエール公爵となりました。

ですが、相変わらずフュギアを作って販売。

ついでに色んな本を出版しています。

最近のヒットはフライデエですね。

十人程度の記者を雇い、その記者に色んな取材をさせるのです。

貴族が市民に無謀を働いたら真っ先に掲載。

詳しい絵も添えて証拠もあるので、警察よりも役立つと思います。

ルイズは王家の息女となり、次期王妃は確定です。
誰と婚姻するかは不明ですが。

「相棒・・・。」

「何だ？ダメ剣。」

「そりゃねえよ。相棒。」

「しかしヒマだね。」

「おおよ。オレ様もそう言おうとしてたのに・・・。」

「平和ならヨシだよ。戦争は何も生まない。平和こそオレは望むね。」

「だがよ、オレ様はタダの錆剣になるぜ。このままじゃ。」

「ま、オレの家宝にしたるから我慢しとけ。
お前が居たから生きて来れたのだからな。」

デルフとバカな会話してるオレだが、本当に平和になった。
トリステイン空軍は向こう千年は戦艦ムサシが遊弋出来る風石を保
持。

他国の連中もトリステインには逆らえなくなってる。
アルビオンとの交易は順調。

毎日交易出来るので、アルビオンとトリステインは同じ国と一緒だ。
やはり膨大な風石は宝だな。ウン♪

俺たちはその後平和に暮らし、六人の嫁との仲も平和に進む。

オレはやがて老衰となり、妻、息子や娘、孫に囲まれ、
段々意識が途切れて来た・・。

「タロウ様、帰って来て~~~~!!」

「アンタ、何でワタシより先に逝くの？」

「お兄様、お兄様~~~~!!」

「お父様~~~~!!」

「爺ちゃん~~~~!!」

家族や妻の悲痛な絶叫を聞きながら、オレはこの世を去ったらしい・・。

ピッピッピ・・・。

規則正しい電子音が聞こえる。
何だ？コレは？

ナンダ、コレハ？
オレハコノヨをサツタノデハナカタカ？

気が付くとオレは多くの管が繋がれ、全身を包帯で巻かれたミイラ
みたいになってた。

手足は無い。

声を出すと、ヒューヒューと空気が漏れる音のみ。
どうしてこうなったのだ？

（タロウよ。気づいたか？）

その声はネ申様？

（そうじゃ。お前は召喚される寸前、本当は事故に逢ってたのだ。
そしてお前の現世での時間は止まり、ハルケギニアでの人生を終わ
った瞬間に
この現世にと帰って来たのだ。）

そうだったんだ。道理でムチャ出来ると思った。

（お前は良く頑張った。滅び行くハルケギニアを平和にし、多くの
家族も得た。

そのお前に褒美を与えよう。）

そりゃありがたいですが、この身体ではね・・・

（もう一度召喚されるのだ。お前は。）

ゲッ！！またルイズに？

それに礼ですら無いですよ。
むしろ罰です。

（スマヌが、それも理なり。ルイズに召喚されるのは避けられぬの
だ。）

はああ。ま、仕方ないです。諦めますわ。

（この身体はどうする？）

もう逝かせてあげてください。手足も無い体では、生きてるのも苦痛です。

（分かった。

お前が召喚される時は健全な肉体&前世のハルケギニアで得た知識と魔法はすべて付帯させる。）

またチートですか？

次回は黙って使い魔して暮らします♪

（好きに生きるが良い。タロウ。ではご苦労だったな。）

あんがとでっす♪んじゃこの身体を逝かせてね。ネ申様。

（任せよ）

何か死んだり生き返ったり、また死んだり。忙しいね。ホンマに。

しかしまたルイズか。。

次はどう生きよう？？

考えてたら召喚されたい。

「アンタ誰？」

F
i
n
e

そして・・・（後書き）

思い画いてたラストにたどり着けました。
平和な終わり方が出来て幸いです。
では、また次で頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3035u/>

ゼロのキモ男

2011年7月30日07時30分発行